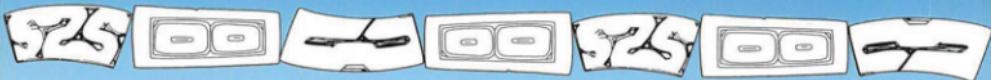


紀要

沖縄埋文研究 4



発掘調査概要

池田上原古墓 西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター (1)

論考

型式比較による南島爪形文土器の位置づけについて 伊藤 主 (41)

新城下原第二遺跡II地区下層出土の動物遺体にみられる傷痕

久貝 弥嗣 (55)

首里城跡出土銭貨の銭種構成について 長濱 健起 (73)

西表島・船浮要塞跡の実態と現状 伊波 直樹・山本 正昭 (81)

報告

大韓民国 済州島考古紀行 岸本 義彦 (105)

沖縄先史時代の貝文化 安里 瞬淳 (111)

マレーシア・シンガポール海洋関係博物館見学会の記録

片桐 千亜紀・宮城 弘樹 (127)



2006年

沖縄県立埋蔵文化財センター



写真1 遺跡全景



写真2 貝輪



写真3 貝製品

平敷屋トウバル遺跡（へしきやとうばるいせき）

平敷屋トウバル遺跡は、うるま市（旧勝連町）の平敷屋に所在する沖縄貝塚時代前期からグスク時代にかけての複合遺跡で、勝連半島の先端部砂丘に立地している。

1992年から93年にかけて発掘調査が実施され、沖縄貝塚時代前期・中期・後期及びグスク時代の遺物包含層や遺構が検出された。また、遺物も膨大な量が出土し、土器や石器、貝製品など多種多様にわたっている。特に後期の土器は尖底土器が下層に多く、平底土器が上層に顕著に見られ、層位的に尖底土器と平底土器の先後関係が把握できたことは特筆すべきことである。

貝製品もゴホウラ製・イモガイ製の貝輪や貝札などの装身具やスイジガイ製利器や二枚貝製貝刃などの実用品が数多く得られている。なかでもイモガイ製横切り貝輪は製作途上のうかがえる資料も出土しており、貝輪の製作過程を知るうえでの貴重な資料となっている。

当該遺跡は、沖縄でも数少ない複合遺跡をなし、各時期の遺構や出土遺物をとおして当事の社会的、文化的状況を解明していくうえで欠くことのできない重要な遺跡である。

（岸本義彦）

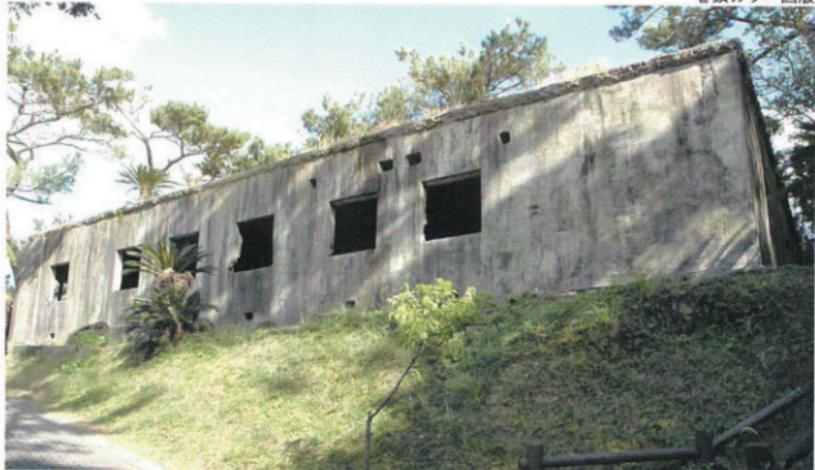


写真1 加計呂麻島 安脚場戦跡公園内 金子手崎防備衛所

写真2 加計呂麻島 三浦地区
海軍給水ダム

奄美大島要塞戦争遺跡群

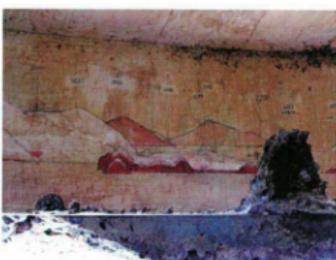
(あまみおおしまようさいせんそういせきぐん)

当該戦争遺跡群は、現在の大島郡瀬戸内町内に広域的に分布する戦争遺跡群である。

奄美大島要塞は1921年（大正10）に旧日本軍の太平洋上の国防拠点として小笠原の父島、台湾の澎湖島とともに第一線要塞に策定された本格的な要塞施設である。要塞区域は大島海峡を挟むように奄美本島の南西部と対岸の加計呂麻島が対象区域であり、要塞司令部が設置された奄美本島側の古仁屋地区を中心に、大島海峡南北口を監視・防衛するため造られた大砲陣地や、観測所（写真3）、給水ダム（写真2）等、陸海軍の多種多様な施設が戦時中、広域的に構築され、現在も良好な形で多数残存する。

当該地域で構築されたこれらの戦争遺跡は、その種類・規模・強度等を見ても、旧日本軍において奄美諸島が戦略的な重要性を有していたことを窺わせる。そして、未だ確認されない戦争遺跡も多数存在する可能性が高く、今後において、本格的な調査が期待される重要な戦争遺跡群といえる。

（伊波直樹）

写真3 西古見地区 観測所跡内部
内壁に描かれた地形図

沖縄埋文研究

第4号

目 次

巻頭カラー図版

平敷屋トウバル遺跡

奄美大島要塞戦争遺跡群

発掘調査概要

池田上原古墓 西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター 1

論考

型式比較による南島爪形文土器の位置づけについて	伊藤 圭	41
新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層出土の動物遺体にみられる傷痕	久貝 弥嗣	55
首里城跡出土銭貨の銭種構成について	長濱 健起	73
西表島・船浮要塞跡の実態と現状	伊波 直樹・山本 正昭	81

報告

大韓民国 済州島考古紀行	岸本 義彦	105
沖縄先史時代の貝文化	安里 喬淳	111
マレーシア・シンガポール海洋関係博物館見学会の記録	片桐 千亜紀・宮城 弘樹	127

池田上原古墓

～個人墓新築に係る緊急発掘調査報告～

Ikeda-Uehara Tomb

-A Report of Excavation Resulting from Personal Tomb Construction-

西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター

Nishihiara Board of Education / Okinawa Prefectural Archeological Center

ABSTRACT: The Ikeda-Uehara tomb was discovered in 2004 in the process of new tomb construction, and was excavated for the purpose of data recovery. The tomb is so called 'Fincha Tomb', dug into a sandstone layer, with its entrance sealed with piled stones. The chamber is furnished with three high shelves along the back and side walls where two stone urns and three ceramic urns were placed. In the course of the excavation, smoking pipes and hairpins were found in good condition, as well as skeletal remains in the urns. The Ikeda-Uehara tomb represents the tomb style of Pre-Modern and Modern periods in Okinawa. This paper presents the results of the excavation.

目次と文章担当

1.はじめに.....	(片桐) 2
2.調査に至る経緯.....	2
1) 調査に至る経緯.....	(玉那霸) 2
2) 調査体制.....	(玉那霸・片桐) 3
3) 調査経過.....	(片桐) 4
3.遺跡の位置と環境.....	(玉那霸) 4
1) 地理的環境.....	4
2) 歴史的環境.....	6
4.遺構.....	(片桐) 10
1) 立地と調査経過.....	10
2) 形態的特徴.....	10
3) 蔵骨器の配置と様相.....	10
5.遺物.....	24
1) 蔵骨器.....	(片桐) 24
2) 煙管.....	(崎原) 25
3) 脣.....	(宮平) 26
4) 指輪.....	(崎原) 26
5) その他.....	(片桐) 26
6.銘書判読.....	(井伊) 38
7.人骨調査.....	(土肥) 38
8.まとめ.....	(片桐) 38

1. はじめに

本報告は平成16年度に西原町教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが協力をして実施した池田上原古墓の発掘調査成果をまとめたものである。発掘調査は平成16年11月16日～11月26日まで、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて平成16・17年度に実施した。

事業の実施にあたっては、沖縄県教育庁文化課の島袋洋氏（当時、係長）、中山晋（専門員）、沖縄県立埋蔵文化財センターの安里嗣淳（当時、所長）、盛本勲（当時、調査課長）から貴重な御助言や御指導をしていただいた。

現地調査で得られた遺物や実測図・写真・画像デジタルデータ等の各種調査記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管しているが、本紀要の刊行後は西原町教育委員会にて保管する予定である。

2. 調査に至る経緯

1) 調査に至る経緯

平成16年9月9日、西原町字池田上原813-1の土地において墓地造成工事中に、小波津敬氏（字小波津406）によって古墓が発見され、2004年（平成16年）9月10日、西原町行政オブズマンの玉那覇三郎氏を通じて遺跡（古墓）発見の連絡が生涯学習課文化財係に入った。

当該発見遺跡の今後の取り扱いについて、西原町の文化財保護審議委員である當眞嗣一氏（沖縄県立博物館長）に相談した結果、県教育庁文化課の指導を受けるよう助言された。9月14日、県教育庁文化課記念物係を訪ね、島袋洋氏（当時、係長）、中山晋氏に池田地内発見の遺跡の現場合同調査を依頼し、同日、午後4時から午後6時までの間、字池田地内発見の遺跡（石棺等）の合同現場調査を実施した。当該調査後、沖縄県教育庁文化課から文化財保護法第57条の5の規定に基づく届出並びに遺失物法に基づく警察署への届出等についての事務手続きについて指導を受けた。また、当該遺跡の発掘調査について、技術的支援並びに合同調査を県文化課に要請したところ、「発掘調査のための経費（50～60万円程度）」を予算措置するようにとの指示も受けた。

当該発見の遺跡については、発見者が個人であること、また、墓の建設工事に関係していることから、ユンジチ（閑年）である年内に墓建設を完了しなければならない（沖縄の風習）など特殊事情等があつたので、記録保存のための緊急発掘調査として対応の検討を重ねた結果、町単独の予算を確保して、沖縄県教育庁文化課の指導に基づく県立埋蔵文化財センターの支援協力を得て、発掘調査を実施することが決まった。

その後の経過概要是以下のとおりである。

- 9月15日、当該遺跡発掘調査費の予算計上の説明のため、波平常則西原町教育長を遺跡発見現場へ案内し状況を確認させる。
- 9月15日付け、遺跡発見者の小波津敬氏（字小波津406）、文化財保護法第57条の5の規定に基づく「遺跡発見の届出」を西原町教育委員会へ提出する。
- 9月16日付け、西教生第386号により「遺跡発見の届出」を沖縄県教育委員会（教育長 山内彰）へ進達する。
- 9月27日、県教育庁文化課記念物係 島袋洋氏（係長）へ予算計上のための見積（遺跡調査）資料の提供を電話で依頼する。生涯学習課文化財担当、当該遺跡発見場所付近について台風21号による影響での土砂崩れの有無を確認調査する。
- 10月6日、9月29日付け教文第857号による、沖縄県教育委員会からの遺跡の発見についての回答文書を受理したので、同日付け、西教生第429号により、小波津敬氏（字小波津406）へ遺跡の發

見についての回答文書を伝達する。

- 10月22日、生涯学習課長（呉屋），文化財担当で、発見遺跡の調査に備えるため発掘道具の保管状況を確認する。
- 10月22日、生涯学習課長、文化財担当で沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長 盛本勲氏に面会し、支援ならびに助言を求める。
- 10月22日、生涯学習課長、文化財担当で遺跡発掘調査に必要な道具の価格調査を行なう。
- 10月25日、西原町池田自治会長 喜屋武光廣氏に対して、発掘調査作業員3名の斡旋を依頼する。
- 10月26日、県教育庁文化課記念物係 島袋洋氏へ遺跡調査のスケジュールを電話で確認するが、計上予算を基に、沖縄県立埋蔵文化財センターと調整したいとの回答を受ける。
- 11月2日、県教育庁文化課記念物係 中山晋氏が本町生涯学習課を訪ね、遺跡調査の進め方について確認された。同日、文化財担当から県文化課の中山晋氏に同行をお願いし、沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長 盛本勲氏に遺跡調査への協力を依頼する。
- 11月4日、文化財担当、沖縄県立埋蔵文化財センター盛本勲調査課長で遺跡発見現場の状況を確認調査する。
- 11月11日付け、西教生第511号により、遺跡調査に係る埋蔵文化財専門職員の派遣方について、沖縄県立埋蔵文化財センターへ依頼する。
- 11月12日付け、埋文第393号により、沖縄県立埋蔵文化財センターから遺跡調査に係る埋蔵文化財専門職員の派遣方についての回答文書が届く。この回答により、遺跡調査は平成16（2004）年11月16日～11月26日の間、沖縄県立埋蔵文化財センターから派遣された専門員の指導の下、実施されることになる。

2) 調査体制

発掘調査は沖縄県立埋蔵文化財センター及び独立行政法人琉球大学医学部解剖学第一講座の協力を得て西原町教育委員会が主体となり、平成16年11月16日（火）～平成16年11月26日（金）まで実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体	西原町教育委員会	教育長職務代行者	糸数 善昭
事業事務	生涯学習課	課長	呉屋 清
	タ	文化財係長	玉那霸 力
	タ	嘱託員	喜屋武 雄
調査指導	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課長	盛本 勲
	琉球大学医学部解剖学第一講座	助教授	土肥 直美
調査員	西原町教育委員会	文化財係長	玉那霸 力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	専門員	片桐 千亜紀
	タ	タ	比嘉 尚輝（臨）
	タ	嘱託員	崎原 恒寿
調査協力	西原町教育委員会	主 事	島袋 智之
	沖縄県立埋蔵文化財センター	嘱託員	宮平 真由美
発掘調査作業員			
	伊波行常、喜屋武光廣、比屋根和徳、与那嶺良二		

資料整理協力者 沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣利津代，上原美穂子，大村由美子，荻堂さやか，久保田有美，国場のりえ，崎原美智子，平良貴子，比嘉孝子，比嘉登美子，比嘉尚樹，譜久村泰子，又吉純子，

3) 調査経過

発掘調査は平成16年11月16日より開始した。池田上原古墓は個人墓新築のため、バックホウによって岩盤を削りだす途中、岩に穴が空いて発見されたという。古墓は砂岩の岩盤に掘り込まれるフィンチャーモードで、地滑りによる土砂によって完全に埋没しており、地元の人々でもそこに古墓があったことは知らなかったようである。まず、周辺の伐採等清掃から始めた。その結果、土砂が厚く堆積しており人力による掘削では長時間を必要とすることがわかった。そのため、バックホウによって土砂の大部分を掘削した。その後、壊れた天井から入り墓内の掘削を行った。墓内は思った以上に棚が高く、入口全部が土砂で埋まっていたため多量の土を掘削したが、墓内が狭いためスコップを使うことができず、時間のかかる地道な作業となった。墓内の掘削によって内側から入口とその厚さを知ることが可能となり、そこを目印に外側の掘削を開始した。岩盤が固い砂岩だったため、スコップによって土砂の掘削を行い、外側の入口や前庭部を検出した。前庭部の検出中に瓶が1点出土した。入口は石を積み並べており、裏込として礫を詰めさらにクチャを張っていた。墓内は正面と左右に高い棚があり、左側の棚にはボージャー1基と小さな沖縄産陶器壺1基が、正面の棚には石臼子2基が、右側の棚にはボージャー2基、マンガン1基が安置されていた。墓内の清掃を行った際に、正面の棚から煙管と小杯がそれぞれ1個出土した。墓内の清掃後、平面及び正面と左右の立面の実測、写真撮影を行った。

発掘調査終了後、調査記録や遺物等を沖縄県立埋蔵文化財センターに搬入し、資料整理を開始した。すでに平成16年度の資料整理計画が決まっていたため、年度内に報告するのは難しかったため、平成17年度にも引き続き資料整理を実施して、年度末に執筆・編集を行い報告した。

3. 位置と環境

1) 地理的環境

西原町は、沖縄本島中部南端の東海岸側に位置し、その北端が北緯26度15分12秒、南端が北緯26度12分24秒、東端が東経127度47分30秒、西端が東経127度44分6秒である。東西約5.8キロ、南北約5.1キロで、面積が約15.57km²。北は中城村・宜野湾市と、西は浦添市・那覇市と、南は南風原町・与那原町と接し、東は中城湾に面する。

地形的には、低地部と丘陵部に大別される。低地部は、中央部で若干丘陵部に食い込んでいるが、大体町の東半分を占め、小波津川をはじめ数本の川が東へ流れているが、大きな川はない。また、各川とも勾配は極めて小さく、したがって流れもゆったりしている。

掛保久・小那覇集落の東には旧日本軍の飛行場があった。さらにその東側の海岸には、昭和40年代に公有水面の埋め立てによってできた土地がおよそ666,027m²（南西石油株式会社敷地部分）あり、さらにその南側隣接海岸部分には平成8年4月以降着工（マリンタウンプロジェクト=MTP）された124ha（西原町部分は60ha）によぶ広大な埋立て地がある。

丘陵部は、ほぼ町の西半分を占め、シルト質泥岩や砂岩を主とする新第三紀島尻層群が広く分布し、その岩質から盆地（丘陵地を刻んだ谷幅の広い深い谷）の発達がみられ、その谷底には基盤岩の風化土壤（方言名・ジャーガル）が堆積している。丘陵地にある坂田小学校付近には、東流する川の流域と西流する川の流域との境界（分水嶺）が通っており、その最も低い標高はおよそ70メートル程度で

ある。与那原町との境界をなす運玉森は、標高158.1mと高くない山ではあるが、山の形の美しいことで広く県民に知られている。また、去る沖縄戦では日米両軍の間で激しい攻防戦が行なわれた場所としても知られている。丘陵と低地の境界は急斜面地からなり、両者の境界は現地においても明確に区別できる。

町内では長期にわたる気象観測は実施されていないので詳細な気候状況は不明であるが、隣接する那覇市において長期にわたる気象観測が行なわれている。本町より数キロ離れた場所での観測であるがその気候状況は、本町にもほぼあてはまると考えられる。那覇市に所在する沖縄気象台が気象観測したデータをまとめたのがある。（1961年～1990年の平均値、風速は1975年～1986年平均）月平均気温が25度以上の月が6月から9月まで4ヶ月も続き、特に7・8月は28度を超えており、5月から9月までの相対湿度は79%以上もあり、夏はかなり蒸し暑いといえる。一方、最寒月である1月の平均気温は16.0度で、冬でも暖かいといえる。また、各月の平均風速をみると4.0m以上あり、その結果、夏の蒸し暑さが幾分やわらぐが、冬は気温の割には冷たく感じられるようになる。

年平均降水量は2,000mmを超えており、かなり多い。各月とも雨は多く降っており、最少雨月の2月でも100mm以上ある。特に、梅雨期の5・6月と、台風の影響を受ける8月に多く降る。沖縄の降雨の特性としては、年平均降水量は多いが、年によるばらつきが大きい。降雨量は、5・6月の梅雨期、8月の台風期および10月上旬の秋雨前線南下の時期に集中し、しかもこれらの時期には豪雨が多い。また、雨域が狭いために観測記録に残りにくい雷雨やスコール性降雨も多い。さらに、沖縄の雨は雨滴が大きいこと、強雨型（6mm／10分以上）ほどより大きな雨滴が多くなるという（翁長1969）。

西原町内の植物分布をみると、丘陵地・低地ではヤブニッケイ・タブなど、丘陵地および斜面地ではリュウキュウマツ・オオバギ・アコウ・アカギ・ハマイヌビワ・ガジュマルなど、海岸付近にはイソフサギ・シマハママツナ・ハマササゲ・グンバイヒルガオ・クサトベラなど、人工改変地ではギンネム・タチアワユキセンダンダグサ・アフリカヒゲシバナなどが見られる。

集落の立地をみると、古い集落の大半が低地と丘陵の境界付近に立地しており、これらは水および耕作地の確保の上から有利な位置を選定した結果だと考えられる。町の中央部に位置する低地帯は、水田からサトウキビ畑へと変化はしているが、王府時代から現在まで常に本町における農業生産の中心地であることからも理解できよう。一方、丘陵地にある上原集落は、気象面（霧が多発）や水の確保の面で古い集落に比較して条件的に厳しかったと推察される。上原集落付近の本格的な開発は、1970年代後半に琉球大学が移転してきて以降であり、1985年（昭和63年4月20日設計の概要の認可）に土地区画整理事業（上原棚原土地区画整理事業）が導入された後は、当該集落付近の開発が一層加速化された。町内には、北と南を結ぶ2本の幹線道路（国道329号線、県道29号線）と東と西を結ぶ2本の幹線道路（県道38号線、県道宜野湾西原線）の計4つの主要幹線道路が通っている。北と南を結ぶのは、東側を通る国道329号線と西側を通る県道29号線である。国道沿いおよびその東側には事務所、工場および製油所など事業所が数多く立地しており、町内でも最も工業開発の進んだ地域である。県道29号線は、道路拡幅や歩道設置などの整備が行なわれた結果、那覇市周辺地域の都市化現象の顕在化もあって、近年その道路沿いの開発が急速に進んでおり、特に県道38号線との交差点付近（県立西原高校付近）の開発は急激である。また、県道宜野湾西原線の敷設により、県道29号線との交差する付近から上原・棚原・坂田地区あたりへの開発は、町内でも最も住宅等の建設が著しいところであり、上原・棚原土地区画整理事業の効果で都市的住環境のまちへ大きく変容している。

2) 歴史的環境

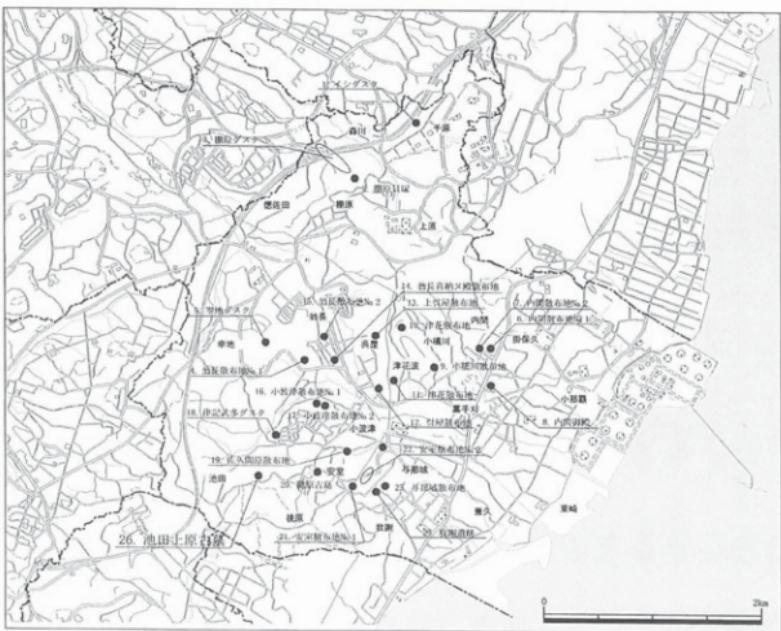
池田上原古墓群が所在する西原町は、古くは西原間切として広域に及んでいたとされる。「にし原」の意は北原とされ、広く中頭方面を指して称していたとされる。さらには南原に相対しての名称であつたとともに、首里畿内の北境の一角を形成していた村であったと記録されている。特に首里周辺に近接して位置する真和志・南風原・西原の各地域は「古くは首里三平等と呼ばれた地域であった」とされている。

村落の構成においても、各時期において間切内への編入出の変遷をたどっており、「17世紀中期ごろには、津堅島・あめく村・めかる村・泊村」と、実に現在の2市（那覇市・うるま市勝連）の一部までをも広範囲に包括していたとされる。また、西原間切は、その地域を広く覆っている肥沃なジャーガル土壤地帯を有していたことから、早くから田畠の農業生産の地として位置づけられていたことがわかる。首里に隣接した地域の一つであることも起因したと思われるが、早くから、首里王府の直轄領に組み込まれていたといわれている。このように西原という地域が古くから、よく知られた地域として、幾多にわたる歴史の流れの中に村落の変遷をたどっていった跡が分かる。

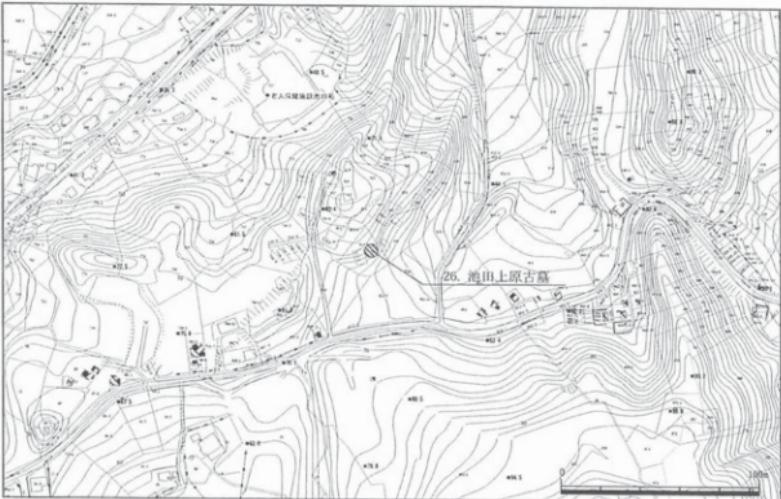
ところで、この西原地域に最初の人間活動の舞台として遺跡が形成されるのは古く、沖縄貝塚時代の前期後半の時期にまで遡りうる。表面踏査の段階ではあるが、現在の棚原集落の北東方に位置する棚原貝塚で確認することができる。しかし実質的に、この西原地域が広域的に有効的に利用されていくのは、やはりグスク時代へ入ってからで、西原平野に広がるジャーガル土壤地帯の開墾政策の始まりにもあるとされている。グスク遺跡として呼称されている中には、イシグスク、棚原グスク、幸地グスク、チキンタグスク等が存在する。現在までに確認されている遺跡の90%までが、歴史時代で中世～近世へかけての形成されたものである。小集落が点々と散在していたと考えられる。

また、西原町嘉手苅においては、第二尚氏の祖である尚円王の旧宅として知られる内間御殿の屋敷跡が存在する。東西の二殿（東江、西江）からなる。東江御殿はサンゴ石灰岩を素材として周囲を石垣で築いてある。東殿周辺からは、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦など赤色瓦と灰青色瓦の二種類が採集されている。近世期の沖縄産瓦とされている。

古く沖縄の歴史の流れの中に、首里王府との関連で、西原一帯が強力に関与していた地域の一つであったことが、ここにおいても確認できる。内間之御殿由来記に関する記録として中山家文書の中に見ることができる。



第1図 西原町の遺跡分布



第2図 池田上原古墓の位置



写真01. 古墓遠景（調査前）

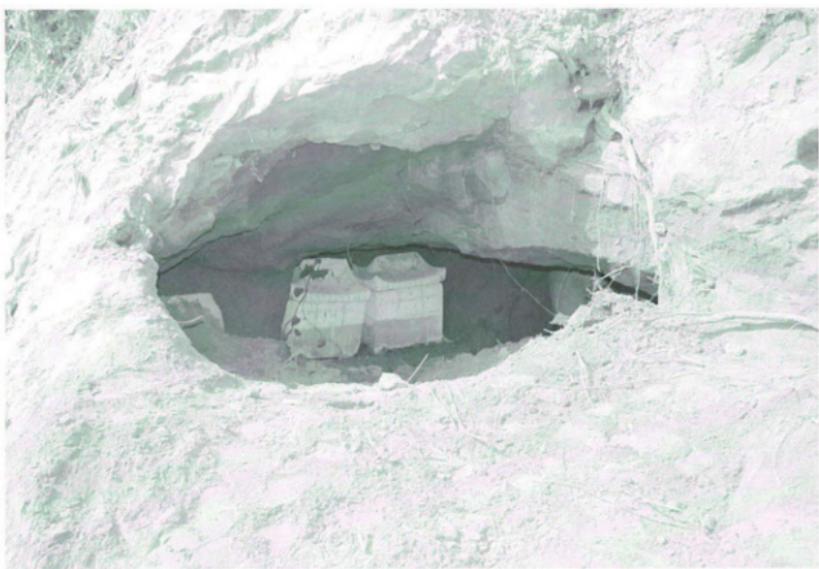


写真02. 墓室（調査前、破損した天井より）

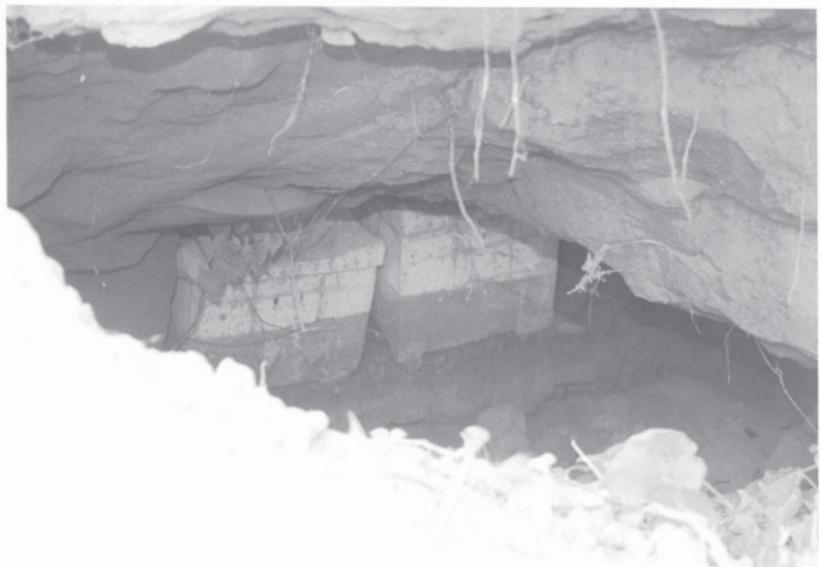


写真03. 正面棚（調査前）



写真04. 右棚（調査前）

4. 遺構

1) 立地と調査経過

池田上原古墓は微粒砂岩（ニービ）を基盤とする丘陵斜面に構築された掘込墓（フィンチャー）である。個人墓建設のためバックホウによって丘陵を掘削していた際、丘陵に穴が空き、古墓が発見された。発見されるまで土砂によって完全に埋没していた古墓であり、発掘調査前はどのような形態の古墓なのかわからなかった。発掘調査前に現地確認をしたところ、バックホウによって空けた穴は墓室の天井であり、墓室にも多量の土砂が詰まっていることがわかった。まず、外面を確認するため土砂を細心の注意を払いながらバックホウによって掘削し、最後は手堀りによって検出した。墓室の土砂は天井の穴から搬出し、墓室から入口を確認した。

2) 形態的特徴

丘陵斜面を側面垂直三角形状に切り取って前庭部を設け、平面方形状に切り取って袖部を設けている。前庭部からは沖縄産陶器の瓶が1点出土した。正面形態は半裁された楕円形状を呈する。

入口は前庭部より一段高い作りとなっており、下部にはさらに多数の石を置き、一番上には方の大きな石を配置する。前庭部と入口の段差が高いため、前庭部の入口下にさらにもう一つの石を配置し、階段状の作りとする。入口に配置された石の裏には裏込めのように小礫が混ざる粘土（クチャ）を充填している。

墓室の平面形（シルヒラシ）は入口を頂点とした五角形を呈することから、方形に構築しようとした意識が見られる。墓室正面及び左右には立方体に掘り抜いた出窓状の棚が設けられている。棚は比較的高く、約1m程である。墓室の至る所に粗い鑿痕が残っていた。

安和氏による編年では、棚が比較的高い出窓状の形態は2b類となり、古い段階に属する形態である（安和・仁王2005）という。

3) 蔵骨器の配置と様相

蔵骨器は正面及び左右の棚から合計6基確認された。正面棚には石厨子が2基（左側を蔵骨器1、右側を蔵骨器2とする。）安置されていた。右棚には中央にマンガンが1基（蔵骨器6）、その左右にボージャーが1基ずつ（左側を蔵骨器4、右側を蔵骨器5とする。）安置されていた。左棚にはボージャーが1基（蔵骨器3）安置されていた。それぞれの蔵骨器からは人骨や副葬品が確認されたが、最も保存状態が良かったのは右棚中央のマンガン（蔵骨器6）で、頭骨等が納められた状態で残っていた。その他の人骨は保存状態が悪く、明瞭に形を伺うことができないものであった。人骨調査の結果、少なくとも計12体の被葬者が埋葬されていることがわかった。

正面棚 左側の石厨子（蔵骨器1）からは副葬品として青銅製の簪が確認された。右側の石厨子（蔵骨器2）からは副葬品として木製の簪、青銅製の煙管が確認された。石厨子の周辺では青銅製の煙管雁首、真鍮製の簪、中国産白磁、近現代磁器の碗が確認された。

右 棚 右側のボージャー（蔵骨器5）からは副葬品として真鍮製の煙管が確認された。左側のボージャー（蔵骨器4）からは副葬品として真鍮製の煙管2つが確認された。中央のマンガン（蔵骨器6）からは副葬品として真鍮製の簪と指輪が確認された。

左 棚 ボージャー（蔵骨器3）からは副葬品として真鍮製の簪が確認された。厨子甕の周辺では沖縄産陶器壺と近現代磁器の碗が確認された。

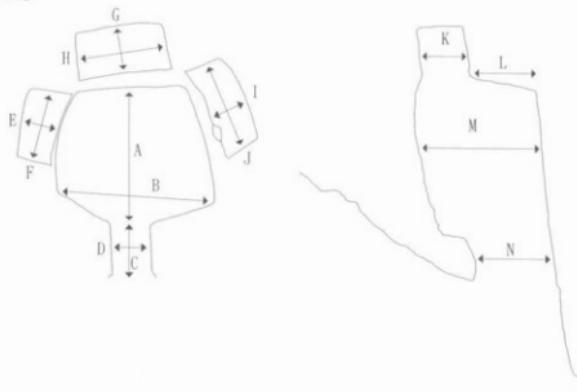
配置順序 本古墓における蔵骨器が安置された順番について見てみる。石厨子は蔵骨器の中では古い

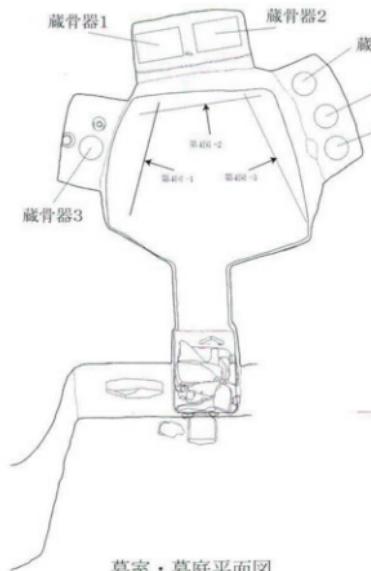
形態とされていることから、正面棚から安置していると考えられる。左右どちらの石舟子が先に安置されたのかは判断できない。次に舟子甕に書かれた銘でもっとも古い年代を示しているのは右棚右にあるボージャー（蔵骨器5、1770年）で、その後は右棚中央のマンガン（蔵骨器6、1780年）、棚を変えて左棚のボージャー（蔵骨器3、1787年）と続き、最後は再び棚を変えて右棚左のボージャー（蔵骨器4、1797）となっている。このことから、正面棚→右棚（右→中央）→左棚→右棚（左）の順番で使用・配置されており、洗骨順序による左右棚の使い分けはない。

第1表 古墓計測値一覧

計測場所		記号	計測値 (m)
シルヒラシ	奥行	A	1.80
	幅	B	2.08
	高さ	M	1.67
入口	奥行	C	0.70
	幅	D	0.53
	高さ	N	1.04
左棚	奥行	E	0.49
	幅	F	0.96
中央棚	奥行	G	0.63
	幅	H	1.20
	高さ	K	0.63
右棚	奥行	I	0.51
	幅	J	1.21
棚までの高さ		L	0.90

【凡例】

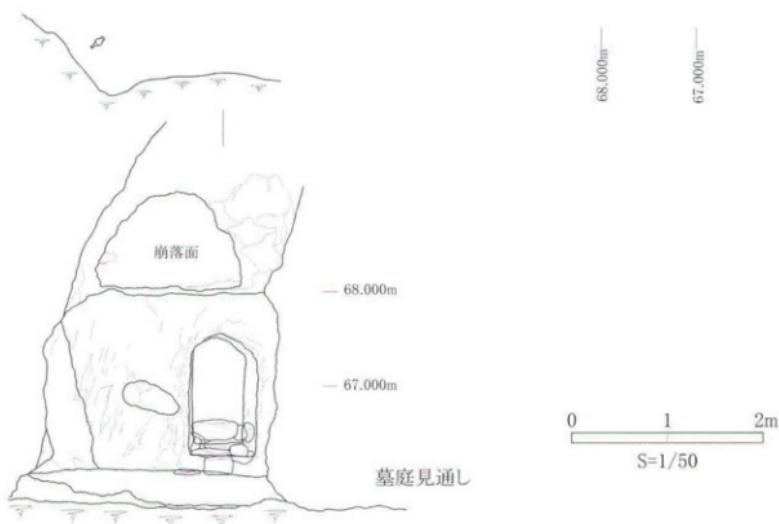




墓室・墓庭平面図

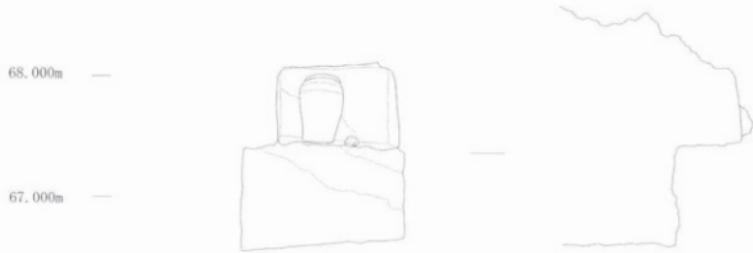


墓室・墓庭縦断図

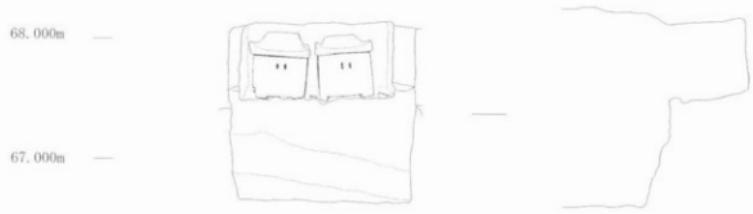


墓庭見通し

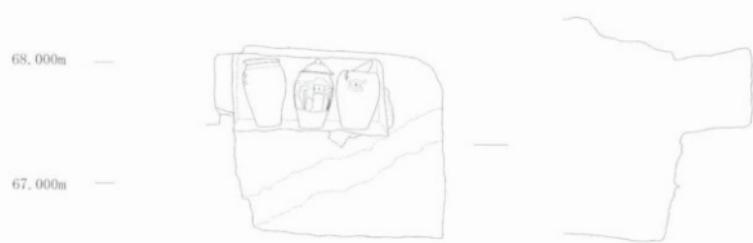
第3図 墓室・墓庭平面・縦断及び墓庭見通



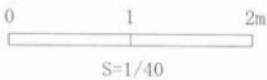
4-1 墓室左棚正面及び断面



4-2 墓室正面棚正面及び断面



4-3 墓室右棚正面及び断面



第4図 墓室棚及び断面



写真05. 古墓検出（正面）

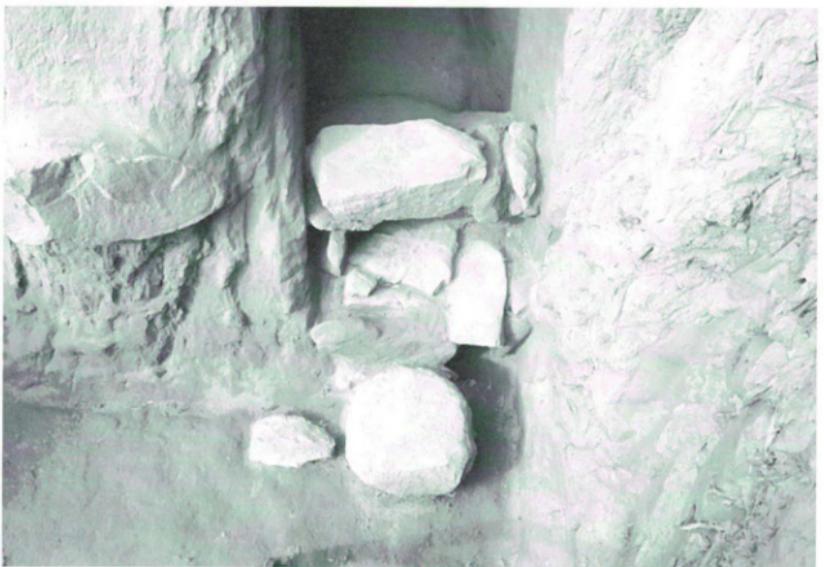


写真06. 入口検出



写真07. 入口（墓室から）



写真08. 入口裏込のクチャ除去後

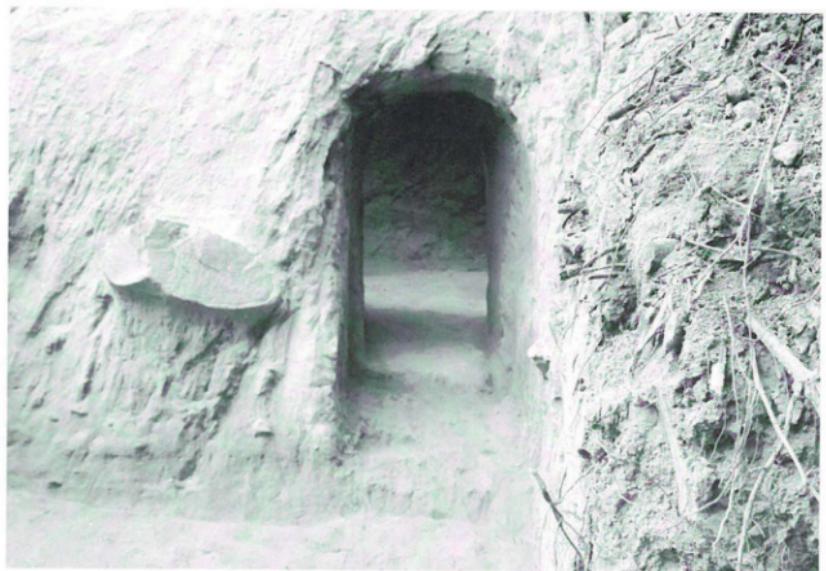


写真09. 入口完掘



写真10. 墓室検出

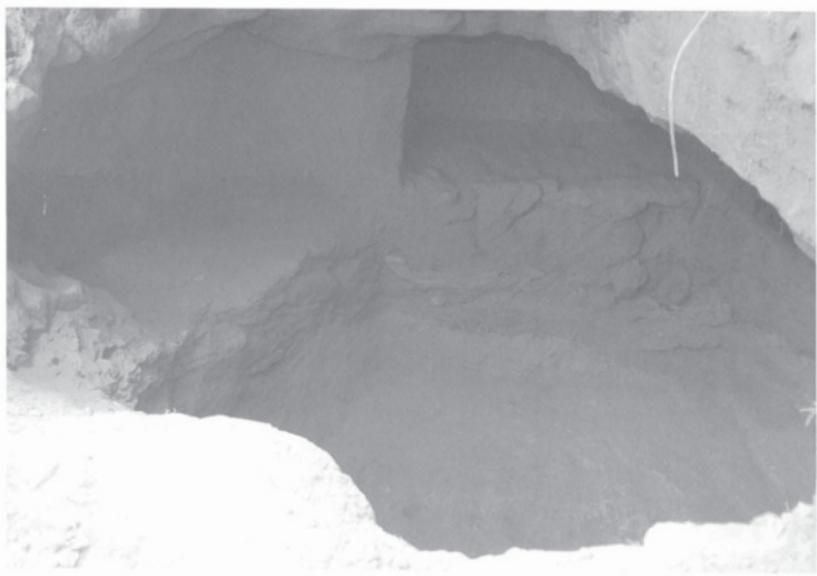


写真11. 墓室完掘（右・正面棚）

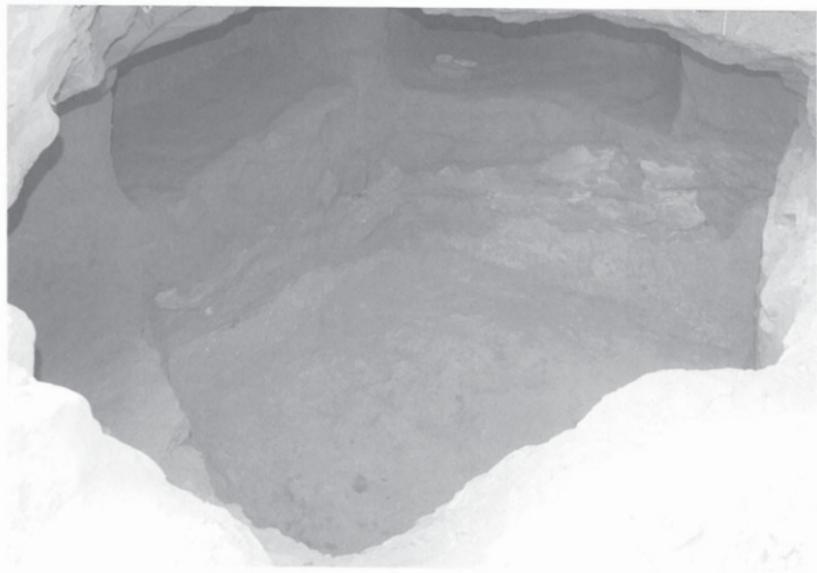


写真12. 墓室完掘（正面・右棚）

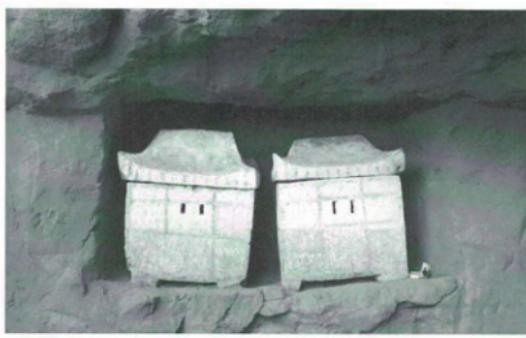


写真13. 正面棚



写真14. 左棚



写真15. 右棚



写真16. 正面棚完掘



写真17. 右棚完掘



写真18. 左棚完掘



写真19. 小杯（正面棚）



写真20. 煙管（正面棚）



写真21. 瓶（前庭部）



写真22. 人骨調査①



写真23. 人骨調査②



写真24. 簪（藏骨器 1 内）



写真25. 事前調整



写真26. 古墓周辺



写真27. 伐採



写真28. バックホウで掘削



写真29. 墓室掘削①



写真30. 墓室掘削②



写真31. 墓室掘削③



写真32. 墓室にて



写真33. 墓室正面棚清掃



写真34. 墓室実測



写真35. 入口確認



写真36. 入口掘削

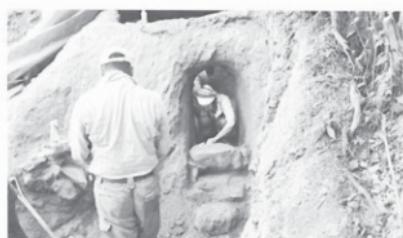


写真37. 入口調査



写真38. 入口実測



写真39. 前庭部確認掘削



写真40. 墓域確認掘削

5. 遺物

遺物は、墓室から蔵骨器（石厨子2基、ボージャー3基、マンガン1基）、煙管、簪、指輪、中国産磁器、沖縄産陶器、近現代磁器が、前庭部より沖縄産陶器が確認された。以下、それぞれの特徴について記述する。

1) 蔵骨器（第5図1、第6図3、第7図11、第8図15・18、第9図21）

蔵骨器は6基確認された。種類と数量は石厨子2基、ボージャー3基、マンガン1基である。蔵骨器の計測値については観察表に記述する（第2表）。

A.石厨子

石厨子は正面棚で2基（蔵骨器1・2）確認された。2基とも形態や法量・文様構成等が良く似ている。文様は朱色で区画が施され、黒色で草花文が施される。蔵骨器1の蓋の頂部中央には逆ハート状の文様が描かれている。

B.ボージャー

ボージャーは3基（蔵骨器3～5）確認された。胸部が緩やかに張り、肥厚する口縁部が内傾し、口唇部が丸みを帯びる。最も古いものは1770年の銘書（蔵骨器5）があり、1787年（蔵骨器3）、1797年（蔵骨器4）と続く。蔵骨器5は比較的小型である。蓋は蔵骨器4・5で確認され、宝珠が付かないタイプである。

C.マンガン

マンガンは1基（蔵骨器6）確認された。肩が張り垂直に立ち上がる頭部（口縁部）を持つ。口唇部は平坦に整える。屋門は玉飾りのない瓦屋形で柱貫が付く。胸部中央を区画する横帶は突帯によって表現され、構成が左右対称形の蓮花文が2対張り付けられている。このことから、安里進氏による編年のⅡ期（安里1997）に属する形態である。

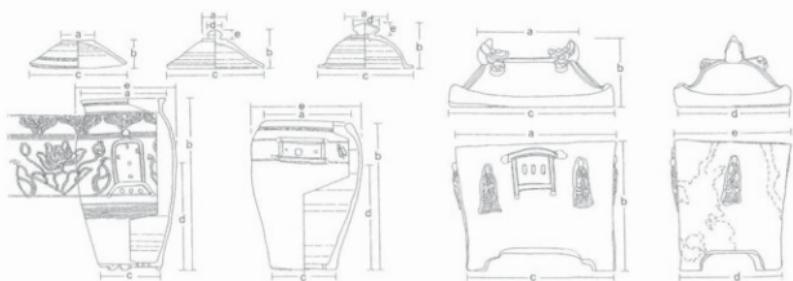
第2表 蔵骨器観察一覧

単位：cm

攝図番号 図版番号	番号	種別	蔵骨器番号	部位	計測値					人骨	副葬品	銘 書 年	書 代	出土地
					a	b	c	d	e					
第5図 写真41	1	石厨子	1	蓋	27.7	20.5	49.5	37.2	—	成人男性1 成人女性1 幼児1 乳児1	匙簪1	—	正面棚	
				身	45.7	38.2	43.7	31.2	31.2					
第6図 写真42	3	石厨子	2	蓋	28.0	17.5	50.0	35.5	—	成人男性1 成人女性1	木匙簪1 煙管1	—	正面棚	
				身	45.2	40.5	46.5	30.8	30.5					
第7図 写真43	11	ボージャー	3	身	30.4	54.5	26.3	40.0	38.5	不明成人1	花簪1	1787年	左棚	
第8図 写真44	15	ボージャー	4	蓋	10.2	11.1	33.0	—	—	成人男性1 成人女性1	煙管2	1797年	右棚左	
				身	32.1	60.1	26.0	40.0	41.4					
第9図 写真45	18	ボージャー	5	蓋	10.4	8.7	30.7	—	—	成人男性1 乳児1	煙管1	1770年	右棚中	
				身	33.5	46.7	22.5	30.0	35.5					
第9図 写真45	21	マンガン	6	蓋	11.2	15.0	30.2	5.5	5.0	成人女性1	匙簪1 指輪1	1780年	右棚左	
				身	28.1	51.0	23.7	33.1	35.7					

* 計測部位は『ヤッチノガマ カンジン原古墓群』P.82（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）にしたがう。

【蔵骨器計測部位 凡例】



*『ヤッチノガマ カンジン原古墓群』P.82 (沖縄県立埋蔵文化財センター2001) より抜粋

2) 煙管 (第6図5・6, 第7図7, 第8図16・17・19・20)

蔵骨器内より煙管の雁首5点、吸口4点が得られた。材質は陶器製の雁首1点以外すべて金属製(青銅付着)で、厨子壺内より雁首と吸口が対になって合計8点出土している。正面棚周辺より雁首が1点得られた。以下、検出地ごとに記述する(第3表)。

第3表 煙管観察一覧

単位:cm/g

挿図番号 図版番号	番号	部位	火皿の径		長さ	重量	吸口側の径		ラウ接合部の径		材	備 考	出土地
			外径	内径			外径	内径	外径	内径			
第6図 写真42	5	雁首	1.2	1.1	4.1	11.5			1.25	1.15	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。	蔵骨器2 石崩子
	6	吸口			3.5	4.6	0.45	0.25	1.05	0.95	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。	
第7図 写真43	7	雁首	1.5	1.25	6.2	13.3			9.5	8.5	金属製	青銅付着、雁首内にラウが一部残存している。	正面棚 周辺
	16	雁首	1.3	1.15	4.6	8.7			0.9	0.75	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。全長約13.7cmと思われる。	
第8図 写真44	16	吸口			5.3	7.1	0.4	0.25	1.0	0.8	金属製		蔵骨器4 ボージャー
	17	雁首	1.2	1.1	3.8	12.7			1.35	1.15	金属製	青銅付着、ラウ部分が残存している。全長約16.1cmと思われる。	
	19	吸口			6.7	14.8	0.4	0.35	1.4	1.2	金属製	陶器製で対になる吸口は金属製の第8図20と思われる。	蔵骨器5 ボージャー
	20	雁首	1.6	1.1	3.0	5.5			1.4	0.9	陶器製	青銅付着、吸口内にラウが一部残存している。	

3) 簪 (第5図2, 第6図4, 第7図9・12, 第9図22)

簪は完形品が5点得られた。『琉球風俗絵図』(鈴木治雄1982)によると簪は花形, 匙状, 耳搔き形に分けられ, 材質も階級によって違う様である。当遺跡から得られた簪は男性用の花形簪と, 女性用の匙状簪である。素材は4点が銅製で, 1点のみ木製である。木簪の出土は珍しく, 当遺跡以外からは那覇市の『ナーチュー毛古墓遺跡』から類似資料が1点出土している(玉城2000)。詳細は観察表に記述する(第4表)。

第4表 簪観察一覧

単位: cm/g

掲図番号 図版番号	番号	分類	材質	残存長	各部位のサイズ				重量	観察事項	出土地
					花(カブ) (最大計・厚さ)	首	ムディー	竿			
第5図 写真41	2	匙状	銅	15.6	0.9	—	3.8	10.9	9.76	カブは匙状。首は六角形、竿は六角錐を呈する。細身の作り。簪全体に鍍金が施されていた様で、ところどころ剥がれる。女性用本簪。	蔵骨器1 石肩子
第6図 写真42	4	匙状	木	10.3	0.9	—	—	9.4	1.30	カブは匙状をなすが、浅い。側面から見ると、簪を成すように剥がれており、脆い。女性用本簪。	蔵骨器2 石肩子
第7図 写真43	9	花形	銅	8.05	1.82 0.68	1.1	0.8	5.47	9.76	花形。首は六角形、ムディーは丸、竿は四角柱を呈する。首から竿にかけて鍍金が施されてた様だがほとんど剥がれている。男性用本簪。	正面櫻 周辺
	12			10.22	2.12 0.4	0.95	1.22	7.65	9.80	花形。首は六角形、ムディーは丸、竿は四角柱を呈する。ムディーは振れる。全体的に鍍金が施されてた様だがほとんど剥がれている。男性用本簪。	蔵骨器3 ボージャー
第9図 写真45	22	匙状		15.9	1.7	—	4.4	9.8	23.39	カブは匙状。首は六角形、竿は六角錐を呈する。女性用本簪。	蔵骨器6 マンガン

4) 指輪 (第9図23)

指輪は、金属製で蔵骨器6内から1点得られた。指輪の直径が1.8cm、幅0.4cm、厚さ0.04cm、重量1.0gである。側面に連続する菱形の区画内に三つの巴文がみられ、区画外には縦位に刻目が施されている。

5) その他 (第7図8・10・13・14, 第9図24)

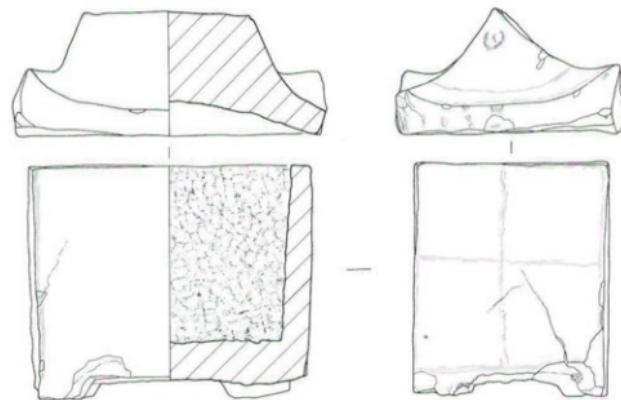
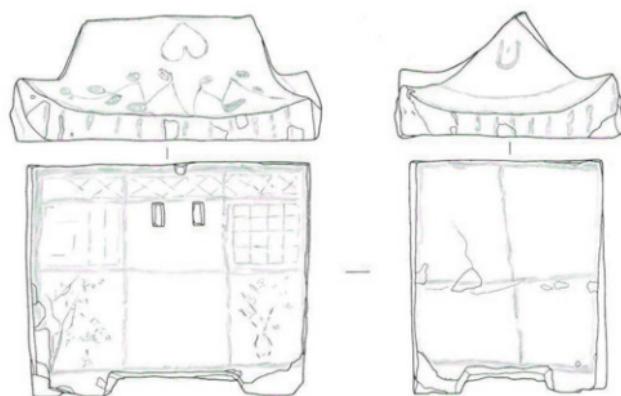
その他の遺物として、墓室より中国産白磁の小杯が1点(第7図8), 沖縄産陶器壺が1点(第7図13), 本土産近現代磁器の碗が2点(第7図10・14), 前庭部より沖縄産陶器の瓶子が1点(第9

図24) 確認された。中国産白磁の小杯や沖縄産陶器壺・瓶については、本古墓が機能しているときに使用されたものと考えられるが、本土産近現代磁器については年代が新しかため、古墓が転用して使用された結果残されたものと考えられる。詳細は観察表に記述する(第5表)。

第5表 その他の遺物観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	番号	種別	器種	残存	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第7図 写真43	8	中国産磁器 (白磁)	小杯	完形	4.2 2.3 1.9	白磁。型作り。腰部から口縁部にかけてシャープに立ち上がり、口縁部が直行する。口唇部は口剥げとする。釉はやや淡青色を帯びる。	正面棚
	10	近現代磁器	碗	半分	10.8 6.0 3.8	本土産。外面は口縁部直下に1条、高台脇に1条の圖線。体部は全体的にイチョウの葉と銀杏が描かれる。内面は口縁部直下に雷文、見込みに秋を表現する文様。	正面棚
	13	沖縄産陶器	壺	一部 欠損	11.6 5.7 4.4	無釉の荒焼壺。胴部に丸みを持たせ、肩は張らないナデ肩、頭部が垂直に立ち上がり、口縁部をL字に外反させる。	左棚
	14	近現代磁器	碗	完形	9.9 20.6 7.7	本土産。外面は口縁部直下に1条、高台と腰部の境界に2条の圖線。体部の約半分に大きな篆文が2個描かれる。内面は口縁部直下と見込みに1条の圖線、見込み中央に「寿」字形が描かれる。	左棚
第9図 写真45	24	沖縄産陶器	瓶	完形	3.1 14.2 4.8	全体的に給色釉がかかる。口唇部が丸みを帯び、口縁部は外反し、長い頭部を有する。胴部最大径は上部になる。高台は外側に強く開き、豊付を平坦に整えて、研磨している。	前庭部



蔵骨器 1

1

0 20cm



1



1



1

副葬品

2

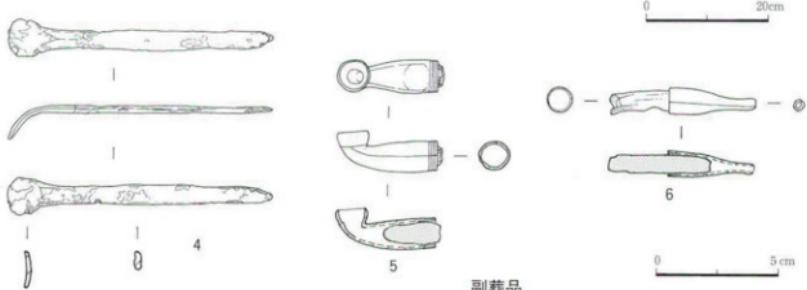
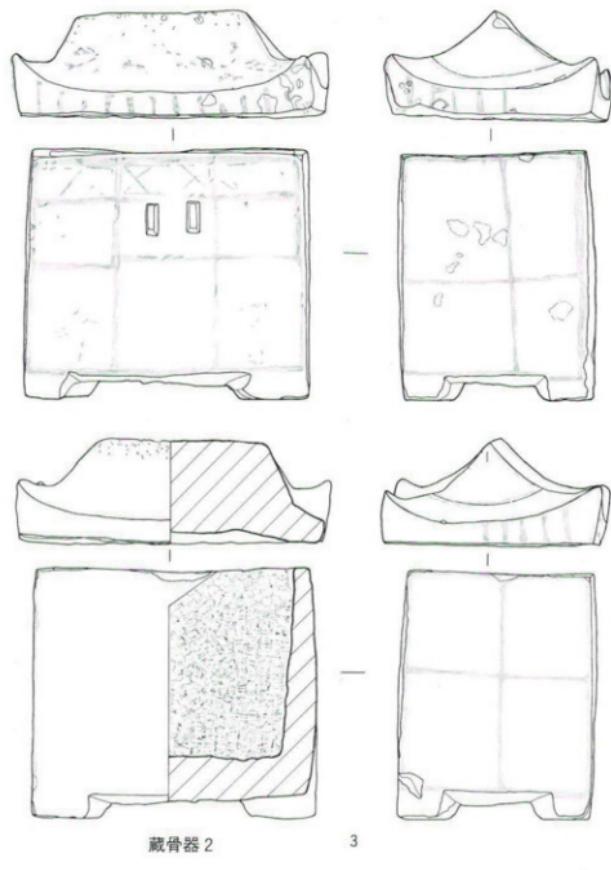
0

5cm

第5図 出土遺物1 正面図



写真41 出土遺物 1 正面棚



第6図 出土遺物2 正面棚

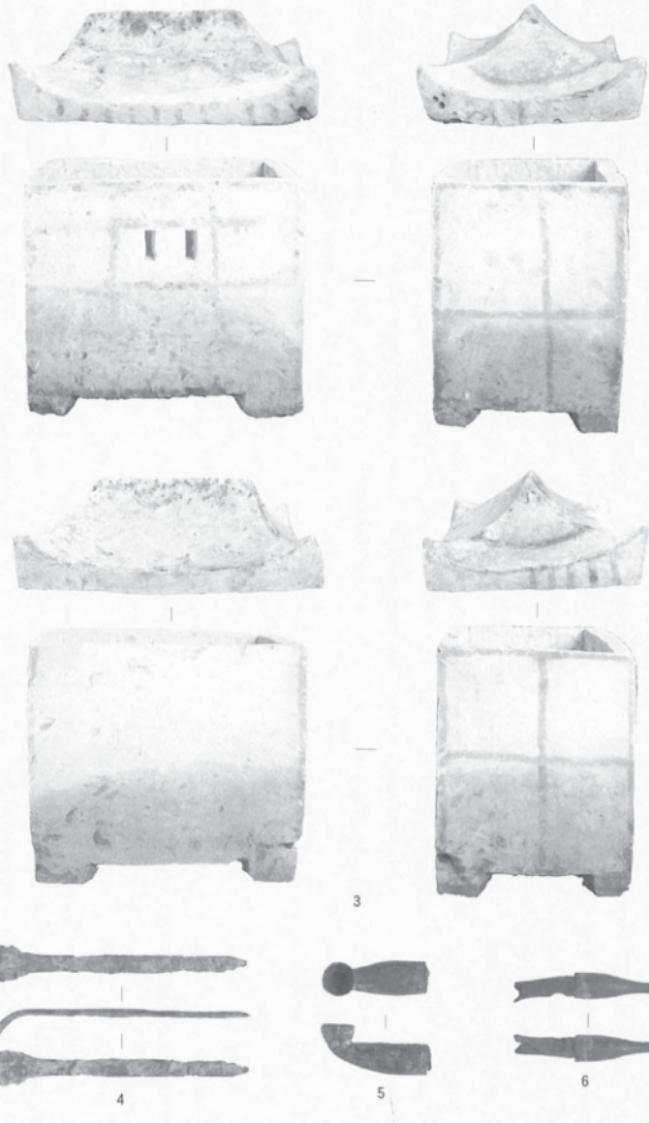
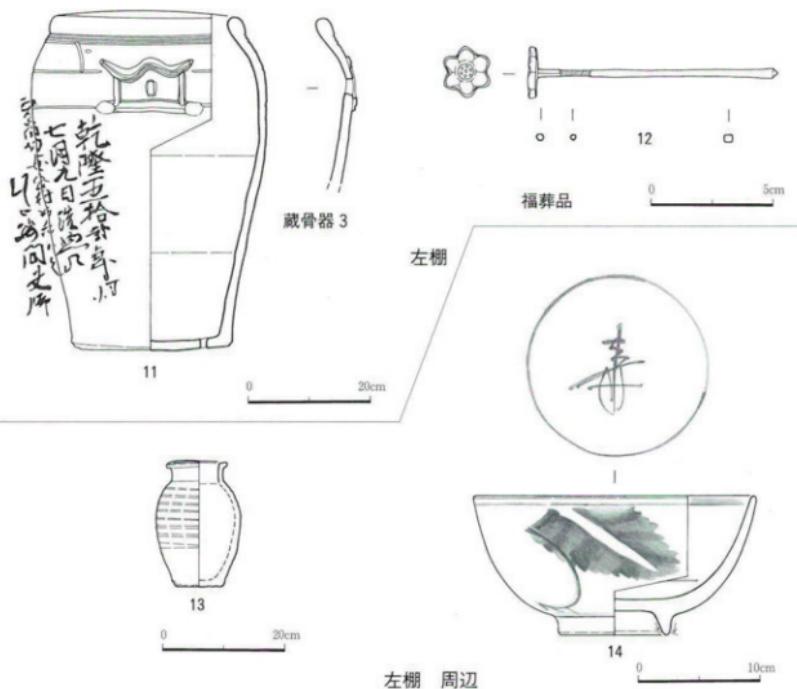
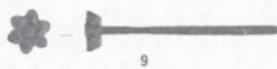


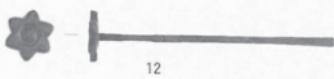
写真42 出土遺物 2 正面棚



第7図 出土遺物3 正面棚周辺・左棚・左棚周辺



11

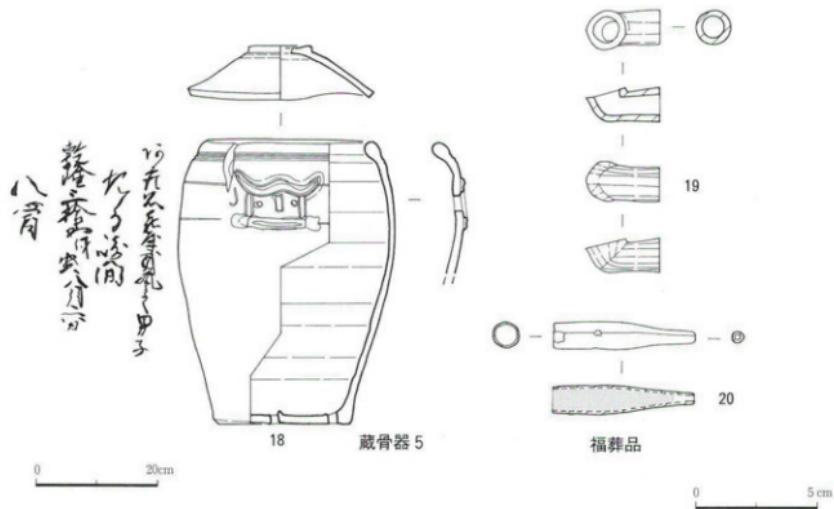
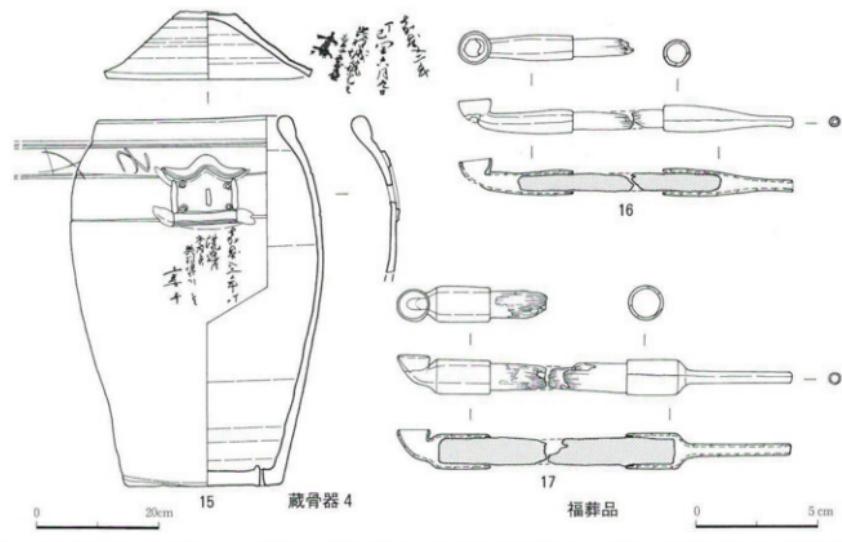


13



14

写真43 出土遺物 3 正面棚周辺・左棚・左棚周辺



第8図 出土遺物4 右棚



15



16



17



18



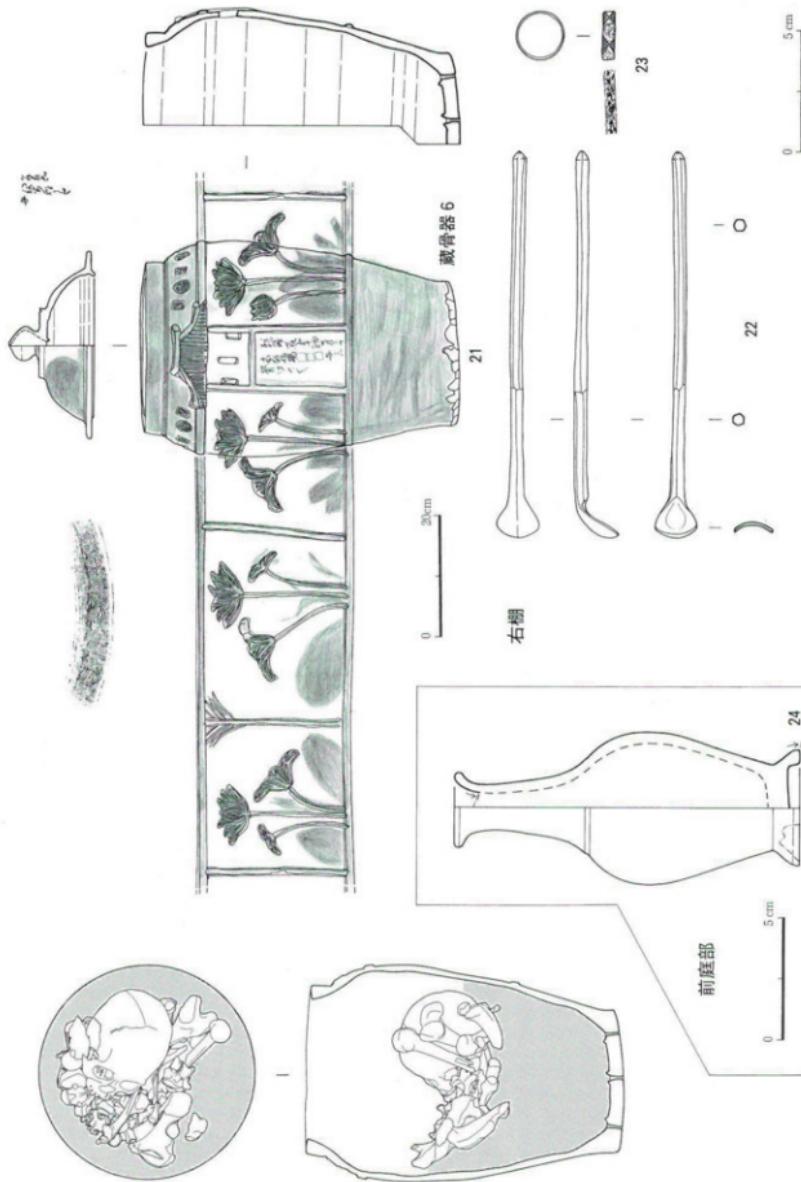
19

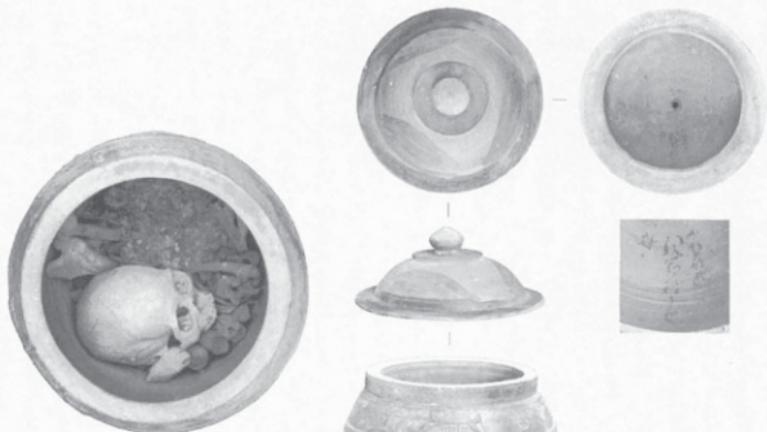


20

写真44 出土遺物 4 右棚

第9図 出土遺物5 右櫛・前庭部





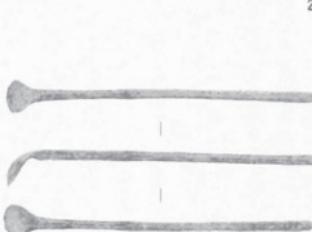
21



23



24



22

写真45 出土遺物5 右棚・前庭部

6. 銘書判読

中部日本鉱業研究所 井伊浩一郎

池田上原古墓から出土した蔵骨器の内、石厨子2基を除くすべての蔵骨器に銘書があった。以下、その内容を記述する。

蔵骨器 3

○ボージャー身(1787年洗骨)

乾隆五捨貳年丁未／七月九日洗骨／西原間切安室村□□□(之?)／

□□崎間(ノ?)文(修?)

蔵骨器 4

○ボージャー身(1797年洗骨)

嘉慶二年丁巳／洗骨／安室村／與那城(筑登之)／妻子

○ボージャー蓋

嘉慶二年／丁巳閏六月九日／與那城筑登之／童子名たへ／妻

蔵骨器 5

○身(1770年洗骨)

あ□ろ(むら?)□筑登之男子／たる崎間／乾隆三捨五(庚)寅八月六日／(洗)骨

蔵骨器 6

○マンガン蓋

さき(ま)／親雲(上利し也?)／母

○マンガン身(1780年洗骨)

乾隆四捨五年庚亥(ほんとうは子)十月□(日)／さき(ま)親(雲?)・・母洗／骨□□□

7. 人骨調査

琉球大学医学部 土肥直美

西原町教育委員会による池田上原古墓の発掘調査において出土した人骨について、その概略を報告する。人骨の保存状態が全体的に悪かったため、本調査においては主に蔵骨器内に納められている被葬者の数・性別・年齢などの確認に焦点を絞って調査した。その結果、本墓には少なくとも成人男性4体、成人女性4体、性別不明成人1体、幼児1体、乳児2体、計12体の被葬者が葬られていることが確認された。

蔵骨器 1 石厨子出土の人骨（成人男性1体、成人女性1体、幼児1体、乳児1体）：

保存不良の全身骨片。右上腕骨片2(♂?1, ♀1), 左上腕骨片1(♀), 左右大腿骨片(♀), 大腿骨骨頭部(♂)が確認できた。また、検出された乳臼歯に、咬耗を受けたものと未萌出のものが認められたことから、本石厨子には成人男女に加えて、幼児と乳児各1体が納められていたと推定される。

蔵骨器 2 石厨子出土の人骨（成人男性1体、成人女性1体）：

比較的保存の良い全身骨片。頭骨片、下顎骨片(老年)、左右寛骨各1(♀)、右寛骨1(♂)、左右上腕骨各1(♂)、右尺骨(♂)、左尺骨(♀)、右桡骨2(♂, ♀)、左右大腿骨2対(♂,

♀），右脛骨1，左脛骨2，左右距骨2対（♂，♀）などが確認できた。また、男性の右大腿骨最大長（約40cm）からピアソンの式によって計算した推定身長は156.5cmとなった。これは近世沖縄人男性の平均身長とほぼ同じである。

蔵骨器3 ポージャー出土の人骨（性別不明成人1体）：

少量の保存不良人骨片と歯牙片、歯の咬耗度（Brocaの2度）から年齢は30代から40代と推定される。

蔵骨器4 ポージャー出土の人骨（成人男性1体、成人女性1体）：

ほぼ全身骨片が含まれていると思われるが、保存状態は良くない。左右2対（成人男女）の大腿骨片が確認された。

蔵骨器5 ポージャー出土の人骨（成人男性1体、乳児1体）：

少量の保存不良人骨片、成人男性と思われる右上腕骨片、左大腿骨片および少量の頭骨片が確認できた。また、乳児のものと推定される左上腕骨、左大腿骨、頭骨片、未萌出の右下顎第1乳臼歯が認められた。

蔵骨器6 マンガン出土の人骨（成人女性1体）：

比較的保存良好な全身骨1体分、寛骨、四肢骨の特徴から性別は女性、歯の咬耗度（Brocaの2度）から年齢は30代から40代と推定される。寛骨には妊娠・出産痕とされる明瞭な前耳状溝が認められるので、本被葬者は経産婦と考えられる。

8.まとめ

池田上原古墓は西原町字池田上原813-1に所在した。個人墓新築のための緊急発掘調査を沖縄県立埋蔵文化財センターが協力し、西原町教育委員会が主体となって実施した。発掘調査は平成16年11月16日～11月26日まで実施し、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにて実施した。

古墓は、発掘調査前は土砂によって完全に埋没しており、樹木が鬱蒼と茂っていた。そのため、古墓が存在することが知られてなく、個人墓新築のためバックホウによって丘陵を掘削中に墓室の天井が破壊され、確認できたものである。周辺にも同様の古墓が何基か存在することから、少數ながら古墓群を形成している。

古墓の形態は微粒砂岩（ニービ）を基盤とする丘陵斜面に構築された掘込墓（フィンチャー）である。墓内の平面形態は方形を志向しており、入口には僅かながら石積みが確認された。

墓内は正面と左右に高い棚を設けており、計6基の蔵骨器が安置されていた。安和氏による編年によれば高い棚を設けるタイプは古い形式の古墓となっている（安和・仁王2005）。蔵骨器の種別は石厨子2基、ポージャー3基、マンガン1基で、石厨子以外の蔵骨器にはすべて銘書があった。また、それぞれの蔵骨器には簪や煙管・指輪といったなんらかの副葬品が含まれていた。マンガン1基を除く蔵骨器は人骨の保存状態が悪くほとんどが骨片となっていた。人骨調査の結果、本古墓には少なくとも成人男性4体、成人女性4体、性別不明成人1体、幼児1体、乳児2体、計12体の被葬者が葬られていることが確認された。12名の内、乳児や幼児が1／4（3名）も含まれていることは、当時の社会情勢を反映しているのか心痛むものである。

銘書によって古墓が使用されていた年代を考えてみると、最も古い年代が明記されていたのは、左棚の左側で確認された1770年銘の蔵骨器6（ポージャー）で、最も新しいのは左棚の右側で確認された1797年銘の蔵骨器4（ポージャー）である。正面棚で確認された石厨子はそれより古いものと考えられるため、古墓の使用年代の中心は18世紀の範疇に収まるものと考えられる。年代順による左右の

棚の使い分けは見いだせない。

出土遺物の内、簪や煙管といった副葬品がすべて蔵骨器内から確認されたわけではなく、簪1点と煙管1点については正面棚の石厨子周辺から確認された。また、本土産の近現代磁器も確認されていて、本古墓は墓として使用されなくなってから転用され、別の機能として使用された可能性もある。近現代磁器が墓内から確認されたため、本古墓が土砂によって埋没したのもそれ以降ということになり、比較的新しい時期に埋没し樹木が茂ったものと考えられる。

発掘調査及び資料整理にあたり、琉球大学医学部の土肥直美氏、中部日本鉱業研究所の井伊浩一郎氏からは人骨調査や銘書の判読について多大な御指導・御協力や貴重な玉稿をいただいた。また、浦添市教育委員会の安和良則氏からは古墓の形態的特徴による分類や蔵骨器の年代的特徴等について多大な御指導を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

(たまなは つとむ：西原町教育委員会)
(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(みやひら まゆみ：調査課 嘴託員)
(さきはら つねひさ：調査課 嘴託員)
(どい なおみ：琉球大学医学部)
(いい こういちろう：中部日本鉱業研究所)

【引用・参考文献】

- 安里進1997 「皿厨子壺の編年」『伊祖の入れ御拌領墓の厨子壺と被葬者—近世墓の考古学的調査による家族復元—』
浦添市文化財調査研究報告書第25集 浦添市教育委員会
- 安和良則・仁王浩司2005 「前田・京塚近世墓群について—墓室編年試案ー」沖縄考古学会定例会資料
- 沖縄県立埋蔵文化財センター2001 「ヤッチのガマ カンジン原古墓群—県営かんがい排水事業（カンジン地区）に
係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 西原町史編集委員会編1996 「西原の考古」「西原町史」第五巻・資料編四
- 翁長謙良1969 「沖縄における農地保全の基礎的研究（第1報）土壤浸食に関する2,3の降雨特性について」『琉球
大学農学部学術報告』第16号 琉球大学農学部
- 翁長謙良1969 「沖縄における農地保全の基礎的研究（第2報）人工降雨による土壤浸食の実験的考察」『琉球大学
農学部学術報告』第16号 琉球大学農学部
- 鈴木治雄1982 『宝玲叢刊第五集 琉球風俗絵図』 宝玲叢刊編纂委員会
- 玉城京子2000 「第V章第14節 簪」「ナーチュー毛古墓群—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告
VII—」那覇市文化財調査報告書第44集 那覇市教育委員会

型式比較による南島爪形文土器の位置付けについて

Typological Comparison of Southern-island Nail-marked Pottery

伊藤 圭

Ito Kei

ABSTRACT: The origin of 'Yabuchi', the earliest pottery type in Southern Islands, has not yet been clarified. It has been said that this type of pottery was developed under a major influence from Kyushu, however, one of the closest types found in the Monden site bears different features from Yabuchi type. It also shows some Kyushu-nail-mark elements so that it cannot be regarded as the same category as Yabuchi type. It seems impossible to trace back the genealogy of Yabuchi type Pottery in Japan. The study of Yabuchi type pottery should be carried out in wider scope, including the adjacent Asian districts.

はじめに

南島爪形文土器^①は、現在に至ってもその出自だけでなく、年代的な位置付けも不安定なままである。これは、南島爪形文土器を本土の爪形文土器と同じ範疇で考える一方で、実年代に大きな誤差が生じているためである。その上、本土の爪形文土器の編年的位置付けや、系統問題において研究者によつて意見が分かれることも大きな要因となっている。そのため、本土の爪形文土器との比較を先学に基づいて再検討する必要があると思われる。現在では、爪形文土器は北海道から沖縄まで列島各地で出土しているが、南島爪形文土器を本土の爪形文土器と具体的に比較・検討を行つてゐる論考は、管見の限り「南島の土器起源をめぐって」（岸本 1991）のみである。そこで本稿は、岸本義彦氏の行つた研究を踏襲し、南島爪形文土器と本土の爪形文土器との関係を探ることを目的とする。

1. 研究略史

1960年、沖縄本島の藪地洞穴遺跡において南島爪形文土器が初めて検出された（国分、三島 1965）。その後、奄美大島の土浜ヤンヤ洞穴遺跡でも同様の土器片が発見されたため（永井、三島 1964）、先史時代における両島の交流を考える上で重要な資料と位置付けられ、「ヤブチ式」と型式設定された（国分、三島 1965）。しかし、年代については明確ではなく、縄文時代後期相当と推定された。ところが、1975年の渡具知東原遺跡の調査において、ヤブチ式土器が曾畠式土器出土以下の層準から出土したため、少なくとも縄文時代前期相当まで遡ることが判明した。加えて、新種の爪形文土器も検出され、「東原式」と型式設定された（知念 1977）。

1981年から行われた野国貝塚群B地点における調査により、多量の爪形文土器片が検出された（島袋 1984）。大型の破片も得られたため、器形の推定が試みられた。また、これまで出土したものと異なる型式（野国IV類）も新たに検出され、「野国タイプ」と呼称された（岸本 1984）。そして野国タイプは、出土層位などから南島爪形文土器の古式に位置付けられた（岸本 1984）。

一方、南島爪形文土器の出自に関しては、発掘資料が増加している現在においても不明瞭のままである。土肥孝氏は、門田遺跡出土の爪形文土器を東北地方で得られている爪形文土器と比較して、施文手法上、同系統とし、南島爪形文土器が縄文時代草創期に相当する可能性を指摘している（土肥

1982）。ところが、1987年、喜子川遺跡において、爪形文土器出土層より下位からアカホヤ火山灰層（6500～6300yBP）が検出された（田村 1989）。そのため、渡具知東原遺跡などで得られている炭素14測定年代の結果と併せて、南島爪形文土器は縄文時代早期相当までは遡らないとする考えが主流となっている。しかし、岸本氏は、この喜子川遺跡における爪形文土器を含む包含層が二次堆積によるものである点、アカホヤ火山灰層自体一枚の層を形成しているわけではなく、ブロック状に点在している点を指摘し、型式学的検討を行わずに南島爪形文土器の位置付けを行うことに警鐘を鳴らしている（岸本 1991）。

2. 爪形文土器の整理と分類

現在、爪形文土器が検出されている遺跡は、報告されているものだけでも90ヶ所を超える。そして、多くの研究者による分類が試みられているが⁶、南島爪形文土器と本土の爪形文土器を同列に比較し得るものは、河口貞徳氏の分類のみである（河口 1983）。そこで、本稿では河口氏の分類を基にして分類基準を再構築し、これを記号化して比較・検討を行う。

爪形文土器は、南島のみならず本土における出土資料も小片が多く、全体の器形を推定できる資料はごく一部である。そのため、本稿では爪形文および指頭痕の形状や施文方法による比較のみに留めざるを得ない。しかし、指頭痕の形状や施文方法の違いは、成形方法の違いに結び付く重要な手掛かりになるとを考えられる。そのため、これを着眼点として分類する。

いわゆる「爪形文」は、調整痕と文様に分けることができるため（河口 1983）、これをそれぞれI類・II類とした。そして、指頭痕を「F」、爪形文（刺突文）を施文方法から「a」～「d」の記号で表した。それぞれの細分は表1の通りである。また、爪形文の傾きは、わかるもののみを細分した。なお、本稿の分類と河口氏の分類との対応は、表3に示した。

対象とした資料は報告されているものとし、主に縄文時代草創期の資料を扱い^{※6}、報告書の記述や図面から機械的に分類した。なお、本稿は南島爪形文土器と本土の爪形文土器との比較を行うことを目的とするため、沖縄で出土していない隆起線文系や、押圧縄文系土器群と併施される爪形文は対象から除外した。また、隆起線文系土器群に併施される爪形文との認識が強いと思われる“ハ”の字状爪形文に関しては、神奈川県花見山遺跡に単独で施文されている例（図1-3・4）もあるため、比較対象に含めた。

表1 爪形文土器の本稿分類

爪形文の分類

I (調整)	F ₁	縦長の指頭痕が残るもの。
II (文様)	F ₂	指頭痕のみ、または指頭痕に一次的に爪痕が残されたもの。
	a	横方向へ連続施文されたもの。
	b	縦方向へ連続施文されたもの。
	c	斜方向へ連続施文されたもの。
	d	不規則に施文されたもの。

II類土器における細分記号

○ ₁	爪形文がたて幅に施されるもの。
○ ₂	爪形文が右側に施されるもの。
○ ₃	爪形文が左側に施されるもの。
○ ₄	爪形文が縦位に施されるもの。
○ ¹	爪形文の傾きが列単位で変わるもの。Ex)羽状など
○ ²	爪形文の傾きが1点単位で変わるもの。Ex) “ハ”の字状など
○ ³	沈線が併施されるもの。
○ ⁴	押引き施文されるもの ^{※7} 。

補足記号

A・B	AとBの複合施文。
A／B	AまたはBの施文。

表2 各地の爪形文土器

地域	名前	所在地	爪跡			爪形文土器	参考文献
			曲面*	分類	書体		
東北	鶴平2号道路	青森県八戸市	○	II a...類、II a'類	工具	爪形文はD字状。構成は羽状あり。口縁軽く外反。または側上部で外か。	1
	鳥居平塗跡	秋田県 鳥巣市	○	II a...類、II a'類	?	構成は羽状あり。	2
	岩熊跡跡	秋田県 雜手市	○	II a...類、II b...類	?	構成はハの字状あり。内部強調部。口縁外反。口唇平坦。	3
	大新町道路	岩手県 盛岡市	○	II a...類、II a'類、II a...類、II a...類	爪・工具	爪形文は米粒状。日本状、切先状あり。構成はハの字状・羽状・無文あり。口縫やや外反。口唇平坦・舌坦。丸底・丸底。4.5	4.5
	大船道路	岩手県 盛岡市	○	II a'類	?	爪形文は米粒状。	6
	前九年道路	岩手県 盛岡市	○	?	?	口縁外傾／直状。	7
	鰐原跡跡	岩手県 盛岡市	○	II a'類？	?	口縁外傾／直状。口唇平坦。	7
	耳取跡跡	岩手県 岩手郡遠沢村	○	II a...類	?		8
	室小路道路	岩手県 岩手郡深沢村	○	II a...類、II a'類、II a'類	?	爪形文は米粒状・舌先状・三日月D字状。口縁外傾・内傾・直状。口唇平坦・舌状	9
	一ノ沢岩陰道跡	山形県 東置賀郡高畠町	○	II a.../a'類	爪・工具	構成はい／（ハ？）の字状あり。真正系と工具を交互に文施するものあり。	10,11,12
	日向洞門道路	山形県 東置賀郡高畠町	○	II a'類、II a'類	爪・工具	構成は羽状・ローハウス字状・ツの字状あり。口縫古文あり。口縫直状・舌坦・丸底。	12,13,14,15
	火薙岩陰道跡	山形県 東置賀郡高畠町	×	II a'類？	工具		16
	大立洞2号道路	山形県 東置賀郡高畠町	×	?	?	爪形文は出土しているものの詳細不明。	17
	志引跡跡	宮城県 多賀城市	○	II a...類	?	風化が著しい。	18
関東	布木道跡	新潟県 新潟市	○	II a'類、II a'類、II d'類	爪・工具	構成はV字状（「ハの字状」）・くの字状（羽状）。口縫直傾・外傾。口唇平坦・丸底。	18
	小斎・沢穴洞跡	新潟県 東置賀郡阿賀町	○	II a'類、II a'類、II a'類、II b'類	工具	口縫や舌先・はば口・はば口、平口縫・小流状口縫。口唇概ね平ら。構成はハの字状・羽状あり。爪形は繊細・粗大あり。	19,20
	王持跡	新潟県 十日町市	○	II a'類	爪・工具	口縫舌傾。	21,22
	磯の木道跡	新潟県 中島沼郡津南町	○	II a'類	?	?	23
	白石尾根道跡	富山県 中新川郡立山町	○	II b'類	工具	構成はハの字状。	24
	北履貝塚	福井県 福井市	○	II a'類、II a'類、II b'/?'a'類	?	泊島鳥羽式（D字状）、構成はハの字状あり。草部期土器とは区別。	25
	舟浜貝塚	福井県 三方上中郡若狭町	○	II a'類、II a'類	工具		26
	大谷寺渓穴道跡	群馬県 宇都宮市	○	II a'類、II a'類	工具	爪形の類似不明。構成はハの字状・無文帶あり。口縫外傾・舌裂舌状あり。	27
	大町道路	群馬県 河内郡上三川町	○	II a'類、II a'類、II b'類	爪・工具	構成は纏形（纏状）「ハの字状」あり。	28
	西南田中島道路	群馬県 みどり市	○	II a'類、II a'類、II d'類、II a'類、II a'類、II d'類	爪・工具	構成は琵琶・ハの字状あり。口縫外傾・外反。口唇平坦・舌状・丸底。乳房状舌状・平底。	29,30,31
	狩野道跡	群馬県 伊勢崎市	○	II a'類、II b'/?'a'/?'b'類	爪・工具	構成は蘭面（繻形）状・ハの字状・羽状あり。口唇平用・舌状？	32
	三ノ木道跡	群馬県 伊勢崎市	×	II a'類	?	爪形は平月狀（D字状？）。	32,33
	下宿道跡地点	群馬県 太田市	○	II a'類、II a'類、II a'類	工具	爪形是丸底。	34
	疊垂道跡	茨城県 郡石町	○	II a'類、II a'類、II a'類	?		35,36
	那の寺道跡	茨城県 ひたちなか市	○	II a'類	工具	口縫外傾。口唇平傾。	35
	貝柄山道跡	茨城県 常緑市	×	II a'類	?	爪形文は出土しているものの詳細不明。	37
	地園穴水道跡	千葉県 茜浦市	○	II a'/?'b'類	工具	構成はハの字状。隣起總文と併施された可能性高い。	38
	林跡道跡	千葉県 謙ヶ谷市	○	?	爪	構成はハの字形の可能性あり。隣起總文と併施された可能性高い。	39
	廻合三台道跡	千葉県 富津市	○	II a'類、II a'/?'b'類	爪・工具	構成はハの字形・無文帶あり。	40
	えんぎ山道跡	埼玉県 さいたま市	○	II a'類、II a'類	?	口縫外反。口唇舌状？	41
	大丸道跡	埼玉県 さいたま市	○	II b'類、II a'類	爪・工具		42
	大和田道路	埼玉県 さいたま市	○	II a'類	工具	やや外反。口唇丸底。	43
	十二番地道路	埼玉県 上尾市	○	II a'類	?	この字状に偏曲。	44
	ハリ上野跡	埼玉県 富士見町	○	II a'類	工具	爪形文は口唇に施文。口縫直状・外傾。口唇平傾。	45
	小岩井通路道跡	埼玉県 船橋市	○	II a'類	工具	口縫肥厚。口唇平傾。	46
	加能里道跡	埼玉県 船橋市	○	II b'類	?	爪形文は口唇・口縫外傾・口唇舌状。	47
	横立原道跡	埼玉県 舟巻市	○	II a'類、II a'類	爪・工具	口縫外傾。口唇舌状・丸底。	48
	永久保谷道跡	埼玉県 深谷市	×	II a'類、II a'類	?	構成は蘭面（纏状）あり。	49
	西谷道跡	埼玉県 深谷市	○	II a'類？, II a'類？, II c'類？	工具	構成はハの字状あり。口縫外傾。口唇舌状・丸底。	50,51
	宮林道路	埼玉県 深谷市	○	II a'類、II a'類、II a'類、II a'類、II a'類、II a'類、II a'類、II a'類、II a'類	爪・工具	構成はハの字状・舌先・ハの字と羽状が複合するもの・無文帶あり。口縫古文あり。口縫直状・やや外傾・やや外反・やや外反。口唇舌状・平底・丸底・半底。	52
	東光寺黄道跡	埼玉県 深谷市	○	II a'類？	工具？	口縫直状。口唇舌状。諸式或ても草部期形文とも異なる。	53
	大久保合A道跡	埼玉県 本庄市	×	?	?	爪形文は出土しているものの詳細不明。	54,55
	有寄寺北裏道跡	埼玉県 本庄市	○	II a'類？, II a'類	?		54,56
	知來堂北道跡	埼玉県 兼六郡美里町	○	II a'類	?		57
	知來堂C道跡	埼玉県 兼六郡美里町	○	II a'類、II a...類？	爪・工具	口縫外傾。口唇平傾。	58
	豆曾原跡跡	埼玉県 兼六郡神川町	×	II a'類	?		59
	向ノ原道跡B地点	東京都 葛飾区	○	II a'...b'類、II a'...b'類、II a'...a'...b'類	爪・工具	口縫古文あり（工具記述）。構成はハの字状あり。口縫やや外傾・やや外反・口唇舌状・平底・丸底。	60
	川島谷道跡群B地点	東京都 明治市	○	II a'類	?	口縫外傾。口唇舌状。乳頭状舌状。形器駆骨型。	61
	花見山道跡	神奈川県 横浜市	○	II a'類、II b'類	?	爪形は三日月状・舌先状。構成はハの字状。口縫古文あり。口縫外傾・直状。口唇舌状丸底。	62

地名	通路	所在地	画面	分類	原体	爪形文土器	参考文献
関東	三ノ宮・宮ノ前通路	神奈川県 伊勢原市	○	I a.類	工具	尖底あるいは乳房状を呈する底部が併存。	63
	柏ヶ谷長ツサ通路	神奈川県 海老名市	○	I b.類?	工具	構成はハの字状。口縁直状。口唇平坦。	64
	深見詰山通路	神奈川県 大和市	○	I b.類	爪	無文帯あり。口縁外端、口唇舌状。平底に近い丸底。	65
	今田通路	神奈川県 藤沢市	○	I b.~c.類, I b.類, I b.~d.類	工具	構成はハの字状?あり。地文に条痕が施されたものあり。丸底か。	66
東海	南葛西通路	神奈川県 藤沢市	○	I a.類, II a.類, II d.類	爪?	口縁外端。口唇舌状。沈縫と併施された可能性あり。	67
	酒呑石ヨリナ通路	愛知県 田原市	○	I b.類?	?	丸底か。	68
	桃ノ通路	岐阜県 中津川市	○	I a.類, II a.~b.類, III a.類	?	構成は羽状あり。美濃文との併施あり。柏顎式?あり。	69,70
	九合渓穴通路	岐阜県 山鹿市	○	I a.類, II a.~b.類	爪-工具	構成はハの字状・羽状文。指頭痕を残す資料(河口 1983)では、削り書きから導きであるといった。	71
中部	曾根原路	長野県 露崎市	○	I a.類, II a.類, II a'~c類	爪-工具	性質異なる爪形文と直状文を要素として施文されるものあり。口縁外反・外傾。口唇舌状。	72
	片町通路	長野県 露崎市	○	I a.~b.類, II c.~d.類	爪-工具	性質異なる爪形文と直状文を要素として施文されるものあり。口縁外反・外傾。口唇舌状。	73
信濃	仲町通路	長野県 上木内郡木曽町	○	I a.~b.類, II a.~b.類, III a.類	?	爪形文が削行るもの多数あり。口縁外反・外傾。口唇舌状。	74,75 76,77
	石小坂洞窟道跡	長野県 須坂市	×	?	?	爪形文は出土しているものの詳細不明。	78,79
	タツノ通路等地点	長野県 大町市	○	I a.類, II a.類	?	口唇施文あり。	80
近畿	柳又通路	長野県 木曾郡木曾町	×	?	?	爪形文は出土しているものの詳細不明。	81
	増田川子石通路	長野県 伊那郡高森町	○	I a.類	?	爪形の丸不明确。轟岱では土崩削期ではないとされているが、表裏確認・斜縫文と併存。ローリングも受けていない。	82
	忍足通路	京都府 舞鶴市	○	I a.類, II a.~b.類	爪	口縁施文あり(工具)。構成はハの字状・無文帯あり。口縁僅かに外反。	83
近畿	八人通路群	京都府 舞鶴市	○	I a.類, II a.類, II d.~e.類	爪-工具?	爪形はC字状。	84
	上人大片区道跡	奈良県 山邊郡山添村	○	I a.~b.類, II b.類, III b.類	?	口唇に爪形文が確認できる資料あり。構成は無文帯あり。口縁や外反・外傾。口唇舌状・丸底。爪形は三日月状。	85
	門田通路	福岡県 春日市	○	I F.類, II F.~i.類	指頭・爪	逆D字状と指頭痕。口縁施文あり。口縁外反・斜部張り微弱。	86
九州	福井洞穴通路	長崎県 宮代保市	×	I F.~g.類, II a.~d.類, III a.類	指頭・爪	指頭前に爪痕が一次的に付されるもの他、指頭痕のみが残る資料あり。	79,87 88,89,90
	泉福寺通路	長崎県 宮代保市	○	I a.~b.類, II a.~d.類, III b.~d.類	爪・工具?	構成はハの字状・糾糸状・無文帯あり。口唇施文・糾糸痕を残すものあり。口縁直状・外反。口唇平坦・先端。	91,92
九州	無田原通路	熊本県 暗夜池市	○	?	?	小片A点のみの詳細不明。北部九州系文形式に類似。	93
	河原F通路	熊本県 阿蘇郡阿蘇村	○	I F.類	指頭・爪	口縁外端。工具。底部付近は無文か。口縁外反。脚部の張り微弱。	94
	白石B通路	熊本県 人吉市	○	I a.~b.類, II a.~b.類, III a.~c.類 II d.類	爪または工具	穂底伝説により指頭痕が採用うるもの。爪形はC字状(三日月状?)と表記。口縁外反・直状・先端へ突起。構成は無文帯あり。口縁外端・口唇舌状・支傾。	95
中国	堂寺西通路	宮崎県 宮崎市	○	I a.~b.類, II a.~d.類?	爪-工具	口唇施文あり(工具)。口縁やや外反・直状。口唇舌状・丸底やや肥厚。	96
	椎葉巻I第1通路	宮崎県 宮崎市	○	I F.類, II a.~b.類, III a.~b.類	指頭・爪	多く貼付した粘土墨面上に爪形を施文するものあり。口唇施文あり。口縁外端・内傾。口唇舌状・半坦。	97
	上の通路	宮崎県 宮崎市	○	I a.~b.類, II a.~b.類	?	口縫通路。外端。口唇舌状・半坦・丸底。	98
四国	鳴島通路	宮崎県 宮崎都心南町	○	I a.~b.類?	爪?	口縁外端。口唇舌状。	99
	岩之庄通路	宮崎県 鹿児島市	○	I a.~b.類	爪?	爪形文は安帶状に現す。口縁外端。	100
	庵见島通路	鹿児島県 出水市	○	I a.~b.類	?	?	101
新潟	喜子川通路	鹿児島県 大島郡喜子町	○	I F.~g.類, II a.~b.類	指頭・爪・工具	左V字-右下段-上段へ施文。口縁やや外反・直状。頭部には左V字-直状-右下段へ施文。指頭痕あり。頭部張る。丸底。	102,103
	宇宿原又通路	鹿児島県 大島郡喜子町	○	I F.~g.類	指頭・爪	指頭による押引き施文。	104
	土佐イヤケ前穴通路	鹿児島県 大島郡喜子町	○	I F.~g.類, II F.~g.類, III F.~g.類 II d.~e.類?	指頭・爪・工具	指頭によってV字-直状-左V字へ施文。口縁直状・内傾。口唇舌状・半坦。	105,106, 107
	面影原1目保	鹿児島県 大島郡伊仙町	○	I F.~g.類	指頭	口唇舌状。	108
冲縄	中南洞穴通路	鹿児島県 大島郡知名町	○	I F.~g.類, II a.~b.類, III a.~b.類	指頭・工具	表裏指頭痕あり。	109,110
	仲由原塙付合	沖縄県 竹富郡仲由村	○	I F.~g.~h.類	指頭	頭部による押引き施文。表裏指頭痕。	111
	渡兵東里東路	沖縄県 中頭郡渡辺村	○	I F.~g.類, II F.~g.類, III F.~g.類 II d.~e.類?	指頭・爪・工具	糸形は逆D字状。	112
沖縄	野国具塙郡B地點	沖縄県 中頭郡糸満町	○	I F.~g.類, II F.~g.類, III F.~g.類 II d.~e.類?	指頭・爪・工具	表裏指頭痕あり。	113
	ヤブチ洞穴通路	沖縄県 うるま市	○	I F.~g.類, II F.~g.類	指頭	表裏指頭痕あり。口縁やや外反・やや外傾。口唇舌状。	114
沖縄	城間古墓群9号墓	沖縄県 渡辺市	○	I F.~g.類	指頭	表裏指頭痕あり。	115
	チチフチア胡穴通路	沖縄県 渡辺市	○	I F.~g.類	指頭	表裏指頭痕あり。	116
	船越原通路	沖縄県 岩井都留着敷村	○	I F.~g.類	指頭	口縁やや外反。口唇平坦。	117

3. 各地の爪形文土器との比較

表2を概観すると、Ⅰ類、Ⅱ類が九州を境に分かれる。本州ではⅠ類が少なく、明らかな施文を行うⅡ類が大半を占めている。一方、九州ではいわゆる南部九州的な明らかな施文を行うものと、北部九州的な指頭痕を残すものとに大きく分かれる。そして、沖縄では、野国タイプとヤブチ式、東原式などでそれぞれⅠ類、Ⅱ類に分かれるが、これが年代差と認識される点が九州の様相と異なる⁶⁶⁾。

また、Ⅱ類土器について、九州以北にはb~d類が散見できるのに対し、奄美諸島以南ではa類の

表3 河口氏の分類との対応表

河口氏の分類		本稿の分類
指頭押圧痕	1 指頭押圧痕	I F類およびII F類
	2 指頭押圧痕と爪形痕とが一次的に印されたもの	I F・II a類およびI F・II d類
	3 指頭押圧痕に二次的に糸形文が付加されたもの	II a類
爪形文	4 爪形文が一方向に横位帶状に施されたもの	II b類、II c類
	5 爪形文が斜行帶状または縱列帶状に施されたもの	II ○類およびII □類
	6 爪形文の向きに変化のあるもの	II d類
	7 爪形文が不規則に施されたもの	ランダムに爪形文を施すもの。

みしか認められない。奄美諸島以南で a類の要素を持つものは東原式である。東原式は、渡具知東原遺跡の層序からヤブチ式に後続することがわかっている。また、東原式の中にはヤブチ式的な指頭痕^{**}が残るものもあり、型式学的にもヤブチ式からスムーズに移行していると言える。東原式に b類～d類が存在しないのは、東原式が土器成形時の調整痕を特徴とするヤブチ式を祖形とするためと思われる。これは、奄美諸島以南に、個々の爪形文の傾きが変わるもの（“ハ”の字状爪形文など）がなく、その傾きが変わる場合、必ず列ごとに変わることを間接的に示す特徴と思われる。

本土のII類土器には東原式と類似するものが多いが、I・II類の分布状況からヤブチ式が本州の土器の影響を受けているとは思えないため、東原式が本州II類土器の影響を受けているとは言い難い。よって、南島爪形文土器は、本州の爪形文土器と比較して、型式学的に異なる系譜にあると言える。

いわゆる北部九州的な爪形文土器は、指頭痕を残す点でヤブチ式と近似する。中でも、福岡県門田遺跡や熊本県河陽F遺跡出土の爪形文土器は、I類に属する資料の中でも破片が大きく、器面全体の特徴を捉え易いため、良好な比較資料となる。門田遺跡の資料は、ヤブチ式的な指頭痕が器面全体に残るため、南島爪形文土器との関係が取り沙汰されている。一方、河陽F遺跡の資料は指頭痕が必ずしも器面全体に残るわけではなく、底部に近づくにつれて無文部が多くなる傾向にある（岡本 2003）。また、指頭痕の形状は、門田遺跡の資料やヤブチ式のそれと異なる。この指頭痕の形状の違いは、成形方法が異なることを意味するものと考えられる（伊藤 2004）。指頭痕が器面全体に配されないこともこのことに起因するのではないだろうか。長崎県福井洞穴遺跡の資料にも、指頭痕の形状が河陽F遺跡と近似しているものがあり、同型式の土器と思われる。

4. 南島爪形文土器の出自について

九州では文様として指頭痕を残すものも多いが、ヤブチ式的な指頭痕を持つものは、門田遺跡の資料のみである。門田遺跡の資料は、共伴遺物が確認されていないため、年代を特定できないが、九州出土の他の爪形文土器は、縄文時代草創期に比定されている。そのため、前述した型式の違いを考慮すれば、南島爪形文土器は九州以北の草創期爪形文土器群とは切り離して考えた方が妥当であろう。

ところで、門田遺跡の爪形文土器と近似する土器は、朝鮮半島南部の東三洞貝塚でも出土している（岡本 1982）。東三洞貝塚は早くから調査・研究が行われた著名な遺跡で、5つの層位に分けられている^{**}（坂田 1978）。この最下層からは、坂田邦洋氏がG型・H型と設定した土器が、塞ノ神式や轟式の土器片などと共に出土しており（坂田 1978）、写真を見る限りヤブチ式と酷似しているようと思える。年代は、BC5000年代末～4000年頃とされており、その上層から曾畠式が出土している（坂田 1978）。これは、南島爪形文土器の出土状況に近似しており、年代的な位置付けを考える上

で興味深い。

しかしながら、朝鮮半島でG型・H型土器のような資料を出土している遺跡は、数遺跡で報告されているに過ぎず^{※ii}、出土量が南島に比べても少ないため、現時点では、ヤブチ式土器の出自を朝鮮半島に直接求めるることは危険である。また、仮に南島爪形文土器の出自を朝鮮半島に求めた場合には、朝鮮半島により近接する奄美諸島の爪形文土器が、沖縄諸島のそれよりも古式になることが期待されるが、そのような様相を明確に感じることはできない。

おわりに

各地の爪形文土器を整理・分類した結果、南島爪形文土器は、型式学的に本土の爪形文土器と別系統であることを示した。一方、門田遺跡や朝鮮半島の爪形文土器については、型式学的な特徴から、南島爪形文土器と同一系統と推測される。しかし、このようなヤブチ式土器と類似する資料の出土例は少ないため、南島爪形文土器の出自を特定するには至らなかった。しかし、中国や東南アジアにおいても南島爪形文土器と時期を等しくして爪形文土器が出土しているという。本稿から、日本本土にその出自を求めるることは難しいため、今後は隣接するアジアの発掘調査の進展に期待したい。

【追記】

本稿の執筆には多くの方からの御教示・御助成がありました。末尾になりますが、記して感謝致します。

岸本義彦・伊集ゆきの（沖縄県立埋蔵文化財センター）、仲宗根求（沖縄県読谷村立歴史民俗資料館）、泉拓良（京都大学）、豆谷和之（奈良県田原本町教育委員会）、岡田憲一（奈良県立橿原考古学研究所）、馬田弘稔・小田和利・加藤和歲（九州歴史資料館）、神原雄一郎（岩手県盛岡市教育委員会）、溝田直己（奈良大学大学院生）

順不同、敬称略

【注釈】

※ i 南島の爪形文土器は、南島独自の様相を呈しているため、「南島爪形文土器」と呼称し（新東 1997、下地 2000）、九州以北の爪形文土器と区別した。

※ ii 本土の爪形文土器は、縄文時代前期にも認められる（表2 福井県北堀貝塚、京都府志高遺跡・浦入遺跡）。

※ iii 整然と並ぶ“ハ”の字状爪形文に関しては、報告書に「意図的にハの字を作出している」旨の記載があるもの以外は縦位複数状爪形文と理解し、「b」で表した。

※ iv 指頭を押引きるとされているヤブチ式は、II類土器に含めた。

※ v 「圓面」の「○」「×」は実測図の有無を、「○」は図上復元されているものを表す。

※ vi 九州において、「南部九州的な爪形文」と「北部九州的な爪形文」は必ずしも地域差と言ふことはできないが、両者が層位的に出土する遺跡は確認されていない。

※ vii ヤブチ式土器における指頭痕の多くは、指頭を押圧しただけでは施すことができないD字状を呈している。これを「ヤブチ式的な指頭痕」と記述した（伊藤 2004）。

※ viii 東三洞貝塚発掘調査に携わった韓炳三氏によると、大きく3つの層位に分けることができる（韓 1979）。

※ ix 新東晃一氏は、新岩里遺跡の指頭文土器との類似性を指摘している（新東 1997、下地 2000）。また、岡田憲一氏のご教示によると、凡方貝塚でも縄文時代早・前期併行の爪形文土器が出土している。

（いとう けい：臨時の任用専門員）

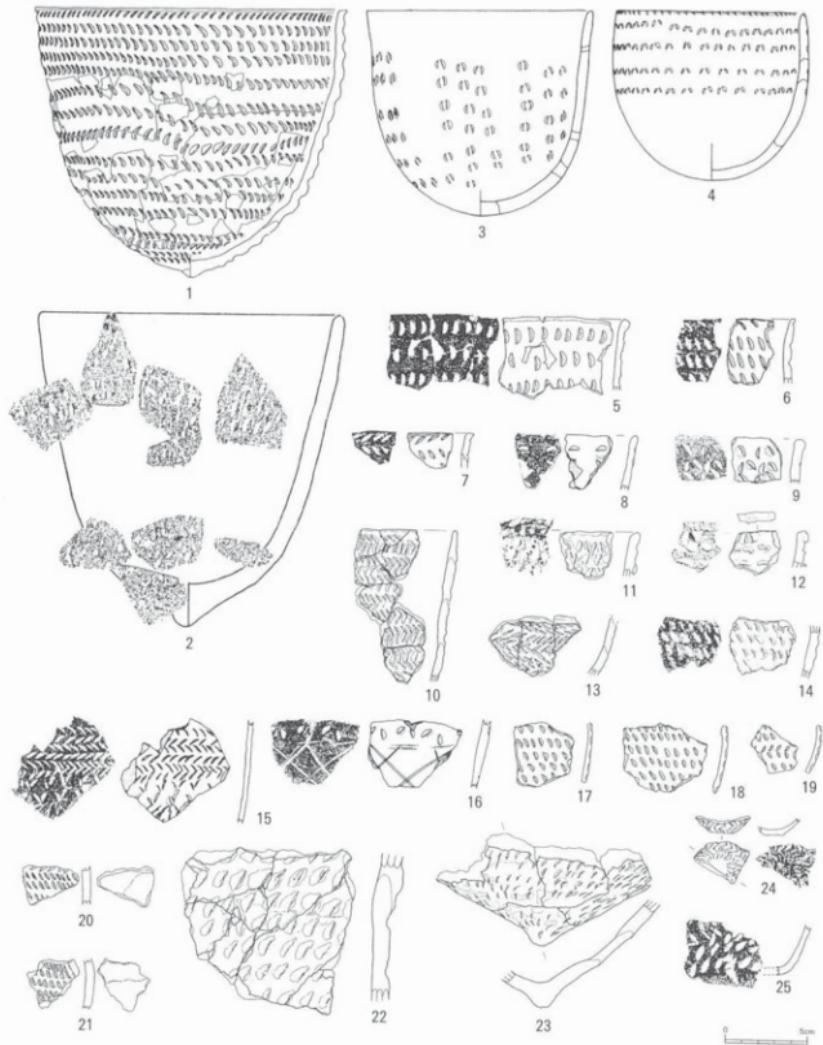


図1 本州の爪形文土器 (S=1/3)

1:大新町遺跡(文献5より転載)、2:川島谷遺跡群(文献61より転載)、3・4:花見山遺跡(文献62より転載)、5~7:大新町遺跡(文献4より転載)、8・9・15・16・25:宮林遺跡(文献52より転載)、10~14・22~24:西鹿田中島遺跡(文献31より転載)、17~19:鴨平(2)遺跡(文献1より転載)、20・21:仲町遺跡(文献75より転載)

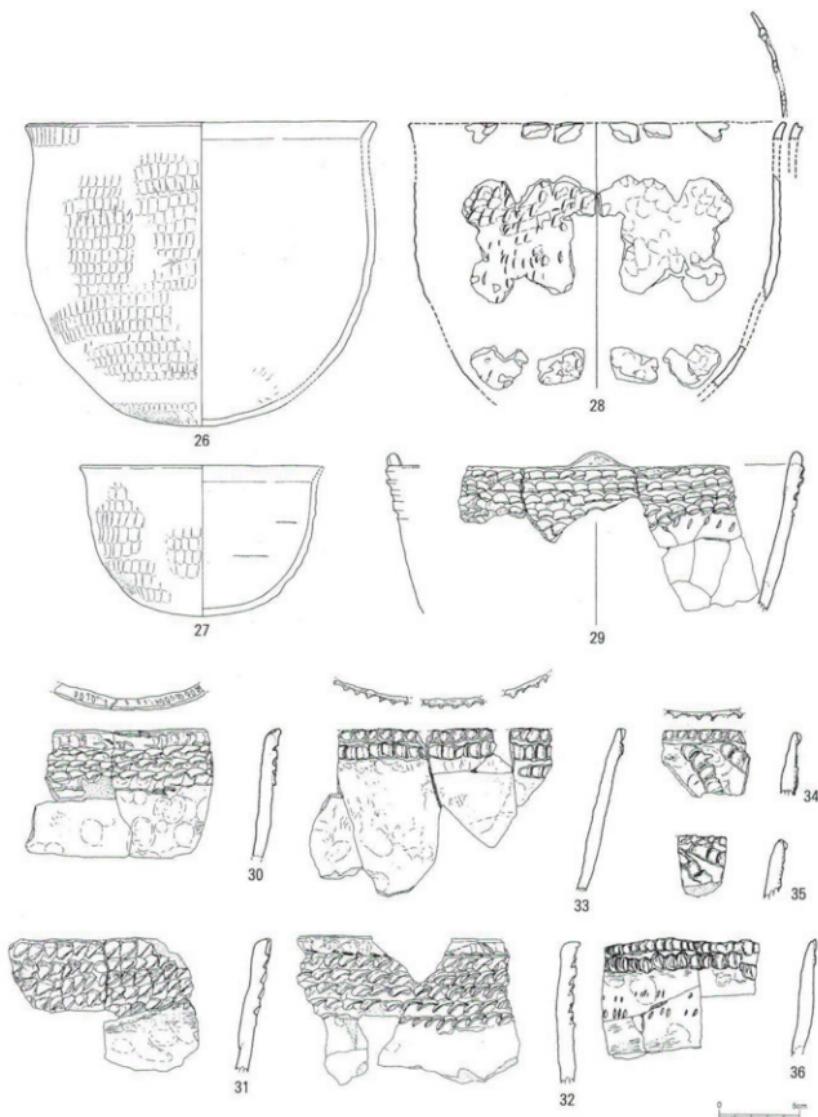


図2 九州の爪形文土器-1 (S=1/3)

26-27:門田遺跡(九州歴史資料館蔵)、28:河陽F遺跡群(文献94より転載)、29~36推屋形第1遺跡(文献97より転載)

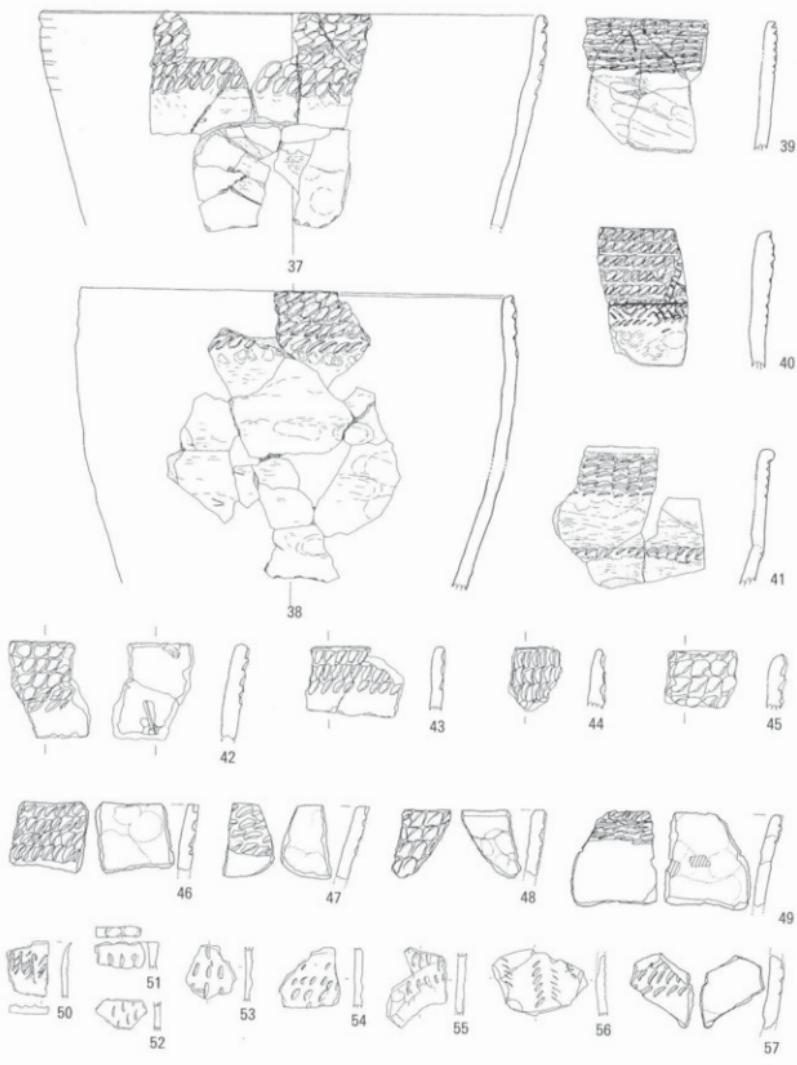


図3 九州の爪形文土器-2 (S=1/3)

37~41:椎屋形第1遺跡(文献97より転載)、42~45:上の原遺跡(文献98より転載)、46~49・57:白鳥平B遺跡(文献95より転載)、50~56:泉福寺洞穴遺跡(文献92より転載)

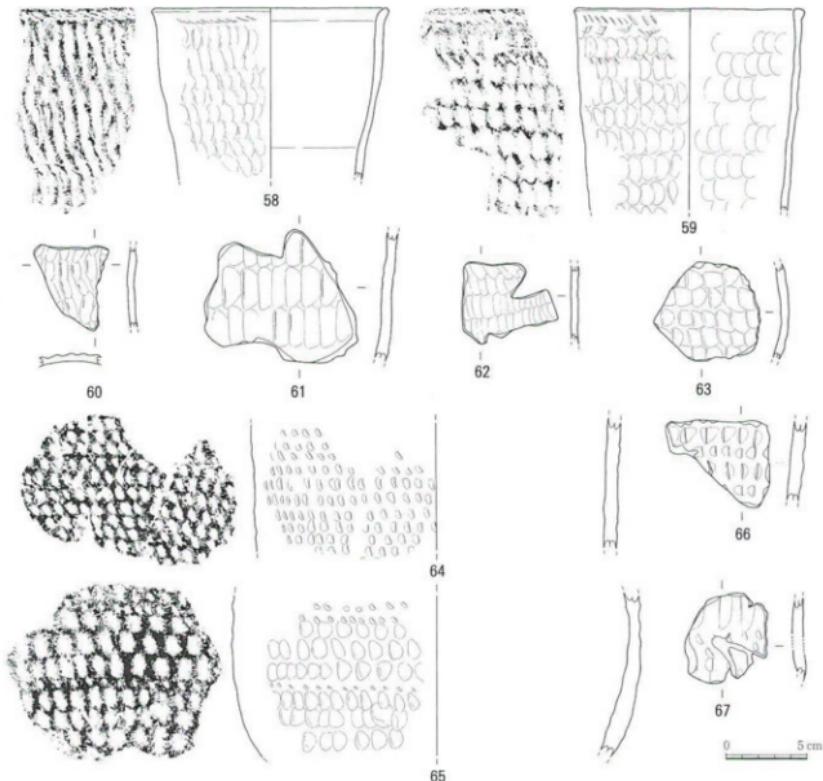


図4 沖縄の爪形文土器 ($S = 1 / 3$)

58~61・63~65:野国貝塚群B地点(沖縄県立埋蔵文化財センター蔵、拓本は文献113より転載)、62・66・67:渡具知東原遺跡(読谷村立歴史民俗資料館蔵)

【引用・参考文献】

- 1 春日信興 1982『鶴平(2)遺跡発掘調査報告書』(青森県埋蔵文化財調査報告書第73集)青森県教育委員会
- 2 橋本高史ほか 1982『飛鳥平遺跡』『東北経貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ・鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡-』(秋田県文化財調査報告書第89集)秋田県教育委員会
- 3 利部修 1996『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XXII・岩瀬遺跡-』秋田県教育委員会
- 4 千田和文、八木光則ほか 1986「大新町遺跡第17・19次調査」『大館遺跡群 大新町遺跡 大館町遺跡 - 昭和60年度発掘調査概報-』盛岡市教育委員会
- 5 千田和文、八木光則ほか 1987「大館遺跡群 大新町遺跡 - 昭和61年度発掘調査概報-」盛岡市教育委員会
- 6 千田和文、八木光則ほか 1989「大館町遺跡」『大館遺跡群 大新町遺跡 大館町遺跡 - 昭和62年度発掘調査概報-』盛岡市教育委員会
- 7 神原雄一郎 1998「大新町遺跡をめぐる早期前葉土器群の様相 - 予察 - 」『大館遺跡群 大館町遺跡 大新町遺跡

- 平成 8 年度・9 年度発掘調査概報 - 盛岡市教育委員会
- 8 桐生正一、桜井芳彦 1986『耳取遺跡』澁沢村教育委員会・東北電力株式会社岩手支店
- 9 桐生正一 1999『室小路15遺跡』『室小路土地区画整理事業発掘調査報告書』澁沢村教育委員会
- 10 加藤稔、佐々木洋治 1962『山形県一ノ沢岩陰遺跡』『上代文化』第31・32輯 国学院大学考古学会
- 11 佐々木洋治 1971『高畠町史』別巻・考古資料編 高畠町
- 12 佐々木洋治 1975『山形県における縄文草創期文化の研究Ⅱ』『山形県立博物館研究報告』第3号 山形県立博物館
- 13 加藤稔 1958『日向の尖頭器と早期縄文土器』『山形考古』第5号 山形考古友の会
- 14 加藤稔ほか 1969『山形県史』資料11篇 考古資料 山形県
- 15 佐々木洋治 1985『山形県日向洞窟』『探訪縄文の遺跡・東日本編 -』有斐閣
- 16 佐々木洋治、佐藤義信 1978『遺物』『大立洞穴第三次調査概報』山形県立博物館・山形県教育委員会
- 17 鎌田俊明 1984『旧石器時代の遺物』『志引遺跡』多賀城市教育委員会
- 18 小野昭、小熊博史 1982『巻町布目遺跡の調査』『巻町史研究』Ⅲ巻町
- 19 中村孝三郎 1960『縄文早期 小瀬が沢洞窟』『長岡市立科学博物館考古研究室調査報告』第三冊 長岡市立科学博物館考古研究室
- 20 小熊博史、前山精明 1994『新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討』『環日本海における土器出現期の様相』雄山閣
- 21 水野祐之、黒坂慎二 1981『壬遺跡1981』（国学院大學文学部考古学実習報告）国学院大學文学部考古学研究室
- 22 國學院大學文学部考古学研究室 1982『土器』『壬遺跡1982 新潟県中魚沼郡中里村』（國學院大學文学部考古学実習報告第3集）國學院大學文学部考古学研究室
- 23 中村孝三郎 1963『卯の木押型文遺跡』『長岡市立科学博物館考古研究室調査報告』第五冊 長岡市立科学博物館考古研究室
- 24 林寺嚴州、古川知明 1984『立山町白岩尾掛遺跡 縄文草創期遺物の新知見』『富山市考古資料館報』第34号 富山市考古資料館
- 25 本下哲夫1991『北堀貝塚採集の縄文土器について』『北堀貝塚・重要遺跡範囲確認のための試掘調査 -』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報4）福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 26 上野晃 1985『鳥浜貝塚84T地区出土の押圧文・爪形文土器』『鳥浜貝塚 - 1984年度調査概報・研究の成果 -』（縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5）福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 27 塙静夫 1976『大谷寺洞穴』『栃木県史』（資料編 考古1）栃木県
- 28 諏訪問伸 1985『遣構外出土遺物』『大町遺跡』上三川町教育委員会
- 29 相沢忠洋 1959『赤城山麓に於ける縄文早期文化と西鹿田遺跡発掘調査の意義』『古代文化』第3卷第12号 古代学協会
- 30 萩谷千明 2001『西鹿田中島』『2001 発掘された日本列島 - 新発見考古速報 -』朝日新聞社
- 31 若月省吾、萩谷千明、小曾我夫 2003『西鹿田中島遺跡発掘調査報告書（1）』笠懸町教育委員会
- 32 坂爪久純、中東耕志 1983『神谷遺跡の爪形紋土器と周辺遺跡』『群馬考古通信』第8号 群馬県考古学談話会
- 33 渋谷啓史、高田祐一 1980『西今井・三ツ木遺跡調査概報』（県営は場整備に伴う調査報告書）境町教育委員会
- 34 鳥田孝雄 1987『まとめ』『下宿遺跡E地点』太田市教育委員会
- 35 茨城県史編集委員会 1985『茨城のあけぼの』『茨城県史=原始古代編』茨城県
- 36 川崎純徳ほか 1973『茨城県における先土器時代資料（一）』（常総台地研究会資料（2））常総台地研究会
- 37 谷島靜訓 1968『茨城県水海道市貝柄山遺跡』『那珂川の先史遺跡』第2集 那珂川の先史遺跡刊行会

- 38 天野努 1974 「地国穴台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』II 千葉県開発庁
- 39 田村隆、金子博英 1982 「鎌ヶ谷市林跡遺跡採集の隆起線文土器」『奈和』第20号 奈和同人会
- 40 佐伯秀人 1992 「前三舟台遺跡」富津市環境部環境保全課・君津都市文化財センター
- 41 安岡路洋 1969 「浦和市えんぎ山遺跡の調査」『第二回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会
- 42 庄野靖寿、安岡路洋 1977 「出土遺物」『大丸山遺跡発掘調査報告書』大丸山遺跡調査会
- 43 安岡路洋 1964 「大宮市内発見の二・三の土器について」『埼玉考古』第2号 埼玉考古学会
- 44 青木美代子、鈴木仁子 1985 「十二番耕地遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告・III・三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集) (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 45 高橋敦、領塚正浩 1985 「八ヶ上遺跡第5地点」『富士見市遺跡群』富士見市教育委員会
- 46 安岡路洋 1977 「縄文時代の遺構・遺物」『小岩井渡場遺跡・発掘調査概報・』飯能市教育委員会
- 47 曽根原裕明 1994 「加能里遺跡第1次調査」『飯能の遺跡(17)』飯能市教育委員会
- 48 芹沢長介、吉田格、岡田淳子、金子浩昌 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』第8号 石器時代文化研究会
- 49 埼玉県立博物館・埼玉県立さきたま資料館・埼玉会館 1975 「さいたま考古展図録」埼玉県教育委員会
- 50 小林達雄、栗原文藏 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47卷第2号 日本考古学会
- 51 中島宏 1981 「埼玉県北部の草創期遺跡群について」『土曜考古』第3号 土曜考古学研究会
- 52 宮井英一 1985 「宮林遺跡」『大林I・II 宮林 下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 53 中島宏ほか 1980 「東光寺裏遺跡の発掘調査」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告・IV・』埼玉県教育委員会
- 54 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史』資料編 本庄市
- 55 本庄市史編集室編 1986 『本庄市史』通史編 I 本庄市
- 56 守茂和、古城泰ほか 1980 「遺物」『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会
- 57 宮崎朝雄ほか 1980 「如来堂B遺跡の発掘調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告・X・甘粕山』(埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集) 埼玉県教育委員会
- 58 宮崎朝雄ほか 1980 「如来堂C遺跡の発掘調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告・X・甘粕山』(埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集) 埼玉県教育委員会
- 59 金子彰男ほか 1986 『白樹原・桧下遺跡・発掘調査概報I・』白樹原・桧下遺跡調査会
- 60 重住豊ほか 1990 「向ノ原遺跡B地点・東京都太田記念会館建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・」東京都太田記念会館建設予定地内遺跡調査会
- 61 大坪宣雄 1984 「町田市川島谷遺跡群調査報告書」I 町田市小田急野津田・金井団地内遺跡調査会
- 62 坂本彰 1995 「花見山遺跡」(財)横浜市ふるさと歴史財団・埋蔵文化財センター
- 63 難波明 1990 「三ノ宮・宮ノ前遺跡」『文化財ノート』第1集 伊勢原市教育委員会
- 64 中村喜代重 1983 「先土器時代海老名市柏ヶ谷長ワサ遺跡発掘調査概要報告書」柏ヶ谷長ワサ遺跡調査団
- 65 村澤正弘 1983 「深見源訪山遺跡・神奈川県大和市深見所在の縄文時代草創期・先土器時代遺跡調査の記録・」(大和市文化財調査報告書第14集) 大和市教育委員会
- 66 戸田哲也ほか 1992 「縄文時代」『今田遺跡・発掘調査報告書・』今田遺跡発掘調査団
- 67 須田英一ほか 1995 「南葛野遺跡」南葛野遺跡発掘調査団
- 68 大参義一 1970 「酒呑ジュリンナ遺跡(2)」『名古屋大学文学部研究論集』史学17 (No.50) 名古屋大学文学部
- 69 原寛、紅村弘 1958 「岐阜県桜ノ湖遺跡略報」『石器時代』5号 石器時代文化研究会
- 70 原寛 1974 「土器」『桜の湖遺跡・岐阜県恵那郡坂下町桜の湖遺跡調査報告書・』坂下町教育委員会

- 71 澄田正一、安達厚三 1962「岐阜県九合洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 72 藤森栄一 1960「諏訪湖底曾根の調査」『信濃』第12巻第7号 信濃史学会
- 73 藤森栄一、桐原健、宮坂光昭 1965「諏訪湖片羽町の低地性遺跡調査報告」『信濃』17-4 信濃史学会
- 74 歌代勤ほか 1980「野尻湖周辺の人類遺跡の古環境」『地質学論集』第19号 日本地質学会
- 75 野尻湖人類考古グループ 1984「野尻仲町遺跡と向新田遺跡の旧石器・縄文草創期文化」『野尻湖の発掘3』（地図研專報第27号）地学団体研究会
- 76 鶴田典昭 2004「縄文時代の遺構と遺物」『仲町遺跡<第1分冊> - 一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書3-1』 - 信濃町内その3 - 国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター
- 77 鶴田典昭 2004「縄文時代の遺構と遺物」『仲町遺跡<第2分冊> - 一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書3-2』 - 信濃町内その3 - 国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター
- 78 埼玉考古学会 1986『埼玉考古』 - 埼玉考古学会30周年記念 - シンポジウム資料 埼玉考古学会
- 79 (財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター 1996『縄文時代草創期資料集』横浜市歴史博物館
- 80 横田義章 1963「青木湖底クマンバ遺跡第Ⅱ地点調査報告」『信濃』15-8 信濃史学会
- 81 稲口昇一、森島稔 1960「長野県柳又遺跡第1次調査概要」『日本考古学協会第26回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 82 酒井幸則 1983「増野川子石遺跡」『長野県史 考古資料編』全1巻(3) 主要遺跡 (財)長野県史刊行会
- 83 三好博喜 1989「京都府遺跡調査報告書」第12冊・志高遺跡 - (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 84 舞鶴市教育委員会 2002「浦入遺跡群発掘調査報告書」<遺物図版編> 舞鶴市教育委員会
- 85 米川仁一 2003「遺物の検討」『上津大片刈遺跡 - 国営総合農地開発事業上津ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』(奈良県文化財調査報告書 第104集) 奈良県立橿原考古学研究所
- 86 木下修 1979「先土器・縄文草創期の遺物」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 - 春日市大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区の調査 -』第11集 福岡県教育委員会
- 87 鎌本義昌、芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰 第一次発掘調査の概要」『考古学集刊』第3巻第1号 東京考古学会
- 88 長崎県教育委員会 1966「福井洞穴調査報告」図録篇(長崎県文化財調査報告書第4集) 長崎県教育委員会
- 89 鎌本義昌、芹沢長介 1967「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 90 芹沢長介 1974「旧石器時代の生活の知恵」『古代史発掘』1(旧石器時代) 講談社
- 91 麻生優、白石浩之 1976「泉福寺洞穴の第七次調査」『考古学ジャーナル』130 ニュー・サイエンス社
- 92 麻生優 1985「泉福寺洞穴の発掘記録」榮地書館
- 93 本嶋康弘 1995「無田原遺跡 - 熊本県菊池郡旭志村大字麓所在の遺跡 県営農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -」(熊本県文化財調査報告書 第148集) 熊本県教育委員会
- 94 同本信也 2003「調査の結果」『河陽F遺跡 - 土地交通省立野ダム建設事業における沢津野土捨場進入路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』(熊本県文化財調査報告書第209集) 熊本県教育委員会
- 95 宮坂孝宏 1994「白鳥平B遺跡調査報告」(熊本県文化財調査報告書第142集) 熊本県教育委員会
- 96 日高孝治ほか 1985「堂地西遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会
- 97 管付和樹 1996「椎屋形第1遺跡の調査」「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡 - 県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』宮崎県教育委員会
- 98 重山郁子 1996「上の原遺跡の調査」「椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡 - 県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』宮崎県教育委員会
- 99 東憲章 1997「調査の記録」『霧島遺跡 - 県道都農岐線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第4集) 宮崎県埋蔵文化財センター

- 100 鈴木重治 1973「本邦における土器起源に関する研究 - 岩土原遺跡の調査を中心に - 」『南九州大学園芸学部研究報告・自然科学人文社会科学』第3号 南九州大学園芸学部
- 101 池水寛治 1967「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第3卷第4号 東京考古学会
- 102 中山清美、田村晃一、金井安子 1989「喜子川遺跡 - 第1次・第2次発掘調査報告 - 」『青山考古』第7号 青山考古学会
- 103 田村晃一、池田治 1995「喜子川遺跡 - 第3次・第4次発掘調査報告 - 」『青山史学』第14号 青山学院大学文学部史学科研究室
- 104 中村恩 1978「高又遺跡」(研究室活動報告3) 熊本大学法文学部考古学研究室
- 105 永井昌文、三島格 1964「奄美大島土浜ヤーや洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』第50巻第2号 日本考古学会
- 106 中山清美 1992「イヤンヤ(ヤーや)洞穴遺跡出土の爪形文土器」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会
- 107 松本信光 2000「土浜イヤンヤ(ヤーや)洞穴採集の土器」『南九州縄文通信』No.14 南九州縄文研究会
- 108 牛ノ浜修、堂込秀人 1983「第1貝塚」「面縄第1、第2貝塚・昭和57年度発掘調査概報 - 」伊仙町教育委員会
- 109 河口貞徳、本田道輝、瀬戸口望 1983「中甫洞穴」「鹿児島考古」第17号 鹿児島県考古学会
- 110 河口貞徳、本田道輝、瀬戸口望 1984「中甫洞穴」「鹿児島考古」第18号 鹿児島県考古学会
- 111 新田重清 1977「原始古代の沖縄(1)」「沖縄県立博物館紀要」第3号 沖縄県立博物館
- 112 知念勇 1977「渡具知東原 - 第1～2次発掘調査報告 - 」(談谷村文化財調査報告第3集) 談谷村教育委員会
- 113 島袋洋 1984「土器」「野国・野国貝塚群B地点発掘調査報告 - 」沖縄県教育委員会
- 114 国分直一、三島格 1965「ヤブチ式土器・琉球と奄美大島における文化交流の一証跡 - 」『水産大学校研究報告人文科学編』第10号 水産大学校
- 115 下地安広 1990「城間古墓群・牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書 - 」浦添市教育委員会
- 116 松川章 1988「チヂフチャーダー洞穴遺跡 - 範囲確認調査報告書 - 」浦添市教育委員会
- 117 宮城朝光 1979「渡嘉敷島船越原遺跡の土器・曾煙式土器、ヤブチ式土器、爪形文土器の土器資料 - 」『花絵』創刊号 沖縄国際大学考古学研究会O.B.会

- 伊藤圭 2004「指頭押圧されたヤブチ式土器」「与那城町海の文化資料館 紀要」創刊号 与那城町海の文化資料館
- 江坂輝彌 1980「西北九州地方の縄文文化と朝鮮半島南部の先史文化」『月刊 考古学ジャーナル』No.183 ニュー・サイエンス社
- 岡本東三 1982「縄文時代I(早期・前期)」「日本の美術2」No.189 至文堂
- 神原雄一郎 2003「盛岡の縄文土器・草創期・早期 - 」「盛岡の歴史を語る会資料」(レジュメ)
- 岸本義彦 1984「取東」「野国・野国貝塚群B地点発掘調査報告 - 」沖縄県教育委員会
- 岸本義彦 1991「南島の土器起源をめぐって - 爪形文土器についての一考察 - 」「奄美考古」第2号 奄美考古学研究会
- 岸本義彦 1997「南島の爪形文土器文化」「南島の人と文化の起源」公開学習会実行委員会
- 坂田邦洋 1978「韓國墜起文土器の研究」昭和堂印刷
- 下地安広 2000「土器からみた琉球列島の交流史」「古代文化」第52巻第3号 古代学協会
- 新東晃一 1997「提起 爪形文土器の古さと系譜」「南島の人と文化の起源」公開学習会実行委員会
- 白石浩之 1984「縄文時代草創期の爪形文土器の研究とその課題」「大和市史研究」10 大和市役所管理部文書課
- 土肥孝 1982「縄文文化起源論」「縄文土器の研究」第3巻・縄文土器I・株雄山閣出版
- 韓炳三 1979「主要遺跡解説」「世界陶磁全集」17 - 韓国古代・小学館
- 金元龍 1973「新版 韓国考古学概説」一志社
- 金廷鶴 1980「幾何文(櫛文)土器の編年」「月刊 考古学ジャーナル」No.183 ニュー・サイエンス社

新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層出土の動物遺体にみられる傷痕

Cut Marks on Animal Bones Found in Lower Layer of the Aragusuku-Shichabaru Site,
Location 2, Zone II

久貝 弥嗣
Kugai Mitsugu

ABSTRACT: The lower layer of the Aragusuku-Shichabaru site, Location 2, Zone II belongs to Early Okinawa Shellmound Period (Early Jomon Period). This layer yielded some nail-marked pottery and a considerable number of remains of animals such as Ryukyu wild boar, sea turtles and various birds. Some of these bones bear several linear scars in parallel. These scars may be cut marks, and are important in the study of substantial activity of that time. This paper attempts to observe and classify the cut marks, and to find tendencies in the position of the cuts. A comparison with the specimens from other sites is also made, assuming the marks as indications of cutting activity.

1. はじめに

新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層の動物遺体については、本報告において傷痕資料が認められるとしている。本論では、これらの傷痕資料に関して、本報告で行えなかった分類案などの具体的な部分に関して補論を行っていきたい。



図1 新城下原第二遺跡位置図（沖縄県立埋蔵文化財センター2006 P15より）

2. 新城下原第二遺跡下層の概要

新城下原第二遺跡Ⅱ地区下層の状況について概略していきたい。

新城下原第二遺跡は、北谷町と宜野湾市にまたがっており、現在はキャンプ瑞慶覧内に存在する遺跡である。平成11～16年度にかけて「キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査」として発掘調査が行われ、平成18年3月に沖縄県立埋蔵文化財センターより報告書が刊行される。新城下原第二遺跡は、調査区がⅠ～Ⅲ地区に分かれている。本論で扱う、沖縄貝塚時代早期の層は、Ⅱ地区のⅨ層以下を示しており、本論ではⅡ地区下層と称する。

Ⅱ地区下層は、現地表面から4m下に掘り下げた段階で確認された。Ⅸ層の上面は標高0.0mに位置し、海岸低地に立地している。Ⅱ地区下層は前述したようにⅨ層以下示している。Ⅸ層は爪形文土器が出土する、沖縄貝塚時代早期に位置づけられる。本層は、全面に倒木や樹木が広がっており、それらの間に爪形文土器や獸骨、貝類などが大量に出土した(図版1)。Ⅸ層の段階における当調査区の環境については「陸水域もしくは汽水域の環境」で、花粉化石や植物遺体の状況などから「海岸近くの森林縁辺部」としてまとめられている(沖縄県立埋蔵文化財センター2006)。動物遺体の状況としては、リュウキユウイノシシが圧倒的な主体を占めており、ウミガメ類、トリ類がこれにつづく。これらの出土状況は、同時期の野国貝塚B地点と類似しており、興味深い。放射線炭素年代の測定結果は 6080 ± 50 BPである。X層は無遺物層である。XⅠ層からは無文土器が1点出土しており動物遺体も少量出土する。Ⅸ層との間にX層という間層をはさんで無文土器が出土している点からも、爪形文土器の段階よりも古い層の可能性がある。XⅢ層以下からの人工遺物の出土は認められないものの、動物遺体の出土は少量ながら認められる。XⅢ層においては、動物遺体からだされた放射線炭素年代は 6350 ± 50 BPという結果が得られている。XⅣ・XV層に関しては、基盤のクチャの窪み部分にたまたま層として捉えられ、明確な文化層としては捉えない。以上のように、爪形文土器を主体とするⅨ層から動物遺体が多く出土し、XⅠ層以下においても少量ながら出土する状況を示している。

脊椎動物遺体種名一覧

A. 脊椎動物門	A.Phylum VERTEBRATE	3. ツル目	3.Order Gruiformes
I. 硬骨魚綱	I.Class Chondrichthyes	a. ツル科	a.Family Gruidae/Gruidae gen. et sp.indet.
1. ウナギ目	1.Order Anguilliformes	4. チドリ目	4.Chradriiformes
a. ツツボ科	a.Family Muraenidae	a. シギ科	a..Family S colopacidae
属種不明	Muraenidae gen. et sp. indet.	チエウシャクシギ	Numenius phaeopus
II. 爬虫綱	II.Class Reptilia	5. スズメ目	5.Order Passeriformes
1. カメ目	1.Order Chelonia	a. カラス科	a.Family Corvidae
a. ウミガメ科	a.Family Chelonidae	カラス類	Corvus sp.
アオウミガメ	Chelonia mydas	IV. 哺乳綱	IV. Class Mammalia
アカウミガメ	Caretta caretta gigas	1. 獣齒目	1.Order Rodentia
III. 鳥綱	III.Class Aves	a.. ネズミ科	a.Family Muridae
1. ミズナギドリ目	1.Order Procellariiformes	ケナガネズミ	Diplothrrix legata
ミズナギドリ科	Family Procellariidae	2. ウシ目	2.Order Artiodactyla
オオミズナギドリ	Calonectris leucomelas	a. イノシシ科	a.Family Suidae
2. ガンカモ目	2.Oredr Anseriformes	リュウキユウイノシシ	Sus leucrystax riukiuanus
a. ガンカモ科	a.Family Anatidae	b. シカ科	b.Family Cervidae
カモ類	Anatidae gen. et sp.Indet	ニホンジカ	Cervus nippon

(『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター2006年 p261・262より)

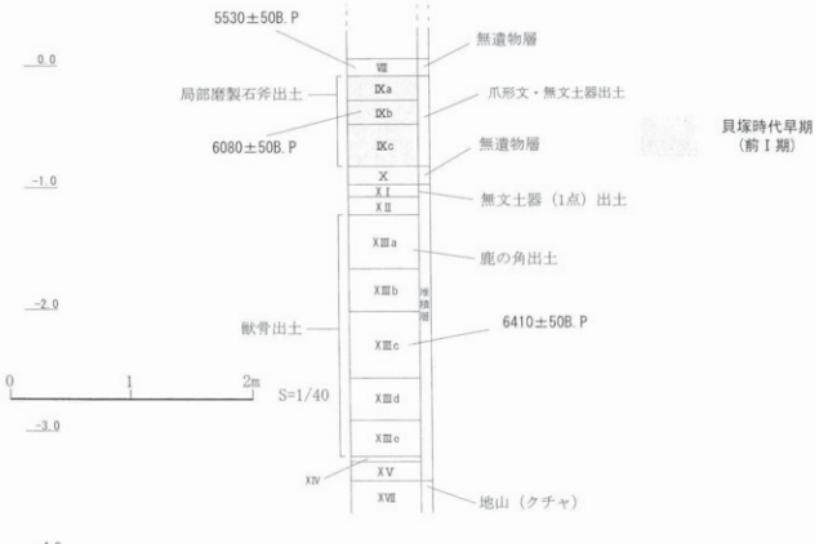


図2 II地区基本層序 (沖縄県立埋蔵文化財センター2006 P20より)



図版1 II地区下層遺物出土状況 (沖縄県立埋蔵文化財センター2006 卷頭図版10より)

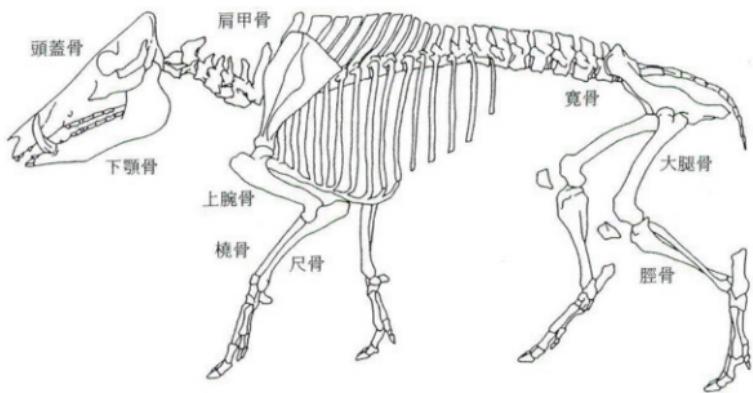


図3 イノシシ骨格図（西本・松井1999 P22より）



C.M.ペリンズ/A.L.A.ミドルトン編（1986）を改変

図4 トリ骨格図（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2005より）

3. 資料紹介

新城下原第二遺跡のII地区下層とは、前述したようにII地区のIX層以下を示している。これらの資料の中で、リュウキュウイノシシとトリ類に関して明瞭な傷跡が確認された。本論では、これらのリュウキュウイノシシとトリ類を対象とし、リュウキュウイノシシに関しては、肩甲骨、上腕骨、尺骨、桡骨、大腿骨、脛骨の6部位を対象に観察を行い、傷跡資料の抜き出しを行った。下記に、II地区下層より出土した各種・各部位の出土点数を示した。

尚、図版2~5の資料提示の際に資料につけられている、Dotは現場での「取り上げナンバー」を示し、(整)はDotナンバーのないものに関して、資料整理の段階で用いた「整理ナンバー」を示している。

表1 II地区下層出土の傷跡資料点数

	肩甲骨	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨	合計
IX層	83(7)	231(8)	105(5)	154(3)	276(6)	222(13)	1071(42)
XII層	2	0	0	1	1	0	4
XIII層	4	2	2	1	4	3	16
XIV層	1	7	2	4	4	4	22
XV層	1	1	1	2	2	2	9
合計	91(7)	241(8)	110(5)	162(3)	287(6)	231(13)	1122(42)

・()内は傷痕資料の点数を示す

・『新城下原第二遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年 P273~276の出土点数表を変更。IXa~c、グリッドを一括した)

4. 傷跡の分析方法と分類案

分析方法

動物遺体に残された傷痕からは、当時の人々の生業活動の一部を考えいくことできる。特に、食料としての動物の解体作業の復元や、使用された道具との対応関係は最も重要な点である。そこで、本論では、動物遺体の傷痕の分類を行うことで、使用された道具の種類や使用方法の違いについて考えていきたい。また、傷痕の残る箇所を模式図に表すことで、各部位における傷跡の頻度についても考えていきたい。

まず、傷痕の分類方法について述べたい。先史時代の沖縄県内の遺跡における動物遺体への傷跡の報告は少なく、その実態は不明確な部分が多い状態である。本論でいう傷痕に関しては、「解体痕」の可能性があることは報告書内でも触れている。そこで、まず解体痕の種類について高知県居德遺跡群を例に概略していきたい。

高知県居德遺跡群は、高知県土佐市に所在する縄文時代晩期~弥生時代にかけての遺跡である。居德遺跡群からは多くの動物遺体が出土しており、「(中略)他の縄文、弥生遺跡で例をみない特徴をもつ傷が多数存在する。」(丸山ほか2004年 p 216より引用)として、これらの傷跡の分類を行っている。これらの傷跡に分類を下記にまとめた。

- ・刃部を前後に往復させる切断痕(カットマーク: cutmark)
- ・手斧、鉈のような道具による加撃痕(チョップマーク: Chop Mark)
- ・鑿のように刃を突き立てる刺突痕(Stab Mark)

- ・擦り切り痕(Rub Mark)
- ・鑿などによる抉り痕(Scoop mark)
- ・ヤスリ状の凸凹のある道具で磨く研磨痕(Grinding Mark)
- ・道具使用時の使用痕(Use Ware)（『居德遺跡群IV』丸山真史・宮路淳子・松井章2004、p 216より）

分類案

本遺跡の動物遺体の傷痕の観察を行った結果、上述した7つの分類の中で、カットマークとチョップマークに類似する資料が認められ、大部分が前者である。しかしながら、これらのカットマークと思われる資料についても、その状況、特に傷痕の及ぶ幅や密度に違いが認められた。そこで本論では、まず使用される道具の違いについて2大別する。これは、概ねカットマークとチョップマークに相当する。そして次の段階として、使用の状況、解体方法(傷痕の及ぶ幅や密度)によって細分を行う

1：比較的浅い線状の傷痕であり、カットマークに相当する

1-a：傷痕の密度が低く、比較的単発的なもの

1-b：傷痕の密度が非常に高く、広範囲に及ぶもの。

2：1に比べて傷が深く単発的である。チョップマークに相当する。

上記した3つの分類案を用いて、新城下原第二遺跡の傷痕資料の分類を行う。

次に、傷痕の認められる箇所の把握について述べていきたい。前述したように、この作業は、特定箇所への傷痕の頻度の割合を目的とする。そこで、模式図に傷痕の見られる部分を記して、頻度の割合の検証を行った。傷痕の見られる箇所の名称に関しては、骨の部分的な用語を用いて、近位端・骨幹・遠位端のいずれか近い場所に位置し、前面部、後面部、内側部、外側などの名称を連結して記した

5. 観察事項

傷跡の認められた、リュウキュウイノシシとトリ類の特徴的な資料を図版2~5に示した。これらの資料の観察事項をまとめると共に、各種、各部位(箇所)の状況についてまとめていきたい。

リュウキュウイノシシ

肩甲骨

肩甲骨に認められる傷跡は、7点8箇所であった。

図版2肩甲骨Dot1576は、分類案1-aである。遠位端外側部分に約10mmの線状の傷が平行に4~5本認められる。この傷痕は、肩甲骨の特徴を表しており、8箇所中6箇所はこの遠位端外側(A)に集中する。これは、大部分の肩甲骨の近位端部分が破損し、遠位端側の残存状況が良好であることを考慮しなければならないが、肩甲骨に認められる1つの特徴として捉えられる。その他には、遠位端内側(B)にも、2箇所の傷痕が認められた。肩甲骨に認められる傷痕は全て分類案1-aである。

表2 肩胛骨の傷痕箇所

	遠位端外側(A)	遠位端内側(B)	合計
1-a	6	2	8
合計	6	2	8

上腕骨

上腕骨には、8点9箇所の傷痕が認められた。

図版2Dot1780は、傷痕が骨幹後面部に2箇所あり、いずれも分類案1-aである。2箇所の内の近位端側の傷痕は、長さが約3mmと短く、総計4本がほぼ平行に並ぶ。遠位端側の傷痕は、前者よりも明瞭で、長さも約6mmと長めである。総計5本が平行に並んでいる。後者は一部剥離するが、同一のものであり、後者の方がやや深めである。

図版2Dot2429は、分類案1-bである。近位置端前面に認められる傷痕であるが、長さ約4~5mmの浅い傷が約150mmの範囲に非常に密に認められる。

図版2(整)44は、近位端外側部分にあり、分類案1-aである。長さ約4mmの傷が斜位に3本認められる。上腕骨においては、近位端前面部(A)が3点やや多いものの、他の部位との顕著な差は認められない。1-bの割合がやや高く、遠位端後面部は全て分類案1-bである。

表3 上腕骨の傷痕箇所

	近位端前面部(A)	近位端外側部(B)	骨幹後面部(C)	遠位端前面部(D)	遠位端後面部(E)	合計
1-a	2	1	2			5
1-b		1			1	2
合計	3	1	2	1	2	9

尺骨

尺骨に認められる傷跡は、5点5箇所であった。

図版2Dot333は、近位端内側部分に、分類案1-aの傷痕が認められる。傷痕は長さが約8~9mmと比較的長い。ほぼ同一方向に比較的密に認められる。

図版3Dot2237は、近位端後面部に、分類案1-bの傷跡が認められる。長さ約5~6mmの浅い傷が、約25mmの幅で密に入っている。一部石灰質が付着している。

尺骨は、各箇所とも1~2点と少なく、顕著な傾向は認められず、やや分類案1-aが多い傾向にある。

表4 尺骨の傷痕箇所

	近位端後面部(A)	近位端内側部(B)	骨幹内側部分(C)	骨幹外側部分(D)	合計
1-a		1	1	2	4
1-b		1			1
合計		1	1	1	5

桡骨

桡骨に認められる傷跡は3点3箇所と全体的に少ない。

図版3Dot2723は、遠位端前面部に分類案1-aの傷跡が認められる。傷の長さは約5mmと2mmの傷が平行に2本並んでいる。傷痕は比較的深く、分類案2の可能性も考えられる。

図版3Dot3055は、近位端前面部で、分類案2の傷痕である。傷痕は約4~2mmの長さであり、深い。4本が平行に明瞭に並んでおり、その遠位端側にもまとった傷痕が認められる。

図版4Dot3336は、遠位端前面部に分類案1-aの傷痕が認められる。長さは約5~3mmで明瞭に残っている。

前述したように桡骨に認められる傷痕は少なかったが、分類案2が認められる点は特記すべきである。

表5 桡骨の傷痕箇所

	近位端前面部(A)	遠位端前面部(B)	合計
1-a		2	2
2	1		1
合計	1	2	3

大腿骨

大腿骨に認められる傷痕は6点6箇所である。

図版4Dot200は、遠位端前面部に分類案1-aの傷痕が認められる。傷痕の長さは約4~5mmで、3本が平行に並んでいる。やや深めである。

図版4Dot2821は、骨幹外側部分に分類案1-aの傷痕が認められる。傷痕の長さは、約5mmで、骨幹の幅広い範囲に認められる。しかしながら、分類案1-bに比べると単発的であるため、分類案1-aの範疇として捉えた。

大腿骨の傷痕の特徴としては、骨幹外側部分がやや多い点があげられる。資料点数が少ないものの、当箇所における傷痕は比較的明瞭である。また、今回は大腿骨資料において、分類案1-aしか認められなかつた。

表6 大腿骨の傷痕箇所

	骨幹外側部分(A)	遠位端前面部(B)	遠位端後面部(C)	合計
1-a	3	1	2	6
合計	3	1	2	6

脛骨

脛骨に認められる傷痕は13点13箇所である。

図版4Dot1214は、遠位端後面部分に、分類案1-aが認められる。傷痕は基本的に横位に並んでいるが、やや不規則である。破損部分にかかっているため、遠位端側に広がる可能性がある。

図版5Dot1810は、遠位端後側部分に、分類案1-bが認められる。遠位端側であるが、傷痕の及ぶ範囲は広く、骨幹部分にまで及んでいる。傷痕はやや不規則で交差するものも認められる。

図版5Dot3201は、遠位端外側部分に、分類案1-bが認められる。横位に密である。

図版5(整)179は、遠位端前面部分に、分類案1-aが認められる。傷痕は比較的浅いものである。

脛骨は、今回観察を行った6部位中最も多い13点の傷痕を認めることができた。その中でも遠位端前面部分、近位端前面部分、遠位端内側部分などに比較的傷痕がまとまっている。しかしながら、資料点数が少ないとから、今後の着目点の1つとして捉えたい。傷痕の種類としては、分類案1-aが最も多い状態を示している。

表7 脛骨の傷痕箇所

	近位端前面部分(A)	近位端外側部分(B)	遠位端前面部分(C)	遠位端後面部分(D)	遠位端外側部分(E)	骨幹前面部分(F)	骨幹内側部分(G)	骨幹外側部分(I)	合計
1-a	1	1	3	1			1	2	9
1-b				1	1	1			3
2	1								1
合計	2	1	3	2	1	1	1	2	13

トリ類(ナペヅル)

トリ類のナペヅルの中足骨においても傷痕資料が1点認められた。

図版5Dot2024は、骨幹前面部に分類案1-aが認められる。骨幹の幅広い範囲に傷痕が認められるが、分類案1-bとは異なり単発的であることから、分類案1-aとした。また、傷痕の様子も、リュウキユウイノシシで認められた傷痕と同様のものと思われる。

6.まとめ

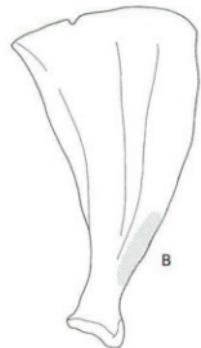
動物遺体に残された傷跡に関しては、県内遺跡においても事例紹介が各報告書で行なわれている。しかしながら、これらの傷跡に関しては、グスク時代に相当するものが多く、刃物による解体痕として報告が行われている。沖縄貝塚時代早期の資料として、動物遺体に残された傷跡の報告は認められない。しかしながら、野国貝塚の動物遺体の報告を行った川島由次は大脑食に関して指摘を行なっている。このことからも当時期における動物遺体の解体方法が早くから、指定されていることが分かる。

本論においても、動物遺体の傷痕から当時の解体方法へのアプローチを試みた。まず、傷痕の種類に関しては、概ね分類案1とされるカットマークが主体を占めている。カットマークについては、その使用の状況(密度や幅の範囲)によって細分を行ったが、これは、解体の細部の状況を知る上でも重要な点である。

次に解体を行う道具について考えてみたい。新城下原第二遺跡から出土する石器の種類としては、石斧が主体であり、野国貝塚B地点と同様の状況を示している。本遺跡における傷跡の分類案1については、その幅が非常に小さいことなどから、石斧によるものとは考えがたい。分類案2についても同様であり、出土する石斧に関してはやや大形の状況を示している。傷痕の状況などから考えると、ナイフ状の専用の石器もしくは貝器などが必要であると考える。これまでの沖縄県の貝塚時代早期からこのような遺物の出土例は認められない。これは、本遺跡が居住地からやや離れた、廃棄場である貝塚的な様相を示している点も考慮しなければならないが、今後の発掘調査に期待される。

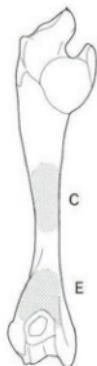
最後に今後の課題について記したい。今回対象とした部位は、肩甲骨をはじめとした6部位である。他の資料に関しては、筆者の力不足もあり観察を行うことができなかった。距骨、踵骨、寛骨についても資料の残りが良く、今後は他の部位に関して、観察をつづけていきたい。また、実験事例から傷痕の種類や使用した道具の状況を考えていくことも非常に大事であり、今後の課題としたい。

(くがい みつぐ：調査課 嘴託員)



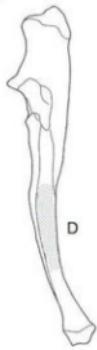
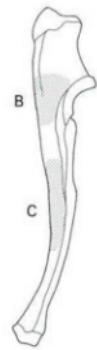
肩甲骨

A : 遠位端外側部分
B : 遠位端内側部分



上腕骨

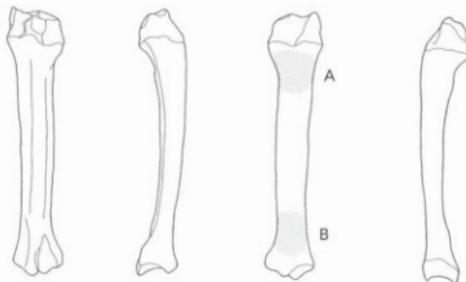
A : 近位端前面部分
B : 近位端外側部分
C : 骨幹後面部分
D : 遠位端前面部分
E : 遠位端後面部分



尺骨

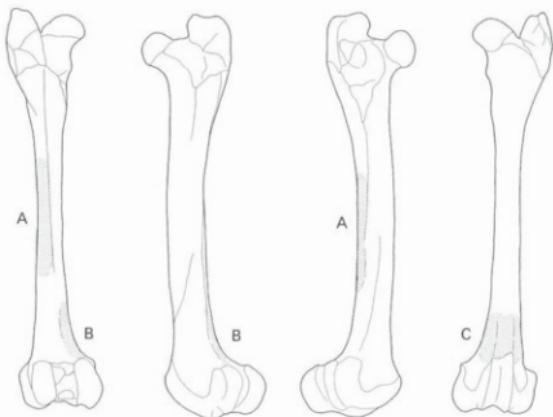
A : 近位端後面部分
B : 近位端内側部分
C : 骨幹内側部分
D : 骨幹外側部分

図5 肩甲骨・上腕骨・尺骨の箇所別頻度模式図



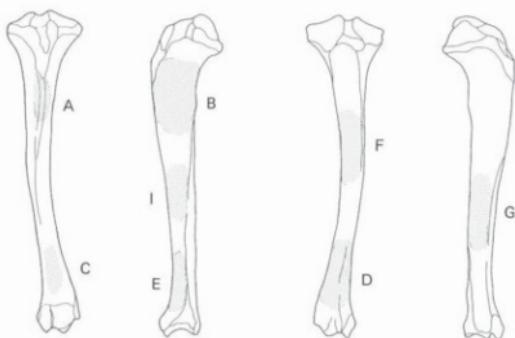
桡骨

A : 近位端前面部分
B : 遠位端前面部分



大腿骨

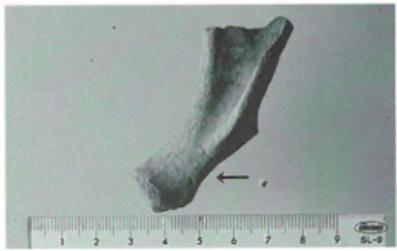
A : 骨幹外側部分
B : 遠位端前面部分
C : 遠位端後面部分



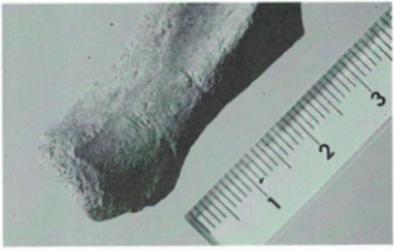
脛骨

A : 近位端前面部分
B : 近位端外側部分
C : 遠位端前面部分
D : 遠位端後面部分
E : 遠位端外側部分
F : 骨幹後面部分
G : 骨幹内側部分
I : 骨幹外側部分

図 6 桡骨・大腿骨・脛骨の箇所別頻度模式図



肩甲骨 Dot1576



上腕骨 Dot1780



上腕骨 Dot2429

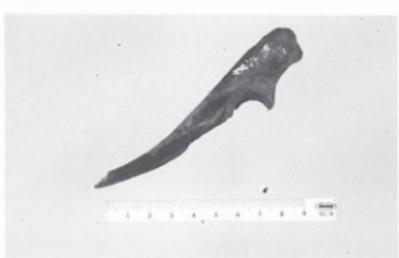


上腕骨(整)44
図版2 傷痕資料①





尺骨 Dot333



尺骨 Dot2237



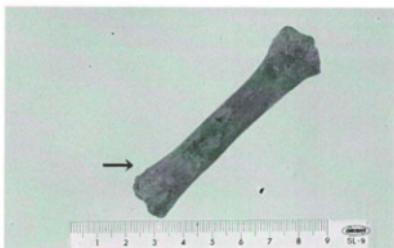
桡骨 Dot2723



桡骨 Dot3055



図版3 傷痕資料②



橈骨 Dot3336



大腿骨 Dot200



大腿骨 Dot2821



脛骨 Dot1214

圖版 4 傷痕資料③



脛骨 Dot1810



脛骨 Dot3201



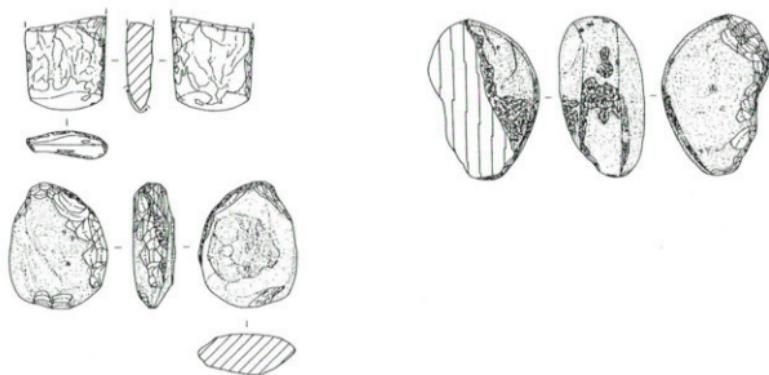
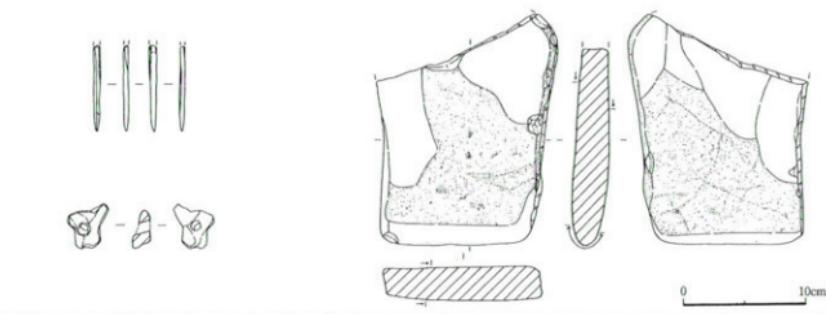
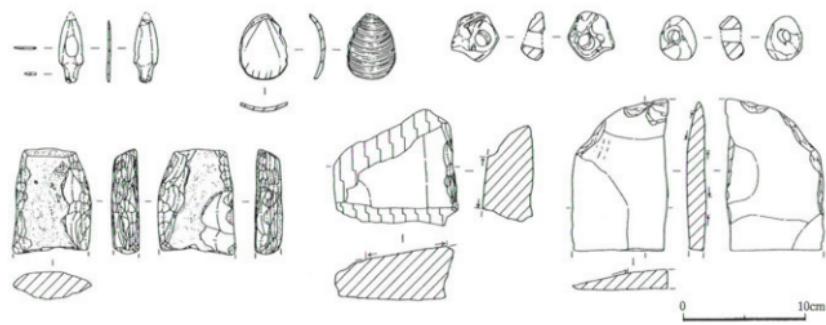
脛骨(整)179



トリ類(ナベヅル中足骨)Dot2024

図版5 傷痕資料④





図版7 IX層の遺物組成(土器を除く)

引用・参考文献

- 沖縄県教育委員会 1984年 『野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告書』
- 加藤嘉太郎 1989年 『第二次改訂改版 家畜比較解剖図説・上巻-』 養賢堂
- 西本豈弘・松井章 1999年 『考古学と自然科学-② 考古学と動物学』 同成社
- (財)高知県文化財团埋蔵文化財センター 2004年 『居德遺跡群IV 四国横断自動車(入野～須崎)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2005年 『埋蔵文化財ニュース』120 環境考古学5 鳥類骨格図譜
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年 『新城下原第二遺跡-キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告-』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター報告書第35集

首里城跡出土銭貨の銭種構成について

Assemblage of Coin Types found in the Shuri Castle Site

長濱 健起

Nagahama Tatsuki

ABSTRACT: The Shuri Castle site has been excavated for over thirty years and a variety of artifacts and features have been reported. The classification and chronology of ceramics have dominated recent discussions, but the classification of coins is very difficult to carry out. In general, coins are believed to be easy to recognize in type and assemblage, however, there exist copy casts that make it difficult to use them as periodical markers. Therefore, this paper attempts to compile the entire corpus of coins excavated from Shuri Castle and to reconfirm the assemblages. Then, copy casts such as 'Kajiki' coins and Nagasaki trade coins are extracted for further analysis.

1. はじめに

首里城跡の発掘調査も沖縄県教育委員会が1974年に行って以来、すでに30年余が経過し、調査報告書も15冊以上が刊行された。その中で、最も注目されているのが中国産をはじめとする大量の輸入陶磁器である。この陶磁器に関しては、比較的充実した報告や論考もなされている。しかし、その重要性に比して、いまいち注目度の低い資料の一つに出土銭貨を挙げることができるが、この銭貨についても、近年は知念隆博氏が首里城跡出土の資料や県内の清朝銭などの検討を行っている。しかしながら、その論考では数量を提示した具体的な銭種構成の議論までは及んでいない。

そこで本稿では、いくつか可能な地域については未掲載資料も対象にすることで、より明確な集計を行い、首里城跡における現状での銭種構成および、他遺跡との比較・検討をする。また、その中で加治木銭や長崎貿易銭などの模鋳銭を抽出していくことで、若干の分析を試みる。なお、首里城跡の近隣に位置し、関連性のある遺跡の天界寺跡や円覚寺跡の出土銭も参考資料として扱っていく。

2. 首里城跡出土銭貨の銭種構成について

首里城跡からの出土銭貨は、西暦14年を初鋳年とする貨泉をはじめ、唐、北宋、南宋、金、元、明、清、朝鮮、琉球、米国、日本と各国各王朝の資料がある。これらを王朝ごとに集計すると、北宋銭や明朝銭が比較的多く得られていることは周知のとおりである。しかし、これを銭種ごとに集計した場合、首里城跡において最も多く得られている銭種は洪武通寶であり、その次に無文銭、永樂通寶、寛永通寶の順であることが表1からうかがえる。

最多の出土例を見せる洪武通寶は、各地区とも約20点以下の点数が確認されているわけだが、綾門大道跡、歓会門跡・久慶門跡、周辺遺跡の天界寺跡などにおいては20~40点が得られており、下之御庭跡・用物座跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡の調査では50点もの洪武通寶が出土している。また、同じ明銭である永樂通寶については、多くの地区において洪武通寶より出土量が少なく、10点未満の確認にとどまる。しかし、下之御庭跡からは95点と洪武通寶よりも多く出土しており、注目すべき点

表1-1 首里城跡出土銭貨集計表

	初鑄年	國	御庭	泰神門	下之御庭也	經世門	右挾門	上の毛	管理用道路	城郭 南側下	城の下	鏡門 大道	東の アザナ	南殿	歓会門 久慶門	円覺寺	天界寺	合計	
半兩																		1 1	
貨泉	14	新			1													1 2	
五銖	24	後漢			1													1 2	
開元通寶	621	唐		2	1	2	2	1	2	3	2	3	3	14?	19	1	4	59	
乾元重寶	758	唐								1			1?					1 3	
太平通寶	976	北宋								1	1		1	1	4			1 9	
淳化元寶	990	北宋									2		1	1	3?				7
至道元寶	995	北宋	1	1	1					2			3	1	2			1 12	
咸平元寶	998	北宋			1					2	1?				6?			3 13	
景德元寶	1004	北宋			1	1			1				3	1	9			2 38	
祥符元寶	1009	北宋			1						1				2?			4	
祥符通寶	1009	北宋			1							1						2	
天禧通寶	1017	北宋								2			1					3	
天聖元寶	1023	北宋			1	1	1			2	1		1	2	8			2 19	
景祐元寶	1034	北宋		1?						2	1			1	1			6	
皇宋通寶	1038	北宋		2	2			1		6	4	1	8	3				2 29	
至和通寶	1054	北宋																1 1	
至和元寶	1054	北宋		1	1													2	
嘉祐通寶	1056	北宋										1				1	2	4	
嘉祐元寶	1056	北宋														1	1		
治平元寶	1064	北宋		1	1				1	1			1					5	
治平通寶	1064	北宋										1?						1	
熙寧元寶	1068	北宋		1					1	2	4		4	1	12?	2	5	32	
熙寧重寶	1071	北宋		1							1(大1)							2 4	
元豐通寶	1078	北宋		1	2	1		1	4(大2)		1	2	2	15		8	37		
元祐通寶	1086	北宋		3(大1)	2	1		1	1		1		2	9		6	26		
紹聖元寶	1094	北宋			1	3				1		1(大1)			1 3(大)			10	
元符通寶	1098	北宋									1							1 2	
聖宋元寶	1101	北宋				1			5		1	2	1			2		12	
崇寧重寶	1103	北宋								1			1(大1)			1(大1)		3	
大觀通寶	1107	北宋					1			2			1	7?				13	
政和通寶	1111	北宋		1	2			1	1	1	1 6(大1)		1	9		3	26		
宣和通寶	1119	北宋																1 1	
宣和元寶	1119	北宋											2					3	
北宋錢不明					3					3	2?		51				7	66	
淳熙元寶	1174	南宋				1(大1)												1 2	
慶元通寶	1195	南宋																1 1	
嘉定通寶	1208	南宋										1						1	
紹定通寶	1228	南宋											1					1 1	
端平元寶	1234	南宋										1						1	
咸淳元寶	1255	南宋									1		1					2	
南宋錢不明											1?							1	
正隆元寶	1157	金			1													1	
至大通寶	1310	元									1				1			2	
大中通寶	1361	明			1													1	

表1－2 首里城跡出土銭貨集計表

	初鑄年	国	御庭	奉神門	下之御庭他	破風門	右抜け門	上の毛	管理用道路	城郭下	城の下	城門大道	東のアザナ	南殿	飲食門久慶殿	円覚寺	天界寺	合計
洪武通寶	1368	明		3	50	1	2		3	18	4	22	14	3	39	1	57	217
永樂通寶	1408	明			3	95	1	2		4	2	1	7	1	16	1	13	146
嘉靖通寶	1527	明								1								1
明銭不明															19			19
康熙通寶	1662	清																1
乾隆通寶	1736	清		1	1	1		1		1		1	1		1			1
道光通寶	1821	清			1	1			1							1		8
清銭不明					1											1		4
中國銭不明						1					9	1	1			18		30
朝鮮通寶	1423	朝鮮													1			1
大世通寶	1454	琉球			6									1				7
世高通寶	1461	琉球			1							1						2
金圓世寶	1470	琉球															1?	1
琉球銭														10?				10
加治木洪武									1							1		2
長崎元豐						1												1
叶手元祐											1							1
古寛永	1636	江戸		1	1	2	3	1	2	22	3	1	1		8	1		46
文銭	1668	江戸			1	1		2	1	2	1				1	1		10
新寛永	1697	江戸	2?	1	4	3	2	6	17	5	4	1			8	11		64
長崎寛永									1									1
寛永一文銭	1739	江戸								3							1	4
寛永銅貨															1			1
天保通寶	1835	江戸							1									1
江戸不明														6				6
雁首銭			1?	1			2				1						1	6
無文銭			2	2	2	4	3	7	34	19	4	63	4	12	21	108		285
香港一千					1													1
半銭			2		1				3					1	1	1		9
一銭			1		2	銅貨1			6	2			2	2	18			34
五銭									1	1					1	1		4
十銭															1	1		2
五十銭						銀貨1												1
10円					1									3	1			5
1セント										1			2		1	1		5
5セント										1								1
昭和?														4				4
不明						4	5	7	189	3		67	317		23	64		679

卓(大)は大括弧

であるものの、残念ながら地区ごとの集計表が提示されていないため、詳細を把握することはできない。無文銭に関しては、東のアザナ跡や城郭南側下地区、城の下地区、円覚寺跡、天界寺跡など主要施設からは若干離れた地区や城郭外からの検出が目立つ。寛永通寶も同様に、城郭南側下地区で他の地区と比して多めに出土していることが分かる。

この首里城跡の銭貨構成は、山北王の居城であった今帰仁城跡とも似た構成をなしている。すなわち、今帰仁城跡においても北宋銭が206点と比較的多く確認されてはいるものの、銭種別では洪武通寶（181点）が最も多く、永樂通寶（155点）、無文銭（75点）や寛永通寶（31点）などがそれに続いている。それを表2のグラフでみると、北宋銭と洪武通寶の差は大きく聞いておらず、また、永樂通寶も全体の約2割となっている。このように、今帰仁城跡などにおいても洪武通寶および永樂通寶を中心とした明朝銭と北宋銭の出土量に大差がないことが理解できる。

では、近世の首里城跡における銭種構成はどうであろうか。近世に移ると、寛永通寶やその同時期である無文銭（知念2004）などが台頭するようになり、県内においてもそれらが主体となって普及した。首里城跡などから出土する資料をみても、寛永通寶は120点以上、無文銭は220点余りが確認されている。しかし、首里城跡以外でも寛永通寶や無文銭が多く出土する遺跡が古墓や拝所などの祭祀遺跡である。その状況が顕著に表れている遺跡の一つに銘苅古墓群がある。銘苅古墓群では、グスク時代以前に鋳造されたと考えられる銭貨が確認されておらず、寛永通寶123点をはじめ、近世以降の銭貨が得られている。その割合は、寛永通寶が全体の4割以上を占めている。

これには、中世～近世における本土の墓の6枚の銭貨を副葬品とする六道銭の習慣があり（鈴木1999）、当時の沖縄の人々も六道銭の習慣を認識していたと考えることもできる。

以上、首里城跡など代表的な遺跡の銭種構成を大まかに比較した結果、洪武通寶が永樂通寶より多めに得られており、また、北宋銭と洪武通寶の出土量についても、そんなに大きな差はなかった。さらに、近世には日本からの影響を受けることで、清朝銭より寛永通寶の方が圧倒的多数の点数を占めていることが改めて把握できた。

3. 近年の模鋲銭および古銭学の研究からー模鋲銭抽出ー

出土銭貨をみていく上で、注意しなければならないのが、鋳造年代に関する事である。資料の銭文が明瞭であるからといって、その初鋳年が出土地点の年代にはならないことは周知のとおりである。その理由はいくつか挙げられるが、各地で模鋲銭などが大量に鋳造されていたことも一つの理由である。

そこで今回は、首里城跡の出土銭貨の中で模鋲銭と思われる資料が改めて確認できたため、古銭学の研究成果を引用して、加治木銭や長崎貿易銭などの特徴（古田2002）を紹介し、首里城跡各地区的資料から模鋲銭と思われる銭貨を抽出していく。

加治木銭は鹿児島の加治木で鋳造され、背に「加」「治」「木」のいずれかの文字がはめ込まれた銭貨や天下手祥符（註1）をのぞく加刀鏐（註2）または改造鏐（註3）と称される鏐銭が加治木銭と考えられているようである。ようするに、鏐銭製作段階の各銭文の誤字などが目立つものである。また、長崎貿易銭は日本国内の銅銭減少に伴い、1660年頃から1685年頃まで長崎中島銭座において海外輸出用として鋳造されていた銭貨で、「寶」の目の部分が比較的小さかったり、孔径が大きいなどの特徴がある。以下に首里城跡から出土した模鋲銭と思われる資料をみていく。

図2-1は不明瞭ながらも背上に「治」が確認できる加治木銭の洪武通寶である。2は銭文が小さく、「洪」の1画目と2画目の間隔が広くなっている加治木銭の洪武通寶である。3は皇宋通寶であ

るが、「皇」の白の部分が丸みを帯びて左右に広がる加治木錢である。4は楷書体の元豊通寶であるが、本錢には楷書体がないことや「豊」が「元」比べて狭いことから輸出用の長崎貿易錢であると考えられる。5は非常に不明瞭ではあるが、背上に「長」をもつ寛永通寶であることから長崎貿易錢であると思われる。

4. おわりに

これまで主に首里城跡の出土錢貨について述べてきた。錢種構成に関しては、これまで刊行された各地区の報告書を基に改めて作成したが、洪武通寶や永樂通寶をはじめとした明朝錢の出土量が多く、その点数は北宋錢のそれをも凌ぐほどである。また、無文錢についても寛永通寶より100点近くも多く得られており、今帰仁城跡においてもこれらと似た結果が把握できた。このことは、北宋錢が最も多く、次に寛永通寶、明朝錢の順に続くとする従来の見解とは異なり、各遺跡の錢種構成を改めて数量的に検討する必要があると考える。

また、今回は古錢学の研究成果を引用して模鋳錢の分類も試みた。しかしながら、筆者の未熟さと怠慢から首里城跡出土の資料をすべての確認することができず、模鋳錢の抽出も加治木錢と長崎貿易錢のみにとどまってしまった。ただ、出土錢貨の中で模鋳錢を意識して取り上げることが少なく、その点においては今後の沖縄における出土錢貨の研究に一石を投じるものと考える。今後も資料の見直しを注意深く行い、模鋳錢の分類についても各分野とリンクさせて検討していく必要がある。

本稿をまとめるにあたって、瀬戸哲也氏には様々なご協力およびご助言を頂いた。末尾となりましたが、記して感謝を申し上げます。

(ながはま たつき：調査課 臨時の任用専門員)

＜註＞

註1. 祥符通寶の模鋳錢で、背に「天下」と逆さまに記されたもの、面および背に「十」記号が鋳込まれたもの、色調や大きさに共通性がみられるものなどを称す。

註2. 母錢の錢文を一部削り、修正をして鋳造したと考えられる模鋳錢。

註3. 中国錢を模倣して、新たに母錢を作って鋳造したと考えられる模鋳錢。

引用・参考文献

- 沖縄県教育委員会 1998『首里城跡－御庭跡・奉神門跡遺構調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書 第133集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡一下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第3集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第9集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第14集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005『首里城跡－上の毛及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第27集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第1集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター文

化財調査報告書 第19集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡－城の下地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第18集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 『綾門大道－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第13集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第20集

沖縄県教育委員会 1995 『首里城跡－南殿・北殿跡遺構調査報告書－』 沖縄県文化財調査報告書 第120集

沖縄県教育委員会 1988 『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』 沖縄県文化財調査報告書 第88集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第10集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡（I）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第2集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『天界寺跡（II）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』 沖縄県立埋蔵文化財センター文化財調査報告書 第8集

鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会

知念隆博 2004 『清朝銭について』 『沖縄埋文研究』 第2号 沖縄県立埋蔵文化財センター

今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』 今帰仁村文化財調査報告書 第9集

今帰仁村教育委員会 1991 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』 今帰仁村文化財調査報告書 第14集

那覇市教育委員会 1999 『天界寺跡－首里城線街路事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告書 第42集

那覇市教育委員会 2000 『天界寺跡－首里公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市文化財調査報告書 第43集

那覇市教育委員会 1998 『銘苅古墓群（I）－那覇新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告V－』 那覇市文化財調査報告書 第39集

那覇市教育委員会 1999 『銘苅古墓群（II）－那覇新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VI－』 那覇市文化財調査報告書 第40集

那覇市教育委員会 2001 『銘苅古墓群（III）－那覇新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VII－』 那覇市文化財調査報告書 第50集

那覇市教育委員会 2004 『銘苅古墓群（IV）－那覇新都心地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VIII－』 一天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告VII－』 那覇市文化財調査報告書 第59集

古田修久 2002 『中世から近世前期の九州・沖縄の銭貨－古銭学的觀点からの分類－』 『九州・沖縄における中世貨幣の生産と流通』 1999～2001年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

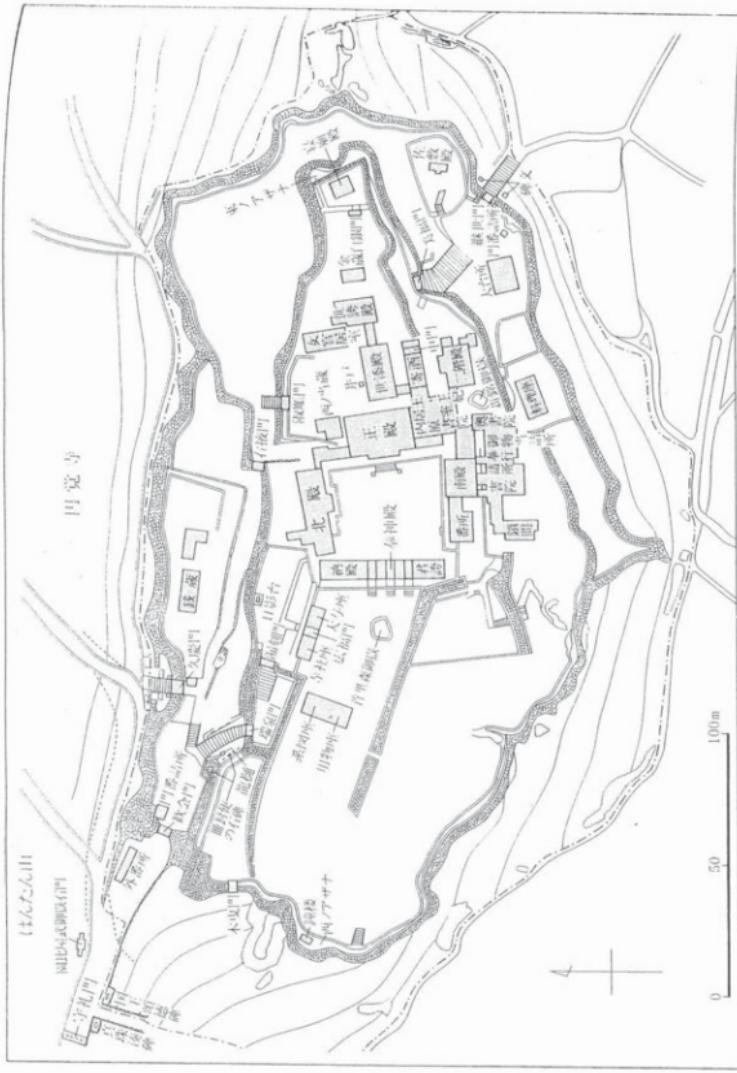
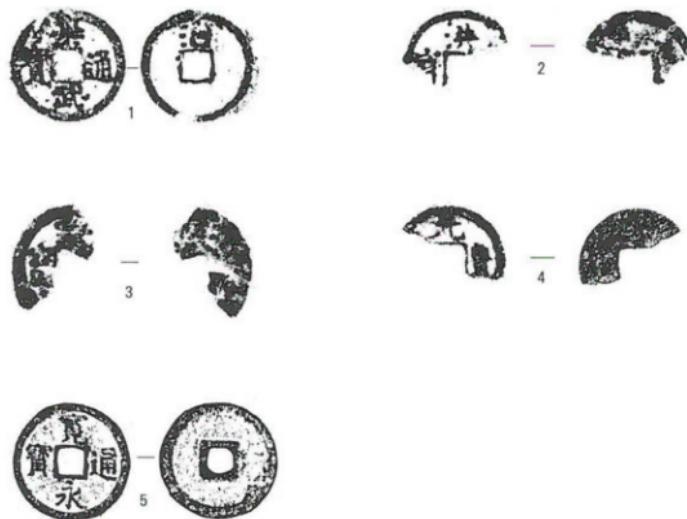
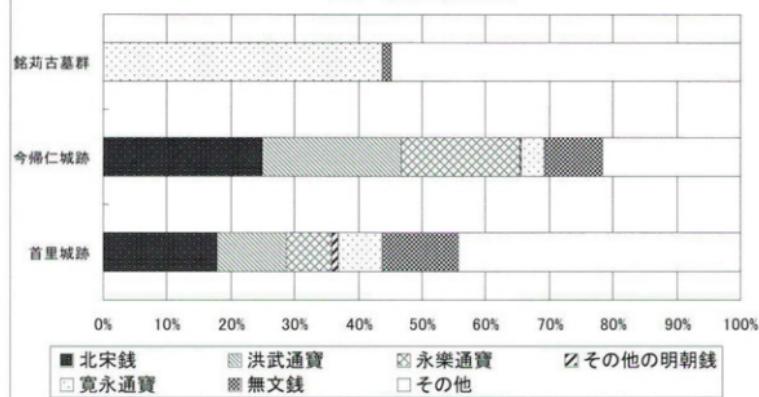


図1 首里城平面図

表2 各遺跡銭種構成



1 加治木銭（円覚寺跡）、2 加治木銭（城郭南側下地区）、3 加治木銭（城郭南側下地区）
4 長崎貿易銭（繼世門周辺地区）、5 長崎貿易銭（管理用道路地区）

図2 銭貨拓影 (S=1/1)

西表島・船浮要塞跡の実態と現状

A Discussion of the Funauki Fort Site on Iriomote Island

伊波 直樹 山本 正昭

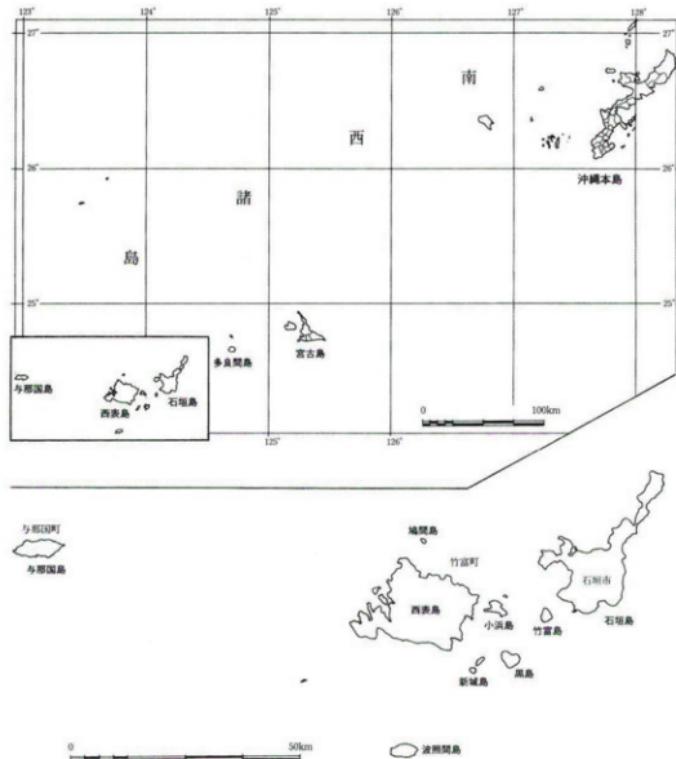
Iha Naoki, Yamamoto Masaaki

ABSTRACT: Remains of a World-War-II fortress still exist around Funauki Bay in the western part of Iriomote Island, Taketomi-cho, Okinawa. The fort was built provisionally in the process of the southern invasion of the Japanese army, and includes batteries, barracks, a hospital, piers, various trenches and facsimile canon. These facilities were built on Fukapanari Island, Uchipanari Island, Sabe Point and Sonai Peninsula, and much of their remains are still visible today. Remaining building foundations, battery foundations, powder magazine and partly-collapsed trenches allow us to imagine and reconstruct the original layout and their functions. This paper also refers to the 'Tetsuta Diary', the primary record that describes the fort, and tries to clarify the real condition of the fort both from actual feature remains and from archival records.

1.はじめに

平成10年から開始した国庫補助事業である沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業は今年の3月で事業が終了する。すでに南部編、中部編、北部編、本島周辺離島及び那覇市編、宮古諸島編と5冊の報告書が刊行されており、八重山諸島編の刊行をもって沖縄県内全域の戦争遺跡を網羅したことになる。これまでに約1000箇所の沖縄県内各地の戦争遺跡を取り上げ、そして重要な遺跡に関しては頁を割いて詳細な報告を行ってきた。しかし、戦争遺跡詳細分布調査の実態としては、この事業7ヵ年では不足の感があり、未だ確認されていない戦争遺跡も数多くあることが想定される。また時間的都合から詳細な分析についても限界があり、より詳細な観察および検証を行うとより興味深い成果が得られると思った戦争遺跡も多くあると言う感触を分布調査を通して得た。今回はその中でも報告書内でその詳細について報告しきれなかった西表島の船浮要塞跡について、より詳細な遺構の実態や調査状況、そして検証を行っていきたい。

船浮要塞跡は西表島の西側、現在の祖納、外離島、内離島、サバ崎といった各所に遺構が残る、広域分布といった特徴を示す戦争遺跡群である。東アジアから見た西表島（第1図）は北の日本列島と南の東南アジアを結ぶキーストーン的な位置を占めており、太平洋戦争時において大東亜共栄圏を目指す大日本帝国にとっても無視できない地域であったと思われる。その証拠に1922年（大正11）という段階から船浮に要塞設計画が立てられていた。この計画はワシントン条約によって頓挫してしまったが1941年（昭和16）6月5日、太平洋戦争が開始されるよりも要塞建設が開始されたことから、当該地における要塞設置が重要視されていたことが窺える。実地調査では多くの遺構が確認され、それらを4区に分けて報告したが、調査の実態や異なる遺構の詳細について触れていく、それらを踏まえて要塞施設の比較・検証を最後に行っていく。なお、遺構の詳細については『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査報告書－八重山諸島編－』所収船浮要塞の項目に新たに付け加えたものであり、報告書中の若干の表現の違いはあるものの、内容についてはそれ以上のものではないことを付記しておきたい。



第1図 西表島の位置図

2. 船浮要塞跡の概要

1941年(昭和16)に臨時要塞として建設された船浮要塞は、天然の良港である船浮港を囲むようにして北から祖納半島、外離島、内離島、サバ崎の4管区に設置された軍事施設である。要塞の中核となる司令部は、第1区内の内離島に設置、司令官は下永憲次(陸軍大佐)であった。その他重砲兵連隊(隊長・山崎豊吉陸軍少佐)本部、高射砲隊、歩兵隊、陸軍病院も同島に配備された。第2区は祖納半島で、重砲兵連隊の第2中隊(隊長・北村空角中尉)が配備。第3区は外離島で同連隊の第1中隊(隊長・小野藤一中尉)が、第4区はサバ崎でサバ崎守備隊がそれぞれ配備された。要塞の主な任務は南方から石油などの資源を運ぶ艦船の待避・停泊などを守備することであった。

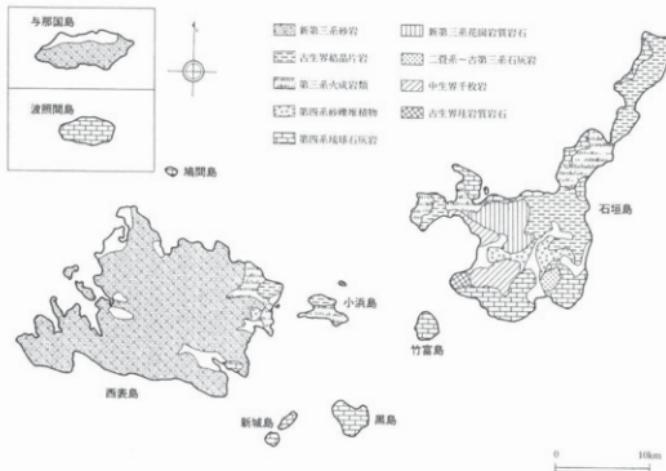
要塞施設は、初期の染營隊による建設作業は約3ヶ月で終了したものの施設は完成しておらず、先述した各部隊が自活をしながら陣地構築を継承し、また地元の住民、児童生徒を動員して約3カ年か

けて構築された。しかし、高射砲といった施設は地上に露出、弾薬庫や兵舎なども上空露出のままであり、航空機が主力となった太平洋戦争においてはもはや時代遅れの施設であった。1944年（昭和19）4月1日には、沖縄全島の守備軍・第32軍の指揮下に入り、同年5月8日船浮要塞司令部は解消、同年9月には船浮要塞重砲兵連隊を改称した重砲兵第8連隊は小野隊を残し主力部隊を石垣島に移駐するなど、要塞としての戦略的地位は次第に失われていくこととなった。

終戦後は要塞内に配備されていた兵隊が復員したことにより、要塞施設は使用されることもなくそのまま放置された。内離島、外離島は戦後約30年間に亘って放牧地として利用され、一部、祖納住民の畠地もつくられていた。現在、外離島の海岸は真珠養殖場として利用されているものの、両島とも島内の自然環境は人の手が加えられておらず、雑木が繁茂した状態である。サバ崎に関しては灯台が建設された以外は特に改変されていないため、自然環境は外離島、内離島と同様である。祖納については周辺に畠地があるが、施設跡は現在竹林が密生している。つまり、先述した地域はいずれも地形改変等が全く行われなかつたため、戦時中使用したこれらの施設跡が現在に至るまで、破壊されることなく良好な形で残存している。

今回の調査で特に外離島、内離島、サバ崎は船でしか到達することができない地域で、且つ自然環境が戦時中と比較しても激変していることから、踏査は困難なものであったが、その中で15ヶ所の遺跡（第3図）が確認できたのは大きな成果であったといえる。しかし、時間的な制約もあり、全てを把握することはできなかつたため、未だ確認できない戦争遺跡が存在する可能性が高いことを補足しておく。

なお以下の報告では戦時中、船浮要塞で区分されていた4管区の名称を踏襲し、第1区（内離島）から第4区（サバ崎）までの順に、各地域で確認した戦争遺跡を詳細に報告することとする。



第2図 八重山諸島の地質図



第3図 船浮要塞配置図



図版1 1946年4月1日、西表島西部米軍撮影航空写真（沖縄県公文書館蔵）

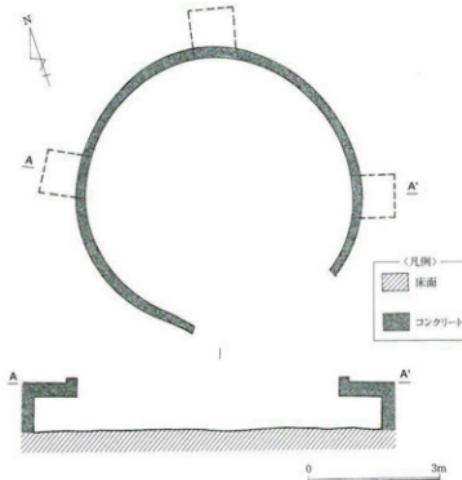
内離島(第1区)

内離島で確認された戦争遺跡は①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、③船浮要塞司令部跡、④慰安所跡の4カ所である。

①内離島砲台跡

島の西部に位置する独立丘の頂部に1基残存する(第4図)。砲台跡はコンクリート製の枠が厚さ20cm、高さ120cmで平面形が「C」字状に立ち上げられている。南側の約3mに亘って枠がない部分はおそらく砲門に相当し、その方向は船浮溝に向かっている。内枠は直径約6mで、内壁には弾薬庫を保管する貯蔵穴が3ヶ所見られる。貯蔵穴は幅1m、高さ80cm、奥行1mで3ヶ所とも同規格である。床面にはコンクリートは貼られておらず、直径約5cm~10cm程度の砂岩をバラス状に敷き詰めている。

記録によると戦時中、内離島には斯加式12cm速射カノン砲を2門装備していたとのことだが、今回の調査では当該の1基しか確認できなかった。また、調査に同行していただいた城間良昭氏によると、約20年前は砲台跡がある独立丘一帯は雑木が繁茂した現在とは景観が異なり、スキに覆われており、砲台跡まで容易に登坂できたとのことである。



第4図 内離島砲台跡

②陸軍病院跡

島の北側には丘陵地形の小半島があり、その突端部付近に陸軍病院が建っていた。周辺地形は西側を除き急崖もしくは急斜面であるが、病院跡一帯はある程度面積を有した平場が確認できる(図版2-2)。平場には建物の基礎枠と思われるブロック片が散乱し、残存する基礎枠も一部しか見られない

ため当時の建物の規模などを把握することはできなかった。ブロックの材質は砂岩を芯にして周間にサンゴ石を含んだコンクリートで形成されている。

陸軍病院は1941年（昭和16）10月5日、大阪陸軍病院において編成され、同月13日内離島に上陸した。病院は配備されると要塞指令部の指揮下に入り、内離島を拠点に連帯医務室を粗納に置き、隊付軍医は各隊を巡回した。陸軍病院は重砲兵第8連隊と同様に1944年（昭和19）9月、独立混成第45旅團の命令により、一部を西表に残し、主力は石垣島に移動。石垣島では石垣国民学校（現・石垣小学校）に病院を開設し、診療活動に入ったが、後に空襲が激しくなると、於茂登岳の山中に移り診療を行ったという。

③船浮要塞司令部跡

島の北側に位置する旧成屋村地域には戦時中、船浮要塞司令部が配備されていた。今回の調査で旧成屋村地域を踏査したところ、建物跡の痕跡は確認できなかったが、南側にある独立丘（通称・成屋山）の頂上付近には擬砲跡が3ヶ所確認できた。擬砲跡はいずれも地面を掘り込み、3ヶ所のうち1ヶ所は円形、残り2ヶ所はドーナツ状となっている（図版2-3）。擬砲跡の規模は直径約3m～3.5m、深さ約0.8m～1.2mである。そして擬砲の円から南側に掘り込みが一直線状に伸びているのが3ヶ所に共通している特徴である。

④慰安所跡

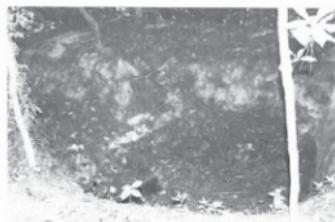
旧成屋村地域には戦時中、要塞司令部の他に慰安所も設置されていた。慰安所跡は先述した擬砲跡がある独立丘から北西側の海岸に近い平地に見られる。雑木等が繁茂した慰安所跡は建物の基礎枠は残存せず、コンクリートとレンガ片が散乱しているが、五右衛門風呂と思われるレンガ製の造構が現在でも残る（図版2-4）。慰安所跡の周辺には戦時中にコンクリートに構築し直したと思われる井戸跡も見ることができる。



1



2



3



4

図版2 内離島（第1区）の戦争遺跡群

1. 高射砲跡コンクリート枠 2. 陸軍病院跡 3. 司令部周辺の擬砲跡 4. 慰安所跡

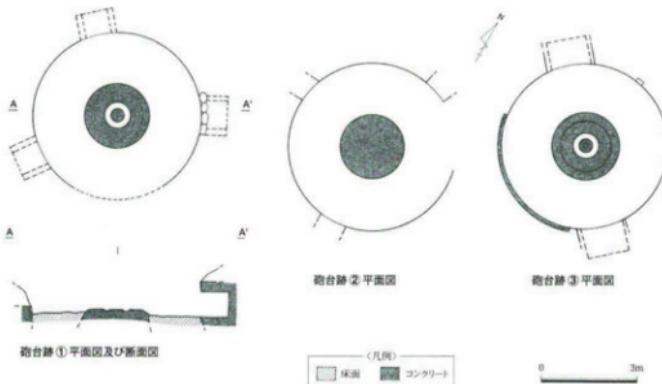
祖納半島（第2区）

祖納半島の西端部に位置する丘陵には祖納砲台跡が4基確認されている。上村と呼ばれる同地域は戦前、畑作地として利用されていたが、要塞建設に際して旧陸軍省は私有地を強制的に接収。建設用地には監視兵を配備し、住民の立ち入りを禁止した。

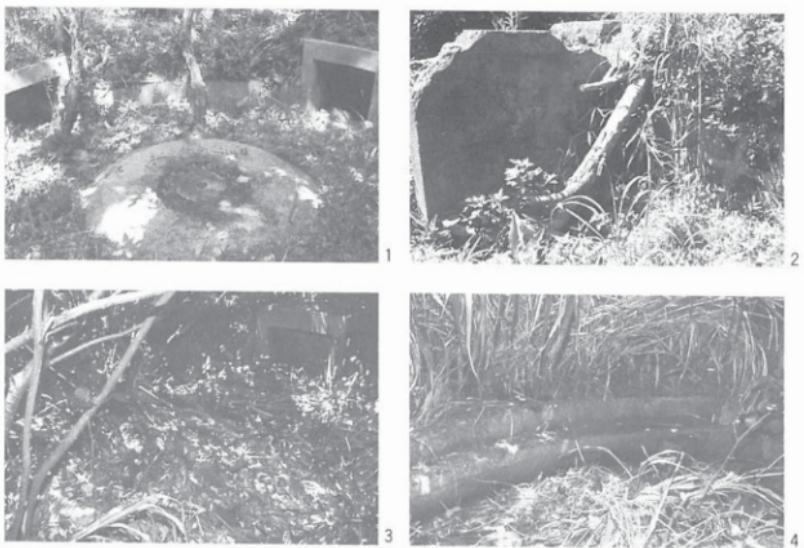
⑤祖納砲台跡

祖納砲台跡は現在、周辺の畑作地から外れた竹及びアダン等が密生した原野になっている。4基の砲台跡が南北に並び、いずれもコンクリートで円形の外枠を造り、その直径が5.2mと共に通している。砲台跡①は弾薬庫を保管する貯蔵穴を3ヶ所所有している（図版3-1）。貯蔵穴は幅、高さは80cm、奥行は90cmで、3ヶ所とも同規格である。枠の内部には円形で直径2mのコンクリート製の砲座跡が見られる。砲座の中心には重砲を設置できるように直径15cmの穴が開けられている。また、外枠の上に土留のために砂岩の石積みを構築している。砲台跡②は①と同様、貯蔵穴を3ヶ所所有し、内部の砲座も土砂が堆積しているものの、構造は①と同様である（図版3-3）。①と異なる点は外枠の下に排水溝が見られる事である。砲台跡③、④は貯蔵穴が2ヶ所で、対角線上に位置している（図版3-4）。貯蔵穴の規模は幅120cm、高さ85cm、奥行95cmで全て共通している。内部の砲座は規格、構造共に①と同様であるが、③の砲座はコンクリートの下に砂岩を円形に加工して、①よりも砲座の部分が盛り上がっている。また、②と同様に外枠の下に排水溝が走っている。④に関してはアダンの密生が特に著しく、内部には土砂が堆積して貯蔵穴が半分ほど埋没している部分も見られる。

戦時中、祖納には重砲兵連隊の第2中隊（隊長・北村空角中尉）が配備され、38式野砲4門が設置されていた。当該の4ヶ所の砲台跡はそれに相当する。1942年（昭和17）10月、重砲兵連隊は第2区（祖納半島）と第4区（サバ崎）の全部隊を外離島に集結させたため、以降、祖納に設置された砲台は使用されたのかは不明である。砲台①のすぐ東側には、砂岩をブロック状に加工し、コンクリートを繋いで積み上げた建物跡（図版3-2、用途不明）や、側壁を砂岩ブロックで構築した塹壕と思われる掘り込みを見ることができる。



第5図 祖納砲台跡



図版3 祖納半島（第2区）の戦争遺跡群

1. 高射砲跡①全景 2. 高射砲跡①近くの建物跡 3. 高射砲跡②全景 4. 高射砲跡③コンクリート基礎

外離島（第3区）

7ヶ所の戦争遺跡を確認できた。特に島の南部に位置するV字谷地形一帯には①小野隊兵舎跡をはじめ、5ヶ所の戦争遺跡が点在している（図版4－1、2）。管区内で最も外洋に近い外離島は4管区の戦争遺跡でより実戦向きの陣地を構築していること、先述した重砲兵連隊の全部隊を外離島に集結させたことなどから、要塞地域の最前線として戦略的に重要視していたことを窺うことができる。

⑥軍避難壕

島の北東部に位置する独立丘（通称・ボウシ山）の中腹に戦時中、旧日本軍の避難壕として利用された自然壕が現在も残る。壕は砂岩が侵食されてできた大規模なガマで、南西に開口する。幅は約25m、高さは約3m弱、奥行約3mをそれぞれ測る。ガマの内部は砂が堆積しており、加工痕は特に見られなかった。ガマの入口前には軍が構築したと思われる土留の石積みが見られる。

⑦外離島砲台跡

島北部の山間部に位置し、2基確認されている。砲台跡の北側は海岸からすぐ2段階に発達した急崖地形が続いている。砲台跡①は祖納砲台跡と同様コンクリートで円形の外枠を作り、外枠の直径は5.2mと共に通している。異なる点は2ヶ所の貯蔵穴が外枠から外れた位置に造られていることである。貯蔵穴は対角線上に位置し、幅80cm、高さ75cm、奥行85cmで2ヶ所とも同規格である。内部の砲座は直径2.8mと祖納砲台跡よりも規模が大きく、砲座の外枠がはっきり確認できる。砲台跡①から南

西約50mの位置に砲台跡②が残存する。砲台跡の外枠は規格、構造とも①と同様であるが、外側に設置されている2ヶ所の貯蔵穴の周囲にも砂岩ブロックにコンクリートを流した石積みを施し、平面形で「C」字状に構築している。貯蔵穴の規格は砲台跡①と同様であるが、対角線上に配していない。また、貯蔵穴を囲う石積みから北向きに塹壕が走っている。

戦時中、外離島には斯加式12cm速射カノン砲を2門設置しており、当該の砲台跡はそれに相当する。砲台跡①の北東側約30mの位置には、砂岩ブロックをコンクリートで繋いだ石積みで通路を構築している。西向きに開口する入口を造り、内部の通路は平面形で逆「L」字状となっている。石積みの高さは1m～1.2mで推移している。しかし、この構造物の用途については今回の調査で明らかにすることはできなかった（図版4-3）。

⑧擬砲跡、塹壕、避難壕

島の西部は海岸、内陸から2段階に発達した急崖地形となっており、その急崖の頂部は標高約100m～140mの緩やかな山岳地形となっている。その山岳一帯から先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面にかけて擬砲跡が4ヶ所、塹壕・タコ壺が1ヶ所ずつ、避難壕が2ヶ所確認できた。

擬砲跡は当該地の中で北側に位置し、南北方向に4ヶ所並列している。内離島にある擬砲跡と同様、地面を掘り込み、内部は円形とドーナツ状に分かれる。直径は約3.2m～3.8m、深さは約50cm～60cm程度である。そして、擬砲の円から一直線状の掘り込みが伸びているのも内離島の擬砲跡と同様である。擬砲跡の南側にも塹壕とタコ壺が1ヶ所ずつ残存している。

山岳地域の南端部には人工壕①が残存する。人工壕①は南北方向に連なる尾根部の南端に位置し、3ヶ所の開口部から平面形で「T」字状に掘り込まれている（図版4-8）。開口部は土砂が堆積し、内部も天井が崩落している箇所も見られる。東西に貫通する通路が幅約1.2m、長さが約10m弱である。「T」字の交差する部分の天井には垂直に貫通する円形の豎穴が見られる。当該壕は西から東方向まで一望に見渡せる箇所に設置していることから、監視を目的とした陣地壕の可能性も考えられる。人工壕②は当該地域の東側斜面に残存する。壕は開口部前から地面を掘り込んだ塹壕を有している。塹壕は西向きから途中北西方向に折れながら約10mに亘って続き、開口部に至る。壕は砂岩に一直線状に掘り込まれ、南東方向に開口する。入口部分がやや埋没するが、残存状況は概ね良好である。幅約1.6m、高さ約1.3m、奥行は約6.5mをそれぞれ測る。内部の側壁には部材痕がはっきりと見ることができる。人口壕②の周辺、つまり先述したV字谷地形の東側（内陸側）斜面には土留の石積みが2ヶ所、または傾斜がきつい斜面を往来しやすくするための道路跡も確認されている。

⑨・⑩兵舎跡、⑪小野隊兵舎跡

島の南部、3ヶ所の地域に戦時中、兵舎として使用された建物基礎が現在も残る。⑨の兵舎跡はV字谷の西側（内陸側）斜面の中腹に2棟確認できた（図版4-4）。2棟の兵舎跡は南北に約30mの距離に位置し、斜面が連続している当該地にわずかに残る平場をある程度造成して設置したと想定される。兵舎跡は2ヶ所ともに長方形で出入口と思われる階段跡を見ることができる。

⑩の兵舎跡は島の南端部、急崖地形の上部に1棟確認できる（図版4-5）。現在は雑木に覆われているが、兵舎跡の南側は急崖が迫っており、先述した人工壕①と同様に西方向から東方向まで一望に見渡せる位置に設置されている。兵舎跡は東西に長い長方形で、南北に約6m、東西に約12m、基礎枠の幅は約30cmである。兵舎には約1.4m四方の幅で入口跡も北側に付設されている。なお⑨、⑩の兵舎跡は今回の調査で初めて確認された戦争遺跡であるが、1942年（昭和17）10月に重砲兵連隊の

全部隊を外離島に集結させていることから、外離島に駐屯した小野隊が構築した兵舎かは不明である。

⑪の小野隊兵舎跡は戦時中、重砲連隊の第1中隊（隊長・小野藤一）の兵舎として利用した建物跡である。小野隊兵舎跡は島の南部に位置するV字谷の平野部、海岸付近に2棟残存し、建物跡や隣接するトイレ跡の規模などから下士官と上官クラスとの兵舎に分類される。

下士官で使用された兵舎は北西—南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約30m、短辺部が約6.4mである。建物の内部は長辺部、短辺部の中心に通路を十字につくり、面積が同等の4ヶ所の部屋を有している。通路の幅は長辺部が約1.6m、短辺部が約2mで、建物の基礎枠の幅は30cmで統一されている。兵舎の周辺にはトイレ跡（図版4-6）や井戸跡（図版4-7）も付設している。トイレ跡は兵舎跡の北東側約10mに位置し、兵舎跡の方向と並列している。トイレは通路を中心に左右対称に便器を6ヶ所ずつ設置しているが、アダンの密生が著しく計測等を行うことができなかった。井戸跡はトイレ跡の南東に位置する。コンクリートで構築された直径約1mの井戸と井戸を囲う方形の基礎枠が残り、基礎枠の四隅には柱跡も見られる。また、トイレ跡の東側には砂岩を利用した土留の石積みが一部残存している。

下士官の兵舎跡から南東約50mの位置に上官クラスの兵舎跡が残存する。兵舎跡は北西—南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約13m、短辺部が約6.5mである。建物の内部は面積の異なる4ヶ所の部屋を有している。兵舎跡の北西側にはトイレ跡も隣接している。トイレ跡はL字形で便器を1ヶ所設置し、排泄物を溜め込む枠も付設している。内部にはビール瓶などの遺物が散乱している。

小野隊兵舎跡が設置された当該地は、外離島にわずかに残る平坦地を利用していている。周辺地形は船浮湾を望める海岸とV字谷地形の急崖地に囲まれていることから、外敵に発見されにくい当該地は駐屯地として外離島で最も適した場所である。戦時中は当該地を拠点に訓練、陣地構築などの軍事活動を島の各地で行っていた。

⑫防空壕

島の南部に位置するV字谷の西側（内陸側）斜面に戦時中、防空壕として利用された人工の壕が残存する。壕は砂岩が露頭した箇所に掘られ、南向きに開口する。入口前は砂岩のガマ状になっているが、自然に侵食されたかあるいは人工的に構築したかは不明である。また、入口前には戦時中使用されたと思われる鉄鍋やヤカンが放置されている。入口はコンクリートで側壁、天井を階段状に枠を構築し、幅、高さともに約2mを測る。内部は入口付近の床面（コンクリート製）が一部崩落し、崩落した下部から垂直に埋め込まれた木材片が露出している。壕内部は時間的な制限もあり、実測等の調査が行うことができず、位置の確認のみに留まった。内部は目測ではあるが広く、途中で北西方向にカーブしているのが見て取れる。

当該の防空壕も今回の調査で初めて確認された戦争遺跡である。『竹富町史 第十二卷 戦争体験記録』によると戦時中、西表島の干立・祖納・白浜・船浮・網取・崎山集落（現在、網取・崎山は廃村）の住民は旧日本軍の奉仕作業として外離島に渡り、壕掘り作業などを行ったという証言が複数記載されており、当該の防空壕が証言に相当する壕の可能性も考えられる。当該の防空壕は今後、壕内部の実測や証言者への聞き取りなど、詳細な調査が求められる重要な戦争遺跡といえる。



1



2



3



4



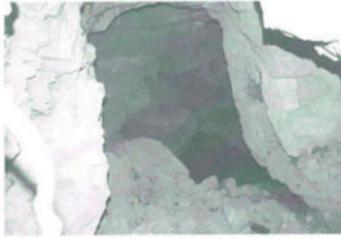
5



6



7



8

図版4 外離島の戦争遺跡群

1. 外離島南部遠景（南東から）
2. 小野隊兵舎跡遠景（南から）
3. 高射砲跡近くの建物跡
4. 兵舎跡⑨
5. 兵舎跡⑩
6. 小野隊兵舎跡（トイレ跡）
7. 小野隊兵舎跡（井戸跡）
8. 避難壕内部（人工壕①）

サバ崎（第4区）

サバ崎一帯は現在、灯台のみが設置されており、殆ど人の出入りはない状況である。確認された戦争遺跡は⑬擬砲跡、⑭桟橋跡、⑮兵舎跡の3ヶ所である。記録によると戦時中、サバ崎には38式野砲が2門設置されたとのことだが、他の3管区の施設と比較しても戦略的な重要度が低い印象は否めない。しかし、桟橋跡などサバ崎以外で見ることができない戦争遺跡も残存し、他の3管区の戦争遺跡とは異なる特徴を備えている。

⑬擬砲跡

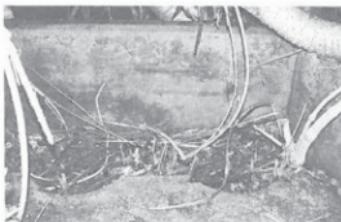
現在のサバ崎灯台の後背部（南部）に立地する丘陵の中腹に擬砲跡が2ヶ所確認できた。擬砲跡一帯はスキに覆われており、判別は困難であった。2ヶ所の擬砲跡は円形とドーナツ状にそれぞれ掘り込まれ、円形の擬砲跡が標高の高い位置に設置されている。擬砲跡の規模は直径約3m～3.4m、深さ約50cmを測る。擬砲の円から一直線状の掘り込みの方向は内離島、外離島の擬砲跡と同様共通している。

⑭桟橋跡

先述した擬砲跡が設置されている丘陵の南側は若干であるが平地が見られる。その東側の海岸に戦時中、桟橋として利用された基礎部分の石積みが残存する（図版5-1）。桟橋跡は干潮時にのみ確認することができる。幅は約3mで北西方向に伸びており、石積みは砂岩の切石を使用している。桟橋跡の付け根部分には海岸に埋め込まれた突起物が2ヶ所見られ、突起物は金属製と木製に分かれる。戦時中、要塞地域の各管区を往来する手段は、船舶以外の方法ではなく、各管区の海岸には船舶を停泊するための桟橋を築いていた。しかし、今回の調査ではサバ崎以外に桟橋跡は確認することはできず、その意味では貴重な戦争遺跡といえる。



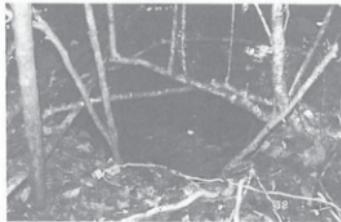
1



2



3



4

図版5 サバ崎（第4区）の戦争遺跡群

1. 桟橋跡全景 2. 兵舎跡（トイレ跡）

3. 兵舎跡周辺（土留め石積み） 4. 井戸跡

⑮兵舎跡

桟橋跡から南東に位置する平地には戦時中、サバ崎守備隊が使用していた兵舎跡が現在も残る。サバ崎の兵舎跡は基礎枠の列の一部が残存している箇所が点在し、コンクリートが散乱している状況も見られる。兵舎跡一帯はアダンの密生が特に著しく、建物全体の形状、あるいは何棟設置されていたのか正確に把握することはできなかった。しかし、兵舎跡に隣接するトイレ跡はほぼ完形で残存している（図版5-2）。トイレ跡は一辺3.8mの正方形で東側に出入口の床面が見られる。内部は中心を通路が東西方向に走り、北側は大便所4ヶ所、南側は大便所2ヶ所と小便所3ヶ所が設置されている。その他兵舎跡の周辺には砂岩を粗く加工した土留の石積み（図版5-3）や、井戸跡と思われる方形のコンクリート枠、そして円形のコンクリート枠（図版5-4）も見ることができ、位置関係まで把握することができた。

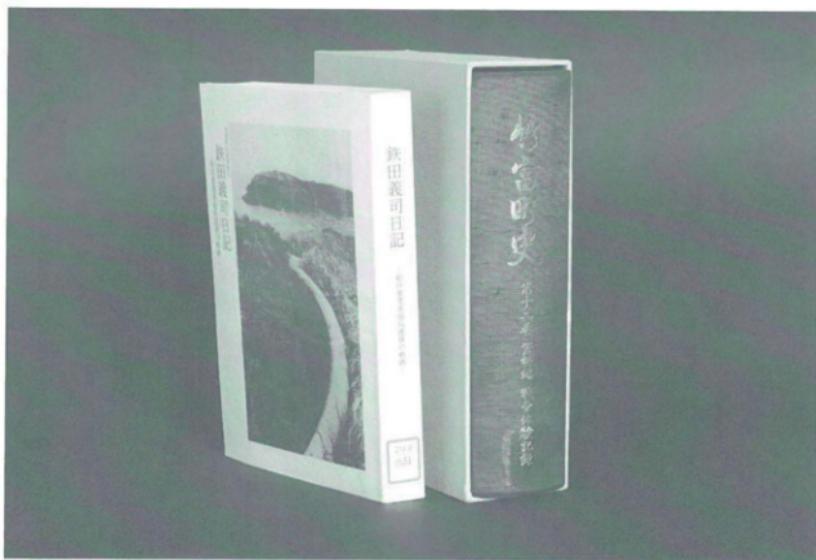
3. 船浮要塞の考察方法

（1） 文献資料から見る船浮要塞

今回の分布調査で得られた成果を検証・考察する方法としてはやはり、文献資料からのアプローチは欠かせないものである。そこで、船浮要塞を考察していく上で使用する文献資料として下記の2冊（図版6）を掲げる。

竹富町史編集室『竹富町史 第十二巻 資料編 戰争体験記録』竹富町役場 1996

竹富町史編集室『竹富町史資料集① 鉄田義司日記－船浮要塞重砲兵連隊の軌跡－』竹富町役場2000



図版6 竹富町史編集室刊行の沖縄戦関連資料

上記した2冊の文献資料は戦時中の船浮要塞に駐屯した軍人と、要塞の陣地構築等に関わった戦時以下の住民から見た視点を収集・記録した地域の貴重な資料である。特に『竹富町史資料集① 鉄田義司日記－船浮要塞重砲兵連隊の軌跡－』（以下、「鉄田日記」）は船浮要塞重砲兵連隊の陸軍少尉として配属された鉄田義司氏（図版7）が1941年（昭和16）から1945年（昭和20）までにわたり、軍事を中心とした日常的な生活や連隊の動向等を記しており、船浮要塞の状況、戦略が変化していく過程を把握できる内容となっている。一軍人の視点から見た船浮要塞に関する同時代資料といえる。今回、分布調査の成果を『鉄田日記』の記述を中心に考察していくが、その前に簡単ではあるが『鉄田日記』が公開に至るまでの経緯を紹介する。

戦後40余年、鉄田氏自身が保管していた『鉄田日記』は1986年（昭和61）当時、竹富町立白浜小学校教諭として赴任していた城間良昭氏が「西表島の戦争」を調査研究する中で、『鉄田日記』の所在を突き止め、鉄田氏から借り受け入手した。城間氏はその後、「地域と文化」第40・41号合併号で「船浮に関する手記」の中で『鉄田日記』の一部概要を発表している。

鉄田氏から日記の発刊を約束され、城間氏が7年余り保管していたが、竹富町史編集室が『鉄田日記』を城間氏が保管しているとの情報を聞き、城間氏と相談し『鉄田日記』や当時の写真等を譲り受けた。そして町史編集委員会では発刊に向けての審議が重ねられ、「竹富町史資料集」の第1弾刊行物として2000年（平成12）に発行した。

鉄田氏が船浮要塞に来駐した1941年（昭和16）10月から船浮要塞重砲兵連隊を改称した重砲兵第8連隊の1中隊長として石垣島に移駐する1944年（昭和19）9月までの約3年間の記述とともに、今回の分布調査で確認した各遺構がどう照合し、さらに船浮要塞の戦略が3年間で変化していく中での各遺構の位置付けを考察ていきたいと思う。

（2）要塞建設初期に構築したと思われる遺構

船浮要塞は1941年（昭和16）8月中旬から10月末まで築營隊による陣地構築作業が行われ、その後、要塞司令部、重砲兵連隊、陸軍病院など要塞としての体制をなす施設が各管区に配備されていく。各部隊の陣地構築はその後も継続されていくが、要塞建設初期の段階で構築したと思われる遺構は内離島が①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、祖納半島は⑤祖納砲台跡、外離島が⑦外離島砲台跡、⑪小野隊兵舎跡、サバ崎が⑬棧橋跡、⑮サバ崎兵舎跡の7カ所である。遺構の種別で見ると砲台が3カ所、兵舎を含む建物が3カ所、棧橋が1カ所に分類できる。3カ所の砲台は内離島が1カ所しか確認できなかったのを除き『鉄田日記』の記述通り配置している。建物においては陸軍病院跡は要塞の体制をなす上で欠かせない施設であり、外離島の⑪小野隊兵舎跡、サバ崎の⑮サバ崎兵舎跡は管区内の陣地構



図版7 鉄田義司氏（『鉄田日記』より引用）

築・軍事教練を活動していく拠点となる施設であるため、いずれも要塞建設の初期段階で構築されていると思われる。また、サバ崎の⑩桟橋跡も各管区を移動する船舶の停留地となるため、やはり初期段階で構築されている可能性が高い。

『鉄田日記』から読み取れる船浮要塞の転換点として「1942年（昭和17）8月に重砲兵連隊長が交代（入野大二郎中佐）する。入野連隊長は要塞の施設内を巡視した後、連隊編成の変更を内命した。主な大要是中隊の定員を従来の235人から105人とする。祖納、サバ崎の砲台を撤収し、外離島に集結する。歩兵隊は全て熊本師団に配備する。これらの大要をもとに重砲兵連隊の新編成作業が10月7日～10月11日まで行われ、戦備体制を変更するとともに召集解除者を多数出すこととなった。これらの戦備体制の変更を受けて、外離島には北端に野砲4門陣地と兵舎、南端に野砲2門陣地と兵舎が構築され、探照灯（註1）陣地も外離島に移動した。」とある。

これらの戦備体制の変更により、要塞地域の北端である祖納半島と南端のサバ崎は陣地の防備能力を実質的に無力化し、外離島を防備の中心として要塞全体の防備区域を縮小していることが分かる。



1



2



3



4

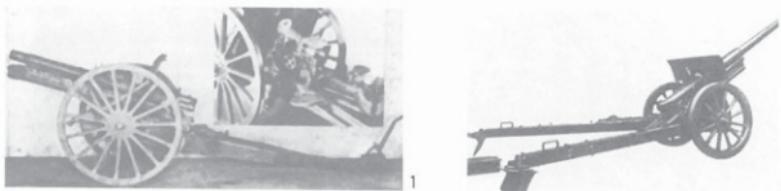
図版8 『鉄田日記』（1～3）と米軍撮影航空写真（4）から見た船浮要塞の戦時中、戦争直後の状況
1. 外離島の兵舎か 2. 下永部隊サバ崎兵舎前（昭和16年撮影） 3. 設置された野戦重砲（場所不明）
4. 図版1からの拡大写真 内離島陸軍病院（中央部左下）

* 1・2・3の写真キャプション名は『鉄田日記』内掲載の写真キャプション名と同記

(3) 遺構から見える外離島の防備体制

船浮要塞の防備の中心となった外離島であるが、遺構の種類を見ると、島内の地形に則して陣地の役割をある程度明確にしていることが分かる。

今回の分布調査では外離島に移設したとされる野砲陣地に相当する遺構を確認することができなかった。それは使用された38式野砲（図版9-1）がもともと車輪を付設して移動できるものであり、⑦の外離島砲台跡のようにコンクリートの構築物を造らなくても、地面に固定して使用することができるためである。その場合、野砲を設置して使用した痕跡を現時点で確認することは非常に困難である。しかし、島の南端に野砲2門陣地とともに構築したとされる兵舎は⑩の兵舎跡の可能性が考えられる。⑩の兵舎跡は島の南東側即ちV字地形尾根部分の突端付近に立地しているため、兵舎周辺の地域は野砲陣地を設置し、機能するための地理的条件を満たしているといえる。



図版9 船浮要塞で使用された兵器と同型器（『日本陸軍便覧』より引用）

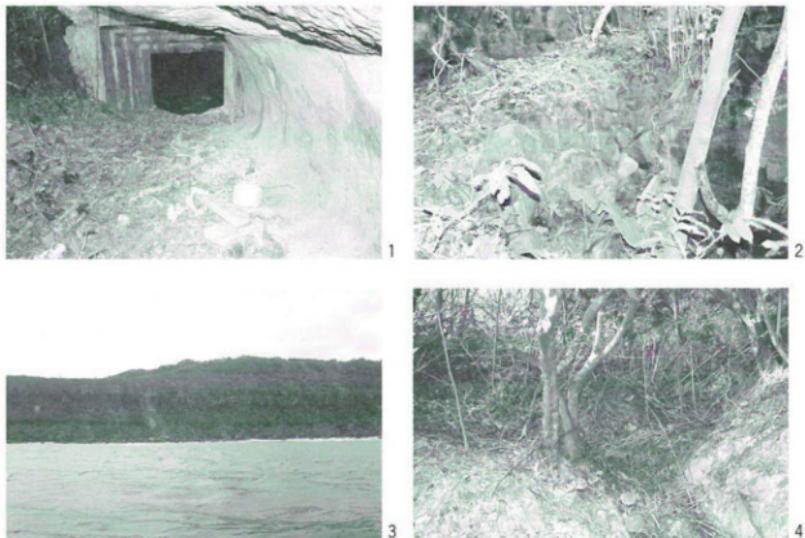
1. 38式野砲（1905年製） 2. 10cmカノン砲（1925年製）

次に急崖地形がほぼ南北方向にかけて続く地域に立地している⑨の兵舎跡と⑫の防空壕（図版10-1）は、立地状況と他の施設との位置関係から見ると、外離島の軍事拠点となる⑪小野隊兵舎跡と、大砲陣地である⑦外離島砲台跡や⑩の兵舎跡等を繋ぐ中継地的な役割を持っていると考えられる。⑫の防空壕は現時点では『竹富町史 第十二卷 資料編 戦争体験記録』（以下、「戦争体験記録」）からの記述に相当する壕であるという確定はできないが、証言からは壕の使用状況として、有事の際の避難地的な役割だけではなく、弾薬の保管庫としても利用されており、多面的な役割を持っていることが分かる。

島の北側から西側にかけては標高約100m以上の急崖地形（図版10-3）が続き、その上部に⑦外離島砲台跡、⑧擬砲跡（図版10-4）、塹壕、避難壕が配置されている。外洋を監視・守備できる場所に立地していることから、船浮要塞の最前線としての役割を担っていることが分かる。しかし、その最前線に擬砲が構築されている理由として、『鉄田日記』の記述からある程度読み取ることができる。「1944年（昭和19）3月に要塞司令官が下永憲次大佐に替わって丸山八東大佐が1日付で就任した。翌日には丸山新司令官は要塞内を初巡視し、弾薬庫、砲台、探照灯陣地の実態を確認。そして、自活農耕の奨励、漁撈の促進、砲台陣地及び探照灯陣地の偽装、偽陣地の設置を奨励。」とある。擬砲の設置を認知したのは1944年（昭和19）という太平洋戦争末期の状況を考えると、戦闘における航空機の役割は船浮要塞においても重要視しており、対空試射の訓練等もすでに実施している。しかし、船浮要塞における擬砲設置の意図は威嚇を主としたものではなく、実際に兵器を装備している大砲陣地が航空機から攻撃を受けないように秘匿することが主な目的ではないかと考えられる。そのことを示す事例として、『戦争体験記録』による複数の記述からある程度読み取ることができる。

1945年（昭和20）頃から西表島西部にも空襲が始まるようになるが、祖納・白浜集落を中心に空襲

が行われているにも関わらず、船浮要塞を守備している部隊は空襲に対しどんどん応戦をしていない。それは前年に重砲兵第8連隊の主力が石垣島に移駐し、引き続き船浮に駐屯していた第1中隊（小野隊）が空襲の際に自陣の発射元を察知されるのを恐れ、隊長命令で応戦することを禁じている。さらに、前年に重砲兵第8連隊の主力が石垣島に移駐する際には、移駐する人員に伴って船浮要塞に装備していた兵器も同時に移設している可能性が高く、船浮要塞は空襲に対応できる状況になかったと想定される。



図版10 外離島の戦争遺跡群

1. ②防空壕入口
2. 軍用道路跡の石積み（⑧避難壕近辺）
3. 島西部急崖地形（擬砲跡設置）
4. 擬砲跡

（4） 船浮要塞と住民の関わりを示す戦争遺跡

船浮要塞は1942年（昭和17）頃から、各管区における陣地構築作業を西表島の西部に位置する干立・祖納・白浜・船浮・網取・崎山集落（現在、網取・崎山は廃村）の住民に奉仕作業として動員していた。（竹富町史編集室1996・2000）また、地元住民だけではなく、炭鉱会社の坑夫も徴用しており、作業の内容は壕の掘削、道路の開削などが主であった。

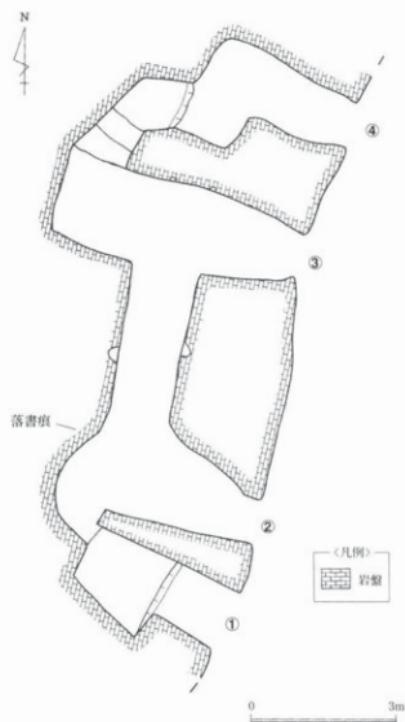
今回の分布調査では人工の住民避難壕が網取・崎山以外の4集落で5カ所確認されている。その内訳は下記の通りである。

- （干立）①—干立集落入口の壕、（祖納）②—金田家の壕、③—松山家の壕、
 （白浜）④—白浜の避難壕、（船浮）⑤—船浮の避難壕

上記した5カ所の住民避難壕は全て加工の施しやすい砂岩に掘り込まれており、内部の構造等は異なるものの、壕を構築する際に使用した工具の掘削痕や、壁・天井を補強するために木材等を嵌め込んだと思われる部材痕等が見られ、いずれも丁寧に成形されているのが窺える。また、壕の規模から

集落単位、あるいは集落の班単位で住民を収容できるように、ある程度組織立って壕を構築しているものと想定され、白浜の避難壕（図版11-3）においては住民と炭坑の坑夫が共同で構築したという状況が『戦争体験記録』の記述からも読み取れる。

各集落の住民が戦時に備え、自力で壕を構築している状況を見ると、先述した船浮要塞での奉仕作業等の影響が垣間見える。西表島に点在する集落の中で、先述した集落以外（古見・大原等）は人工の避難壕が確認されていないことから、今回報告した人工の住民避難壕は船浮要塞と地元住民との関わりを示す上で重要な戦争遺跡といえる。



第6図 祖納集落 金田家の壕平面図



図版11 西表島西部の集落に残存する住民避難壕

1. 祖納集落 松山家の壕入口 2. 祖納集落
金田家の壕内部 3. 白浜の避難壕①入口

4. まとめ

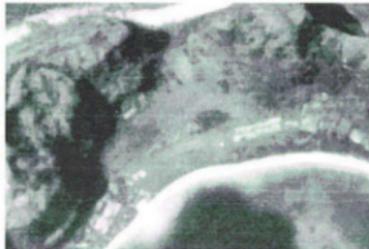
今回、船浮要塞跡についての考察方法で得られた成果をいくつか掲げる。まず、分布調査で確認した船浮要塞の戦争遺跡を文献資料の記述から考察することによって、改めて文献資料の重要性を痛感させられた。船浮要塞の場合、「鉄田日記」という軍人の視点から見た同時代資料を中心に、船浮要塞が建設から終戦までの約4年間で状況、戦略が変化していく過程を踏まえながら、各遺構の位置付けをある程度読み取ることができたのは大きな成果であった。その結果、遺跡、文献資料両方の共通認識として言える事は船浮要塞の戦時における厳しい状況である。それは各遺構の分布状況、種類、性格においても文献の記述の内容からも如実に表れている。

また本来、軍事作戦上、機密性を保持しなければならない要塞施設に地元の住民を陣地構築作業に動員したという事実からも、住民の手を加えてまで軍事活動をせざるを得なかった船浮要塞の状況の厳しさを表している。その地元住民が船浮要塞の陣地構築に関わった影響が、戦時に備え、自力で構築した住民の避難壕の規模・構築状況から見て取れた事も、戦時における船浮要塞の一つの側面を示す上では大きな成果であったといえる。

そして、戦時に船浮要塞の陣地構築作業に関わった住民の体験が戦後、「戦争体験記録」という文献資料にまとめられ、「鉄田日記」とともに、今回、船浮要塞についての考察を行う上で重要な役割を果たしたことは、調査において地域の資料を十分に活用することができたという意味で非常に意義深い。戦争遺跡の現地調査、研究・考察をする上では、地域の文献資料あるいは地域の研究者、有識者、戦争体験者等からどれだけ情報を得て、御指導・御協力して頂くかによって、その成果というものは大きく変わってくる。船浮要塞についての考察の場合、「鉄田日記」・「戦争体験記録」という地域の優れた文献資料と地域の研究者・有識者等からの手厚い御指導・御協力のおかげで、その考察内容・成果が反映されたと言っても過言ではない。

船浮要塞に関する戦争遺跡から見た今後の課題としてはまず、未だ確認されていない戦争遺跡の確認を地道に続けていく必要性が掲げられる。今回の分布調査では、船浮要塞司令部跡や外離島北側に構築したとされる兵舎跡など、「鉄田日記」等で記載されていた施設を確認することができなかつた。また、拡大した米軍の航空写真からも未確認の施設跡（図版12上・下）をいくつか見ることができる。さらに今回で確認した戦争遺跡をより詳細な調査を行うことも、船浮要塞の実態を明確にしていく上で当然ながら必要な作業となる。

それから、今回の船浮要塞についての考察方法では、確認した戦争遺跡を地域の文献資料から主に考



図版12 未確認の戦争遺跡（図版1からの拡大写真）

上：外離島北部 兵舎跡か（写真中央右と左下）
下：内離島 船浮要塞司令部周辺（中央部に見える線が桟橋か）

察していく事に重きを置いたため、船浮要塞と同時期に構築された臨時要塞施設（沖縄本島中城湾要塞等）との比較や、大正期に本格的に整備された要塞施設〔奄美大島瀬戸内町に建設された奄美大島要塞（図版13）、小笠原諸島父島に建設された父島要塞等〕との比較など、船浮要塞が旧日本軍、あるいは太平洋戦争においてどのような位置付けであったのかを大局的に考察する視点が欠けていた事は、筆者の反省材料と同時に今後の課題としたい。

最後に、今回の船浮要塞についての考察では、戦争遺跡から見た船浮要塞の一つの実態を導き出すことができたと思っている。それと同様に、筆者が文献資料を用いて戦争遺跡という考古学的視点を中心に考察したように、他の分野、あるいは研究者から見る視点で船浮要塞を調査・研究することによって、新たな実態、成果を導き出してくれるのではないかという期待も込めたい。そういう意味で、船浮要塞は今後も注目すべきテーマであることを提示し、本報告を締めたい。



図版13 本格的な要塞施設跡（奄美大島要塞）
加計呂麻島 安脚場砲台（弾薬庫）



図版14 「鉄田日記」から 戦時中の船浮要塞

上：要塞陣地の一場面（場所不明） 下：人力による道路開削工事（場所不明）



図版15 船浮要塞の調査状況
上：聞き取り調査（白浜公民館にて）
中：調査地への移動（内離島）
下：遺構の伐開状況（内離島砲台跡）



図版16 船浮要塞の調査状況

上：遺構の実測状況（内離島砲台跡）

下：遺構の所見書留（外離島 ⑫防空壕）

謝辞

本稿を作成するにあたって、下記の方々に分布調査の御教示・御協力を頂いた（敬称略）。城間良昭（沖縄県平和祈念資料館）、通事孝作（竹富町町史編集室）、石垣金星（沖縄県文化財保護指導員）、栗野ユリ（竹富町西表祖納在住）、大田静男（石垣市教育委員会）、仲盛敦（竹富町教育委員会）。また又吉純子をはじめとする埋蔵文化財センター資料整理作業員の方々に図版作成及び文章校正を手伝って頂いた。末文ながら記して謝意を表す。

いは なおき（調査課 臨時の任用専門員）

やまもと まさあき（調査課 専門員）

《註》

- (註1) 自生している松の木等を加工して大砲に見立て、敵の艦船あるいは航空機から大砲が設置されているように見せかけるためのカモフラージュ。
- (註2) 夜間に照射するサーチライトを意味する海軍用語。陸軍では照空灯と呼称。

《参考・引用文献》

- 瀬名波栄『石垣島防衛戦史』先島戦記刊行会 1970
沖縄県教育委員会『沖縄県史10 沖縄戦記録2』国書刊行会 1974
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第一集』石垣市役所 1983
沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第二集』石垣市役所 1984
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第三集』石垣市役所 1985
木崎甲子郎『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社 1985
城間良昭「船浮要塞に関する手記」『地域と文化』第40・41合併号 ひるぎ社 1987
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録 第四集』石垣市役所 1988
大田静男『八重山の戦争』南山舎 1996
竹富町史編集室『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』竹富町役場 1996
石垣市総務部市史編集室『平和祈念ガイドブック ひびけ平和の鐘』石垣市役所 1996
瀬名波栄『太平洋戦争記録 石垣島方面陸海軍作戦』沖縄戦史刊行会 1996
八重山戦争マラリア犠牲者追悼祈念誌編集委員会『悲しみをのり越えて—八重山戦争マラリア犠牲者追悼平和祈念誌—』沖縄県生活福祉部接護課 1997
米国陸軍省(和訳・菅原完、監修・岩堂憲人、熊谷直、斎木伸夫)『日本陸軍便覧』光人社 1998
大城将保『第32軍の沖縄配備と全島要塞化』『沖縄戦研究II』沖縄県教育委員会 1999
竹富町史編集室編『竹富町史資料集① 鉄田義司日記—船浮要塞重砲兵連隊の軌跡—』竹富町役場 2000
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(I)—南部編—』2001
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(II)—中部編—』2002
小笠原村教育委員会『小笠原村戦跡調査報告書』2002
平凡社『沖縄県の地名』2002
菊池実・十菱駿武『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房 2002
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(III)—北部編—』2003
歴史群像特別編集『日本の戦争遺跡』シリーズ『日本の要塞』学習研究社 2003
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(IV)—一本島周辺離島及び那覇市編—』2004
沖縄県教育庁文化課『沖縄県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書』2004
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)—宮古諸島編—』2005
瀬戸内町教育委員会『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』2005
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)—八重山諸島編—』2006

大韓民国 濟州島考古紀行

An Archaeological Tour on Cheju Island, the Republic of Korea

岸本 義彦

Kishimoto Yoshihiko

ABSTRACT: As a part of the first academic and personnel exchange program between Okinawa Prefectural Center of Buried Cultural Property and the Cheju National Museum of Korea, the special exhibition of Maritime Cultural Exchange titled 'Discovery of Prehistoric Lives -Shell Artifacts of Okinawa-' was held at the Cheju National Museum from October 10 to November 27, 2005. Over 400 archaeological artifacts were collected from various institutes in Okinawa and were introduced in the exhibition, which was favorably received. This paper reports about the process of the exchange program, and introduces the sites and archaeological materials of Cheju Island as well, making some comparisons of prehistoric cultures between Okinawa and Cheju Island.

はじめに

平成16（2004）年10月25日、大韓民国国立濟州博物館の具一會館長と張斎根學芸研究士が来所され、当センターとの学術及び人的交流を推進していきたい旨の要請と、2005年に予定している海洋文物交流特別展への協力依頼があり、当時の安里嗣淳所長が快諾の意を表し、盛本勲調査課長が涉外担当となり、国立濟州博物館との交流が始まった。

当センターが平成12（2000）年に開設して以来、公的には初めて海外の関係機関と交流を持てたことは非常に意義深いことから、今後の参考のために、事のいきさつを記録に留める。

また、濟州島で実際に見聞したことを考古学の立場から紹介する。

海洋文物交流特別展に至るまでの経緯

平成16（2004）年11月28日から12月15日までの期間、張斎根氏・李真旼氏・姜京姫氏・韓知潤氏ら4名が来沖し、当センターや県立博物館、沖縄国際大学考古学研究室、沖縄国際大学南島文化研究所や浦添市教育委員会、具志川市（現うるま市）教育委員会、北谷町教育委員会、読谷村立歴史民俗資料館などに出向き、精力的に考古資料等の調査を実施した。

年度が明けた平成17（2005）年4月には、当センターの所長及び調査課長が代わり、濟州博物館との涉外担当も必然的にわたしに引き継がれた。

4月8日から15日までの日程で張斎根氏と李真旼氏、姜京姫氏が来所し、4月1日付で赴任した田場清志所長に表敬あいさつを行った後、これまでのいきさつを説明した。当センターとしても全面的に協力をすることでのいきさつを説明した。当センターとしても全面的に協力をすることで、10月10日開幕予定の海洋文物交流特別展の展示企画（草案）をもとに今後の作業及び日程等について話し合った。その後、借用予定遺物リストに沿って遺物の確認を当センター及び関係機関で実施した。また、埋蔵文化財貸借協約書（案）についても双方で検討を重ねてか

ら取り交わすことになった。

5月17日付けで埋蔵文化財貸借協約書を締結し、国立済州博物館への貸借遺物搬出（8月15日）に向けて、諸事務手続き等を順調に行ってきました。ところが、貝製品を主体とした貸し出し資料の中に、ワシントン条約附属書IIに掲げられているシャコガイ（製品）が37点含まれていることから、輸出貿易管理例第2条第1項第1号の規定に基づいて経済産業大臣の輸出承認を受けなければ貸し出しができないことがわかった。考古資料がワシントン条約の規制を受けるということは想定外のことと、多少のとまどいを感じながら県の農林水産部や沖縄総合事務局、経済産業省などに問い合わせた結果、直接の担当部署は経済産業省貿易経済協力局貿易管理部貿易審査課であることが判明し、申請の方法について担当官と調整を進めていった。

初めてのケースであったことから、経済産業省のホームページを参考にしながら書類作成を行ったが、担当官と調整するなかで添付資料が二転三転し、実際に提出するまで3週間の日程を費やした。また、経済産業省の承認を得るまで1ヶ月もかかり、そのため、シャコガイ製品については他の貸し出し資料の搬出より1ヶ月遅れて搬出にこぎつけた。

後で聞いた話であるが、経済産業省でも考古資料を扱うのは初めてで、合議先の農林水産省でも化石ということで取り扱うことになったようである。

以上のいきさつがあったが、約400点にもおよぶ貸し出し資料については無事に搬出することができた。ちなみに、当センター以外の機関から貸し出す考古資料についても、当センターに集約してから一緒に搬出した。

搬出の際は、国立済州博物館の張斎根氏とわたしが立会い、韓国と沖縄の運送会社のスタッフが梱包作業を行った。

8月19日、那覇空港から搬出する日に運送時護送官として、わたしも張斎根氏と共に那覇空港を発ち、済州島へと向かった。済州島では国立済州博物館に赴き具一會館長に表敬あいさつし、夕方に鹿児島県からの護送官岡隆夫氏と合流した。

8月20日・21日は博物館が休館のため、張氏と李氏の案内で島内の高山里遺跡・郭支遺跡・支石墓などを見学した。翌22日は朝から搬入した資料の開梱作業と検分を行い、無事に護送官としての任務を終えた。

帰任後は特別展開催に向けての図録作成などの細部調整を行い、10月10日の開会を迎えた。当日の式典には当センター所長（代理：赤嶺正幸副所長）が招聘され、祝辞を述べた。また、10月13日には前所長の安里嗣淳氏が「沖縄先史時代の貝文化」というテーマで記念講演を行い、済州島の人たちに沖縄の貝文化を紹介した。

11月27までの特別展では多くの参観者があり、沖縄の歴史・文化について済州島の方たちに知つていただく良い機会となったようである。

12月7日の資料返却時には具一會館長と張斎根学芸研究士が来所し、無事に返却業務が完了した。税関での諸手続きもスムースにでき、貸し出しの際の煩雑さはなかった。

済州島の遺跡と遺物

ここでは済州島で見聞した主な遺跡と出土遺物を紹介し、沖縄との関わりについて述べることにする。

初めて降り立った済州島は、沖縄と同じ島国でも地形や自然環境がまったく異なる印象を受けた。火山島からなっており、最高所のハルラ山（標高1,950m）を中心に1,000m以上の山々が島の中央に

算えている。島の南西部に広大な火山灰台地が認められるぐらいで、平野部は少ない。海岸線は大半が火山岩（玄武岩）から成っており、一部に石英砂からなる砂浜があるが、サンゴ礁は形成されていない。海の状況が沖縄と違うことから遺跡の立地状況が皆目検討つかなかったが、遺跡を見学して初めて実感できた。

1. 高山里遺跡

北濟州郡翰京面高山里に所在し、一帯は「ハンジャン原」と呼ばれる海拔14～17mの広大で平坦な台地になっており、海岸近くに遺跡が形成されている。発掘調査によって「高山里式土器」と呼ばれ



写真1 高山里遺跡



写真2 隆起文土器

る原始無文土器や隆起文土器とともに石鎚や尖頭器などの石器が数多く出土している。現在は国指定の史跡に保存され、史跡公園として活用されている（写真1）。

写真2に示した土器は、口縁部に3条の隆起文をめぐらす浅鉢形をなし、九州の縄文時代草創期に属する隆起文土器に類似している。ただ、沖縄では現在のところ隆起文土器は確認されていない。

2. 上摹里遺跡

南济州郡大静邑上摹里サンイス洞の海岸近くに所在し、約1万坪余りの範囲にわたって遺物散布地と貝塚が確認されている。1988年に発掘調査が行われ、円形炉址1基と住居址とみられる遺構が検出されている。出土遺物は土器（孔列土器・赤色磨研土器など）を主体に磨製石斧、石ノミ、石鎚、叩き石などの石器類、骨針、貝釧などがある。遺物のセット関係は九州の弥生時代前期に類似している。時期的にも紀元前6世紀を越えないと考えられている。



写真3 孔列土器

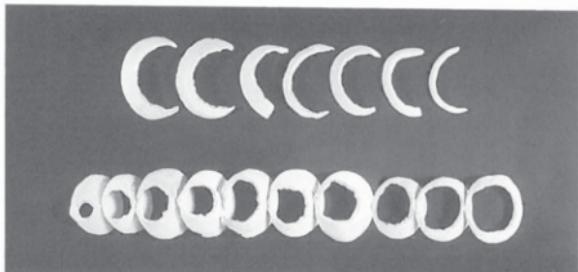


写真4 貝釧（貝輪）

写真3は孔列土器と呼ばれるもので、口縁に一列の円孔をめぐらし、口唇と肩部に刻文を施した壺形土器である。この種の土器は九州においても出土例が多く、沖縄でも宜野湾市の宇地泊兼久原遺跡で見つかっており、彼我の関係がうかがわれる。写真4はベンケイガイ製の貝鏡（貝輪）で、韓半島南東部の釜山市東三洞遺跡からも大量に出土している。沖縄ではベンケイガイが生息していないこともあり、別の二枚貝でつくった貝輪が縄文期にみられる。

3. 金寧里ケネギ洞窟遺跡

北濟州郡舊左邑金寧里に所在し、通称「ケネギ洞窟」と呼ばれる溶岩洞窟の入り口に形成された遺跡である。一帯は海拔17~20mの平坦な地形をなし、海岸からは直線にして1kmほど離れている。1991年から93年にかけて発掘調査が3回行われ、黒色磨研土器や把手付土器などの土器類、石鎌、石のみ、砥石、石棒などの石器類、鉄器類、骨角器、貝鏡など比較的多くの遺物が出土している。遺跡の主体時期は郭支里式土器の段階で3~5世紀頃に位置づけられている。九州の弥生時代後期から古墳時代に相当する。また、沖縄の貝塚時代後期中葉に属する。

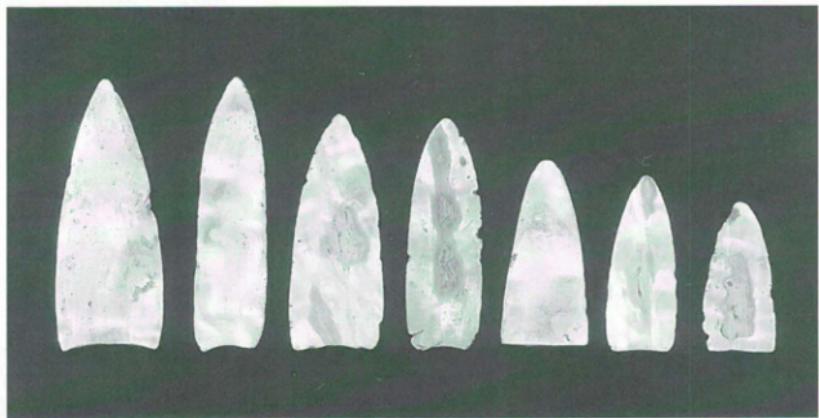


写真5 貝鏡

写真5はアビ貝を用いた貝鏡で、磨製石鏡を模倣してつくられたものと考えられ、いわゆる材質転換されたものである。沖縄では磨製石鏡の出土自体も少なく、この時期の貝鏡も皆無の状態である。ただ、貝塚時代前期にはクロチョウガイを用いた貝鏡が確認されており、貝殻を素材として道具をつくるという文化があったことは確かである。

4. 郭支貝塚

北濟州郡エウォル邑郭支里に所在する貝塚遺跡で、海拔20~30mの緩やかな平坦面に形成されている。1979年から1992年まで7地点で5回にわたる発掘調査が行われた。その結果、1m以上に及ぶ遺物包含層が確認され、最下層は青銅器時代（九州の弥生時代前期相当）の文化層、中層は耽羅時代形成期の文化層、上層は高麗・朝鮮時代の文化層から形成され、濟州島古代文化の流れを知るうえで重要な複合遺跡となっている。

出土遺物も各層から土器や石器、鉄器、骨角器、装身具、貝類、獸魚骨など多種多様にわたっている。写真6はアワビ貝を用いた貝刀（貝包丁）で、石包丁を模して製作したものと考えられる。九州でも弥生時代の遺跡から貝包丁が見つかっており、稲の穂摘み具として利用されたことがうかがえる。沖縄では、この時期に稲作文化が伝わった証左がなく、貝包丁も確認されていない。

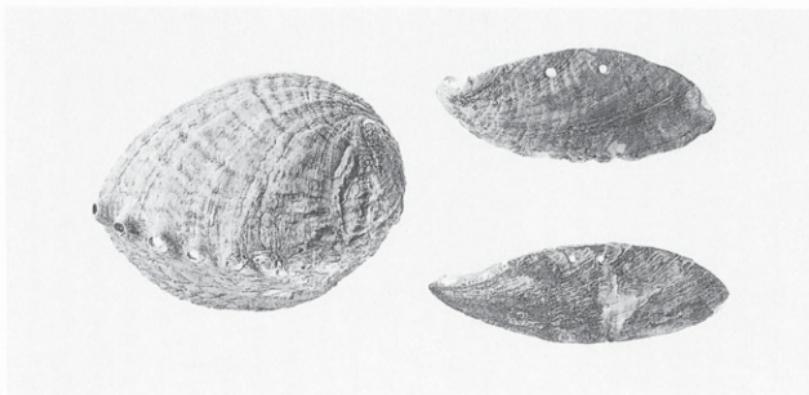


写真6 貝刀（貝包丁）

写真7はマツバガイの一端に2個の小孔を穿った製品で、
装身具と考えられている。沖縄での出土例はないが、山口
県の土井ヶ浜遺跡で出土しており、濟州島との関係がうか
がえる資料となっている。

おわりに

以上、国立済州博物館で開催された海洋文物交流特別展「先史時代 生活の発見—沖縄の貝製品—」の関わりの中で、当センターが初めて海外の機関に考古資料を貸し出しするまでのいきさつや、運送時護送官として済州島に赴き、現地で見聞した遺跡や遺物について紹介した。

考古学的見地から済州島と沖縄の先史文化を比較した場合、直接的なつながりが見えないということが言える。済州島の先史文化は基本的には韓半島からの流入であり、沖縄は九州からの文化流入が知られている。九州を介して間接的な先史文化の関わりはあったと思われるが、まだ確たる証左は得られていない。今後はより詳細な比較研究を行い、彼我の関係を明らかにする必要がある。

末尾ながら、済州島で過分な世話をいただき、また資料紹介の機会を与えてくださった国立済州博物館の具一會館長はじめ、張齋根学芸研究士、李眞旼学芸研究士ほか関係各位に深謝の意を表する次第である。



写真7 垂飾品

(きしもとよしひこ：調査課課長)

沖縄先史時代の貝文化

－韓国国立済州博物館特別展における講演記録－

Shell Culture of Prehistoric Okinawa

安里 剛淳

Asato Shijun

ABSTRACT: This paper reviews the prehistoric shell culture of Okinawa in relation to the special exhibition of the Maritime Cultural Exchange titled 'Discovery of Prehistoric Lives -Shell Artifacts of Okinawa-', held at the National Cheju Museum of Korea from October 10 to November 27, 2005. Shellfish were not only an important food source for the people of prehistoric Okinawa but also a useful raw material that supported their daily lives. Moreover, they became trade goods that fostered relations with the outside world. Shell culture provides a key to the lifestyles, culture, foreign relations, and cultural genealogy of prehistoric Okinawa.

本文は、2005年10月10日～11月27日の間、韓国済州道の国立済州博物館による海洋文物交流特別展「先史時代 生活の発見—沖縄の貝製品—」に関連して、同年10月13日に同館において開催された講演会の記録である。その内容は同展の図録に掲載された「沖縄先史時代の貝文化」とほとんど同じであるが、外国での刊行であり頒布先が限定されていることから、ここに講演の方の記録を残しておくこととした。

<講演内容>

皆さん、こんにちは！

さて、私は「沖縄先史時代の貝文化」をテーマに話をしますが、はじめに韓国国立済州博物館が、沖縄の歴史についての特別展を開催されたことに対して、心より感謝いたします。日本の南にある小さな島々である沖縄の歴史や文化について、外国の博物館が関心をもってくださることは、とても嬉しいことです。

それでは、これから沖縄先史時代の貝文化についてお話をいたします。

話の要点はお手元の冊子に掲載されていますので、その中にある貝製品の図や、図録をお持ちの方はその写真を見てもらいながら話ををしていきます。

まず1番目に、沖縄の地形環境について話します。一言でいえば沖縄は「サンゴ礁に囲まれた島々」だということです。沖縄は日本の九州島と台湾の間にあり、南西諸島の中の南半分の島々で、先史時代から人間の住んでいた地域は沖縄諸島と先島（宮古・八重山）諸島です。しかし、先史時代から王国時代には沖縄諸島の北にある奄美諸島も沖縄と同じ文化圏に属していて、この地域を含めて琉球諸島とも呼ばれています。

図1を見てください。

気候は亜熱帯に属し、島々の周囲にはサンゴ礁が取り巻いています。このようなサンゴ礁は先史時代の人々の生活にとって、とても重要なものでした。サンゴ礁の境界は外海の荒い波を碎くので、沖で白い波のリーフとなっています。そこから内側は浅く、波の少ない穏やかな礁湖（ラグーン）となっ

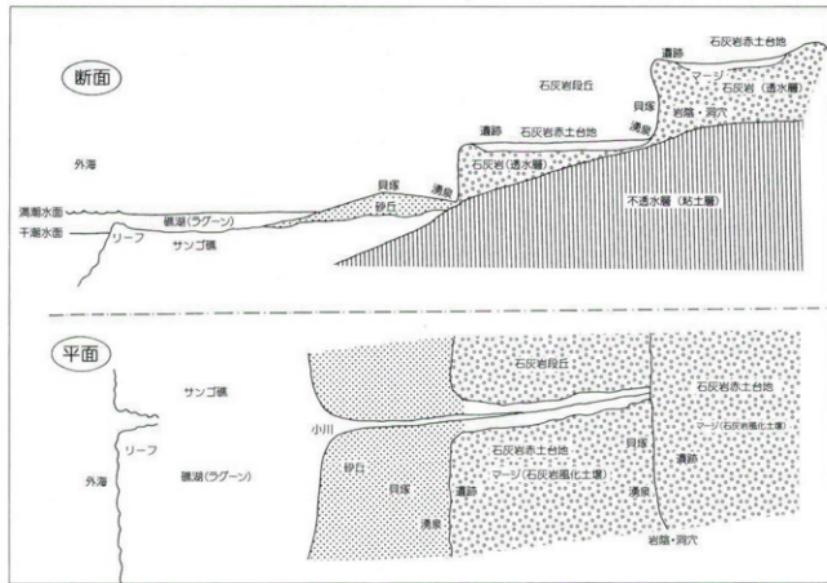


図1 沖縄島中・南部の石灰岩地帯の湧水と地形の概念図

ています。そして、礁湖には豊かな海草が繁り、多くの貝や魚が棲んでいます。

このサンゴ礁に対面する陸地は砂浜の湾と岩場の岬とが交互に連なっています。湾の海浜には後背部の陸地から小川が海に注いでいて、重要な生活用水を提供しています。

このような、サンゴ礁の海と小川をひかえた砂浜や、湧き水を崖下にひかえた近くの丘の上に、先史時代の人々が生活していました。砂浜にも、丘の付近にも海産貝の貝塚が残されているので、先史時代の沖縄の人々は、サンゴ礁の海で採れる魚や貝を重要な食料資源として利用する生活を基本にしていたことがわかります。

このようなサンゴ礁に囲まれた島で営まれた、海洋民としての暮らしを基盤にして展開したのが、沖縄先史時代の貝文化です。豊富な貝製品を生み出した沖縄先史文化を「サンゴ礁文化」と称することもあります。

2番目は、沖縄先史時代の文化圏についてです。図2を見てください。南西諸島は歴史上の古記録には「南島」と記されていることから、この南島全体を区分して、種子島・屋久島を「北部圏」、奄美・沖縄諸島を「中部圏」、先島（宮古・八重山）諸島を「南部圏」と称することもありますが、ここでは奄美・沖縄諸島以南の「琉球諸島」だけを扱うこととします。

琉球諸島の先史時代文化は奄美・沖縄諸島の「北琉球圏」と宮古・八重山諸島の「南琉球圏」にわけられます。北琉球圏は日本の縄文時代の人々が島伝いに移住してきた島々で、弥生時代にも日本との交渉が続けられています。南琉球圏は北との関係はありません、その源流は東南アジアなどの南方文化に関連するだろうと推定されています。



図2 二つの先史文化圏

南北両文化圏ともそれぞれの文化的系統は異なるのですが、いずれもサンゴ礁に囲まれた島々を生活基盤として、海洋的な暮らしをしていましたというスタイルは共通しています。そこから生み出された貝文化には、北琉球圏や南琉球圏独自のものと、両方に共通するものがあります。

3番目に、沖縄先史時代の貝塚の特徴について話します。

沖縄の新石器時代のことを「貝塚時代」ともいいますから、沖縄の先史時代遺跡からは、多くの貝殻が出土します。しかし、文化層に貝殻だけがいっぱい溜まっているような「純貝層」ではなく、ほとんどは腐植土から成っていて、その中に土器、骨器、石器、貝器などが混ざっている「混土貝層」です。

一方では、先史時代のある時期には、遺跡にはほとんど貝殻や魚骨・獸骨が残されていないという現象もあります。それは、一時的にその時期に山や海の動物の数が減ったからなのか、それとも農耕生活をしていたために、山や海の資源を採取しなかったのか、その理由はまだわかっていません。

新石器時代に最初に沖縄諸島に居住した人たちは、約6500年～7000年前頃の日本・九州方面から渡来してきた縄文時代人でした。その後約5000年前頃にも九州の縄文人が渡来してきましたが、いずれも沖縄諸島に長期的に適応することはできなかったようです。子孫に継承できないうちに人口が途絶えてしまうということの繰り返しでした。

しかし、約4000年前頃からはしだいに適応に成功し、約3500年前頃にはほとんどの島々に拡散して住むようになりました。このように、沖縄諸島の先史人の生活には、渡来と、適応、拡散の長い歴史があります。

ところが、全体を通して共通するのは、はじめから沖縄諸島の先史人たちは、サンゴ礁の海の貝や魚を利用しておらず、遺跡に貝塚を残しています。おそらく、かれらは出発地の九州においても、元々海岸地域に住んでいた海洋民だったものと考えられます。

そして、約2千数百年以前の先史時代後期には、海洋への適応が最高潮に達し、サンゴ礁に囲まれた礁湖（ラグーン）を主な食料資源の場とする、海洋民としての暮らしと文化を発達させました。貝塚はこの後期の時期が最も規模が大きく、貝の種類も多くなっています。

なお、約3500～3000年前の貝塚には、陸産貝のマイマイ類も多量に含まれていますが、それは食料ではなく、自然に集まったものが混入しただけのようです。また、淡水産の貝も少量あります、貝製品としては利用していません。したがって、沖縄先史時代の貝文化というのは、海産貝を利用する文化です。

貝塚から出土する貝の種類や量は、時期によってきまつた傾向があります。例えば、約3500～3000年前の時期にはアラスジケマンガイが多いとか、後期の前半には大型のシャコガイやサラサバテイが目立つなどの特徴があります。また、同じ時期でも貝塚によっては、ウミニナ類、マガキガイ類が特に多いなどの特徴をもっている場合もあります。

さらに、貝はその種類によって棲んでいる場所がきまっていますので、貝塚にどの種類の貝が多く含まれているかを調べれば、当時の遺跡付近の環境を推定することができます。

これによると、現在の地形環境と大きな違いはないようです。やはりサンゴ礁とその近くの外海、河口付近の干潟、マングローブの茂った湾などが、遺跡近くにあって、先史人たちがそこで貝や魚をとっていました。外海では素もぐりで貝をとりましたが、ほとんどは遠浅の海域で、干潮時に徒歩で貝を採取していました。

4番目に食料としての貝が、先史人の暮らしのなかでとても重要であったことを話します。

沖縄の先史人にとって、貝は第一に食料として採取されました。もちろん、後で話すように、先史時代後期には、交易用として特別に採取する場合もありました。しかし、ほとんどは貝を食べた後に、その殻を貝器や貝装身具などに二次的に利用したと見られます。

貝をはじめとする海産物は、先史人にとって、主な食料でした。それは、先史時代の遺跡がほとんど海岸の砂浜か、海岸に近い丘に形成されているからです。島の中央に立つと、太平洋と東中国海の両岸の海が見えるほどの狭い沖縄島ですが、それでも先史人はより海上に近い海岸に集落をつくりました。

当然、先史人は山野の草や木の実も食料にしていましたが、それよりも海産物を採取するのに便利な場所かどうかが、居住地を選ぶときの最優先の条件でした。その条件を満たした上で、水の利便や、地形的な見通しの良さ（安全性）などが考慮されたようです。このように、海産物を主な食料資源とする暮らしが、日常の生活基盤として存在したことが、貝文化の展開につながっていったといえます。

ひとつの貝塚からは最大で約300種類の貝が確認されていますが、一般には150前後の種類の貝が出土します。そのなかで、先史人が主な食料としていたのは、サザエ・マガキガイ・サルボウ・しゃこがい・サラサバテイ・アラスジケマンガイなどです。図3（写真）を参照してください。

亜熱帯の海といえども、これらの貝は年中いつでも豊富に採れたのではなく、ある程度の季節性があることは、現在の貝類の生態からも明らかです。それでは、先史人は季節に関わりなく貝を探っていたのか、それとも乱獲によって貝が減るのを防ぐために採取時期を規制していたのかについては、未だ研究が進んでなくてわかりません。あるいは、豊富な季節に採取した貝を干物にして保存し、年中食べていたかも知れません。



図3 沖縄先史人の主な食料貝

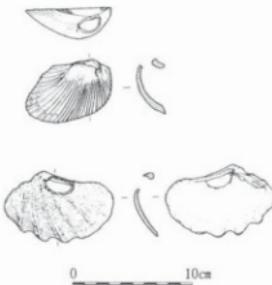


図4 網の貝錘

(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)

5番目に、用具や用品の素材としての貝の利用について話します。

貝はそのほとんどが第一に食料として採取されましたが、貝殻は食べられないで、一般には廃棄され、それが積もって貝塚になります。しかしその一部は、貝殻のもつ特性を利用して、先史人の暮らしと文化を支える用具・用品として再利用されました。

貝のもつ特性とは、第一に加工がしやすいことです。貝殻は削る、打ち欠く、割る、潰す、擦り切る、磨くなどの加工作業を受け入れる性質をもっています。ですから、いろいろな形の貝器を作ることができます。

第二に、貝のもつ自然形態です。貝殻は輪や容器などに利用する際、すでにその目的物の基本形態を備えていますから、これにさきほど言った加工作業を加えれば貝器になります。

沖縄の先史人は海産貝をよく利用して、暮らしのなかのさまざまな用具、用品を作り出しました。狩猟・漁労活動に用いる貝のヤジリ、貝の網錘、日々の生活に使う貝碗、貝匙、貝杓子、貝斧、そして装身具あるいは呪術具としてのペンダントや貝札（符）など、貝の材質と形態をうまく利用した貝文化を発展させました。

一方、貝殻が交易品として扱われた時期には、これまで採取活動をすることのなかった深い海に潜り、特定の種類の貝を意図的に採取しています。この場合は第一に交易品であり、食べたかも知れませんが、それは付隨的な行為でした。

6番目に北琉球（奄美・沖縄諸島）の先史時代の貝文化について話します。

どのような貝製品があるのかについて話すのですが、実は研究者によって用語の使い方が異なる場合もあります。そこで、最も体系的な分類をしている熊本大学教授木下尚子氏の分類を参考にして、紹介をしていきます。（木下尚子「南島の古代貝文化」『南島貝文化の研究』427~443頁、1996、法政大学出版局）

① 図4を見てください。

これは「貝錘」で、主にリュウキュウサルボウ、しゃこがい、カワラガイなどの二枚貝に孔を開けて、網の端に結んで錘としたものです。

② 図5を見てください。

これは「貝の釣り針」で、琉球諸島全体でも奄美で1個、沖縄で1個の計2個の発見で、きわめて

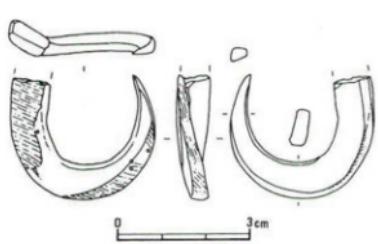


図5 貝製釣り針
(「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001)

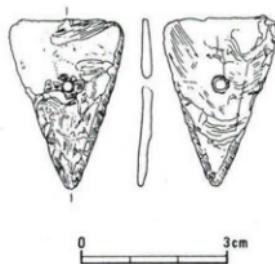


図6 貝のヤジリ
(「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001)

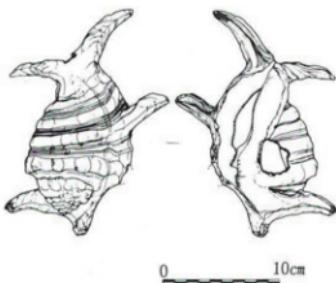


図7 貝製刺突具
(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)



図8 貝刃
(「伊武部貝塚」沖縄県教育委員会 1983)

わずかの例しかありません。このことは、沖縄では釣り漁はあまり発達しなかったことを示しています。サンゴ礁の遠浅のラグーンは、あえて捕獲効率の低い釣り漁をする必要がなかったものと考えられます。

③ 図6を見てください。

これは「貝のヤジリ」で、クロチョウガイを加工したものです。かなり薄く、3~6 cmの二等辺三角形で、中央に孔をあけたものが多いです。縄文時代並行期の古い時期から出土しています。浅い海で魚を突くのに使ったものと考えられていますが、これは装身具のペンダントだとする見方もあります。

④ 図7を見てください。

これは「貝製刺突具」で、すべて巻貝で、とくにスイジガイの突起(棘)部の先を研磨して、刃先状にしたものが多く見られます。この貝製品は海で貝などを採取するときに、突き刺して取り出す道具ではないかと考えられています。他にクモガイ・サソリガイの突起部、イトマキボラの殻軸の先を研ぎだしたものもありますが、発見数は少ないです。

⑤ 図8を見てください。

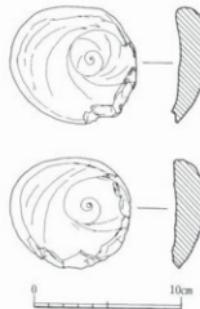


図9 貝蓋こう打器（「具志川島遺跡群
親畠貝塚」伊是名村教育委員会 1993）



図10 貝柄杓
(「清水貝塚」具志川村教育委員会 1989)

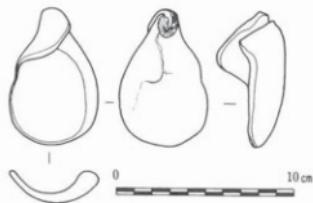


図11 貝匙（「渡具知木綿原遺跡」
読谷村教育委員会 1978）

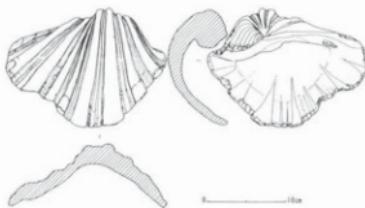


図12 貝皿
(「ナガラ原西貝塚」伊江村教育委員会 1979)

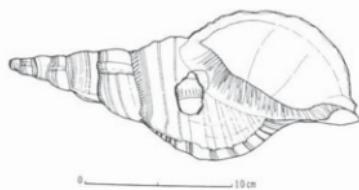


図13 貝煮沸器?
(「勝連城跡南貝塚」勝連町教育委員会 1984)

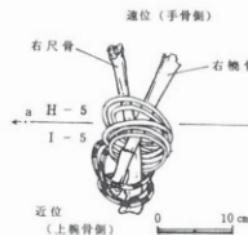


図14 貝輪(腕輪)（「具志川島遺跡群岩立
遺跡」伊是名村教育委員会 1979）

これは「貝刃」で、シレナシジミ、クロウチョウガイなどの二枚貝の縁をギザギザの刃にしたものや、磨いて鋭利な刃にしたものがあります。物を切るためのナイフと見られます。

⑥ 図9を見てください。

これは「貝蓋製敲打器」で、ヤコウガイの蓋を手でもって、対象物に打ちつける道具で、琉球諸島の広い範囲に分布します。以前は剥離した部分が刃の機能をもつスクレイパーだといわれていましたが、観察の結果、自然の貝蓋をたたいて使ったために、欠けてできたものとする見方が有力な説になっています。また、これは他の大型貝に孔を開けるときに、破損を防ぐために内側に添える「当て具」だとする見解もあります。

⑦ 図10を見てください。

これは「貝杓子」または「貝柄杓」で、ヤコウガイの自然のカーブをうまく活かして丁寧に切り取り、研磨を施したもので、一般に柄の部分も加工されています。柄は単純なものから、華麗な装飾を施したものまであります。また、柄に孔を開けたものもあります。これは祭祀儀礼用に使われたものと考えられています。なお、これまで貝匙を含めていましたが、通常の食事用のスプーンよりもかなり大きいので、杓子とするのが適当です。

⑧ 図11を見てください。

これは「貝匙」で、そでがいの水管溝のくぼみを活かして、タテ長の匙にしたもので。ゴホウラやクモガイがよく利用されています。

⑨ 図12を見てください。

これは「貝皿」です。しゃこがいの縁を軽く打ち欠き、さらに研磨を施して掴みやすくしたもので、大型と小型があり、主に食事などを盛るのに使われたと見られます。

⑩ 図13を見てください。

これは「貝煮沸器」と考えられているもので、ホラガイの腹部に一つ、または二つの孔が開けられています。民俗例で、この孔を木製の鉤で吊るして、火にかける「ぼらやかん」があることから、同様の使用が推定されています。火を受けた跡が残る貝もありますので、煮沸器であった可能性は高いようです。

⑪ 図14を見てください。

これは「貝輪または貝製腕輪」です。二枚貝の縁を残して円環状に加工したものや、巻貝の背面や腹部を加工して輪にしたものがあります。貝はオオベッコウガサ、サラサバティ、うみぎくがい、オオツタノハ、いもがい、ゴホウラなどが使用されています。

これが実際に腕輪であったことは、オオベッコウガサの貝輪を8枚腕に着けた、埋葬人骨が発見されていることからも証明されています。いもがいやゴホウラは、別項で扱うように交易品として採取され、自然貝が九州の弥生時代～古墳時代の社会に持ち込まれて、腕輪の材料となりました。そのため、運搬に便利なように多くの貝を結び、重さを減らし、しかも貝輪を作る際の成功率（歩留まり）を高めるために、交易用の貝にあらかじめ沖縄側で孔を開けておくということもありました。

⑫ 図15を見てください。

これは「貝指輪」で、いもがいやマガキガイで作られていますが、数はとても少ないです。九州弥生文化に指輪をはめる習俗があり、その影響かも知れません。

⑬ 図16を見てください。

これは「貝垂飾り（ペンダント）」です。サメの歯の形を模した貝製品で、もともとイタチザメやホオジロザメの歯に孔を開けたペンダントがあります。おそらくサメの歯が入手できない場合の代替



図15 貝指輪（「宇堅貝塚」
具志川市教育委員会 1991）

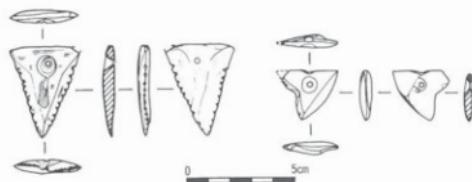


図16 貝垂飾（「シヌグ堂遺跡」沖縄県教育委員会 1985）

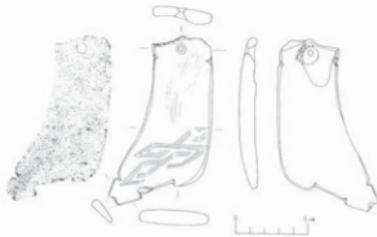


図17 屁型貝製品
（「面繩第一貝塚」伊仙町教育委員会 1985）



図18 半環状貝輪
（「地荒原貝塚」具志川市教育委員会 1986）

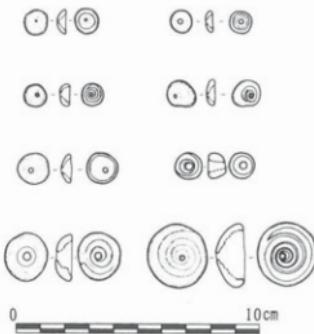


図19 貝玉類
（「渡具知木綿原遺跡」読谷村教育委員会 1978）

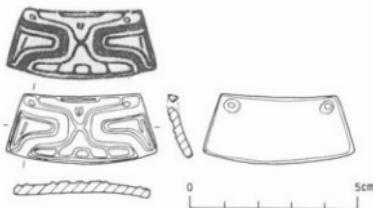


図20 貝符
（「清水貝塚」具志川村教育委員会 1989）

品かと見られます。また、サメの歯の三角形が原形となった、大型のいもがい製三角形ペンダントも作られています。

⑭ 図17を見てください。

これは「底型貝製品」で、帽子の底型に似た半月形の平たいオオツタノハ貝製品です。発見例はかなり少なく、奄美出土例は両端に孔がありますが、沖縄のものは孔がありません。南太平洋諸島の「胸飾り」に似ています。

⑮ 図18を見てください。

これは「半環状貝輪」で、完全な輪にならない弧状の貝輪です。両端に孔がありますので、二つをヒモで結んで一つの腕輪にしたのでしょうか。

⑯ 図19を見てください。

これは「貝玉」です。小玉と白玉があります。いもがいやマガキガイの端部片が波に洗われて自然に中空になったものを、そのまま、あるいは少し研磨を加えたものが小玉で、白玉は丁寧に研磨加工されています。

⑰ 図20を見てください。

これは「貝符または貝札」です。アンボンクロザメやクロフモドキなどの大型のいもがいの体層部を切り取って、表面に様式的な紋様を浮き彫りにしたものです。沖縄よりはるか北の種子島広田遺跡の下層・中層で多数出土し、そこで人骨に添えられていたことから、装身具であったことがわかりました。沖縄では久米島で中層タイプが数例発見されています。

⑱ 図21を見てください。

これは「彫刻・彫画貝製品」です。主にいもがいやゴホウラなどの厚い貝を素材にしています。縁を加工して全体像を輪郭によって表現する彫刻貝製品と、貝の表面に彫り込みをして表現する彫画貝製品があります。縄文時代並行期に骨製、貝製の獣形・蝶形の装飾品が流行し、やがて貝製が増えるようになり、後期には貝製だけになります。これらには小さな孔が開けられていますので、衣服などに装着する装身具だったものと考えられます。

⑲ 図22を見てください。

これは「貝盤」で、大型のいもがいの殻頂部を円盤状に加工したもので。中央に孔が有るものと無いものがあります。

⑳ 図23を見てください。

これは「擦り切り穿孔貝」で、たけのこがい、いもがい、ふでがいなどの表面に、主にタテ（長軸）方向に擦って、溝状の孔を作り出したもので、ていねいに仕上げています。

㉑ 図24を見てください。

これは「明器？貝札」で、貝札（または貝符）のうちの、種子島上層タイプです。これは広田遺跡では遺体に副葬された明器で、いもがいの体層部を長方形に切り取り、その表面に彫刻を施しています。沖縄諸島の先史時代遺跡からも各地で発見されていますが、人骨に伴って副葬品として出土した例はありません。

㉒ 図25を見てください。

これは「有孔貝」です。二枚貝に孔を開けたもので、埋葬人骨の上に被さるように多数置かれていたことから、副葬品であることがわかります。しかし、もともとは死者に漁網をかぶせたものが、貝の錐だけが残されているとする見解もあります。

㉓ 図26（写真）を見てください。

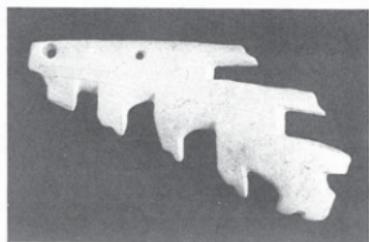


図21 彫刻、彫画貝製品
(「地荒原貝塚」具志川市教育委員会 1986)

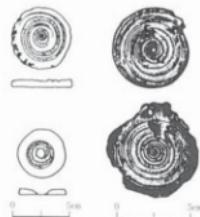


図22 貝盤（左：「崎枝赤崎貝塚」石垣市教育委員会 1987）（右：「フィリピン・デュ・ヨン洞穴」フィリピン国立博物館 1970）

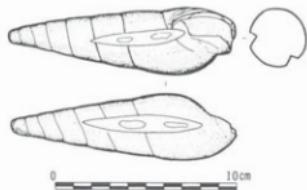


図23 撥り切り穿孔貝（「渡具知木綿原遺跡」読谷村教育委員会 1978）

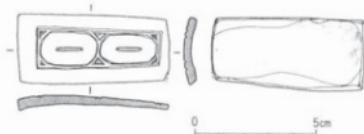


図24 明器？
(「広田遺跡」広田遺跡学術調査研究会 2003)

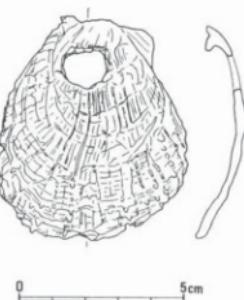


図25 有孔貝（「伊是名貝塚」伊是名貝塚学術調査団 2001）



図26 しゃこがい（「安座間原第一遺跡」宜野湾市教育委員会 1990）

沖縄先史時代の埋葬人骨の頭部付近に、加工されていない自然のしゃこがいを添える、あるいは頭をしゃこがいで囲む習俗があったことが数例知られています。しゃこがいは現在まで呪力をもつものとして門柱などに飾る習俗がありますから、埋葬遺体への添付は死者の魂を鎮めるためだと思います。貝そのものに加工はありませんが、貝文化のひとつといえます。

以上で北琉球の貝文化の話を終わり、次に南琉球の貝文化の話をします。

1番目に南琉球先史時代の貝製品の種類について話します。南琉球の先史時代遺跡からは、貝錘、スイジガイ製利器（刺突具）、二枚貝製の貝刃、貝蓋敲打器、煮沸容器、白玉、しゃこがい製貝斧、葬具としての自然貝などが出土しています。一般に南琉球先史時代の貝文化は装飾性に乏しく、貝器の種類もあまり豊富ではありません。

2番目に南琉球先史時代の貝斧文化について話します。図27を見てください。

南琉球である宮古・八重山諸島にしゃこがい製の貝斧が分布しています。南琉球の先史時代（新石器時代）は前期と後期の2時期がありますが、貝斧は後期にのみ見られます。後期は一部に約2500年前の年代測定値がありますが、一般的には約2000年前から約900年前の時期になります。

貝斧は南太平洋諸島などの、南方文化を代表する物質文化として知られていますが、先史時代から近年まで、主に丸木舟を造る工具として使用されたようです。もともとはサンゴ礁だけの島で石材がないことから、石斧の代用品として製作されたといわれています。

しかし南琉球の場合は、石斧の材料となる原石が入手できる島でも、貝斧が製作使用されています。これは、南琉球に移住してきた集団が、もともと持っていた文化的伝統を持ち込んだことを示しています。

それでは、南琉球の貝斧文化はどこから伝わったのでしょうか？ その手がかりとして、まず南琉球の貝斧の特徴を確認しましょう。第一にその材料はほとんどしゃこがいです。

第二に、しゃこがいの蝶番部を利用したものがほとんどです、第三にわずかながら貝の腹縁部を放射肋に沿って加工した丸ノミ形貝斧があること、第四に、腹縁部を利用した扁平貝斧がほとんど無いこと、などが指摘できます。

これらと比較して、ミクロネシアなどの南太平洋諸島の貝斧文化を見ると、しゃこがいに限らず数種の貝を利用した多様な形の貝斧があること、腹縁部利用の扁平貝斧が多いこと、丸ノミ形貝斧が少ないと、などが異なります。

一方、フィリピン先史時代の貝斧文化は南琉球の貝斧文化とよく似ています。したがって、南琉球の貝斧文化は、フィリピン方面に関連しているものと考えられます。

しかし、この貝斧文化は南琉球先史時代後期のすべての遺跡から出土するわけではなく、まったく出土しない遺跡と大量に出土する遺跡という偏った傾向があります。これを時期差とみるか、あるいは文化的集団の相違とみるかが課題となっています。

なお、北琉球圏でも久米島でヤコウガイ製・しゃこがい製、伊江島でしゃこがい製の貝斧が出土していますが、偶然単発的に製作されたもので、明らかに石斧を模した形であり、南琉球の貝斧とは異なります。また、文化的広がりもありません。

また、九州の鹿児島や韓国でも貝斧が発見されていますが、これは扁平貝斧で明らかに南太平洋諸島タイプです。おそらく旅行者などによって南太平洋諸島で採集された貝斧が、後に持ち込まれたものだろうと思います。

3番目に、スイジガイ製利器について話します。これは南北に共通する文化で、しかも他の地域で



図27 シャコガイ製貝斧（「長間底遺跡」沖縄県教育委員会 1984）

はほとんど分布しない、琉球圏独自の貝器です。スイジガイの突起（棘部）の先端を刃状にし、体層部を握り部分として使用したと考えられますが、実際の用途は未だわかりません。おそらく海底から貝を採取する掘り具、何かを突き刺す用途なのかも知れません。

一方、それは実用だけではなくて、なかにはスイジガイに呪力をもたせるために、擬似的な刃部をつけ、これを吊るしたりして魔除けとしたものもあるかも知れません。なぜならば、現代まで沖縄には魔除けや災厄除けの呪具として、加工はしないがスイジガイを家畜小屋の前に吊るす習俗があるからです。

以上で、南琉球の貝文化の話は終わり、次に再び北琉球に戻って、貝交易の話をします。

1番目に貝交易のあらましを話します。

貝交易は正確には「貝殻交易」です。中身の肉が干物や漬物にされて交易されたのではなく、貝殻が腕輪や螺鈿細工の材料として交易の対象となったわけです。約2千年余り前、九州沿岸部の弥生時代人が沖縄にやってきて、貝輪の材料として大型の貝を求めたのが始まりで、それから数世紀の間続きました。沖縄側からすると、弥生社会の需要に応える、すなわち「貝を求めて来たので、準備して提供する」という受身的な交易だったように見えます。

農耕が普及し、新しい階級社会、古代国家を築きつつあった九州弥生時代の首長層や、それと一緒にをなす司祭者層は、その権威のシンボルとしてさまざまな装身具を身につけて威信財としました。

そのなかで、おそらく司祭者たちが美しい輝きと渦巻き状の形をもつ卷貝を好み、これを腕輪として着表す習俗が流行したのでしょうか。その腕輪の材料となったのは、暖かい沖縄の海で採れるゴホウラ貝やいもがいでした。ゴホウラ貝製腕輪は男性が、いもがい製腕輪は女性が着表するという傾向もありました。

これらの貝輪は沖縄で造られたのではなく、九州北部に貝殻が運ばれて腕輪に加工されました。そして、弥生社会のリーダー層が貝輪を着表する習俗は、九州だけでなく日本各地に広がりました。遠くは北海道まで達しています。

沖縄へ貝を求めて渡来してきたのは、九州沿岸の弥生人たちでした。それに応えて沖縄側では、ゴホウラ貝やいもがいを予め採取して蓄えていたようです。沖縄先史時代後期の遺跡から、整然と並べられたいもがいやゴホウラ貝の集積遺構が、しばしば出土していることからそれがわかります。

ゴホウラ貝はサンゴ礁湖（ラグーン）にではなく、外海の水深10余mの深いところに棲んでいます。実は今でも多数棲んでいるにもかかわらず、方言名は伝わっていません。それは、この貝交易の時期だけ外海に潜り、九州からの需要がなくなるとまったく採取しなくなつたので、地元にさえ忘れ去られてしまつたと考えられます。

ところで、いもがいやゴホウラ貝を提供した沖縄先史時代人は、見返りに何を受け取つたでしょうか？ 沖縄の遺跡からは九州の弥生土器がよく出土します。しかし、土器は沖縄にもありますから、交易の対象ではなかつたと思います。その中身が交易の対象だったかも知れません。

それは弥生社会に普及した米ではないかという説があります。しかし、当時の沖縄の遺跡からは米や稻作の証拠はまったく発見されていません。鉄器や青銅器も少量出土していますから、あるいは金属器が対価かも知れません。特に金属器は貴重品で、伝世されていきますから、遺跡では少なくとも、実際にはその数倍、数十倍の金属器がもたらされたとも考えられます。

貝交易は日本の古墳時代まで続けられますが、7世紀頃には需要がなくなつて途絶えてしまいます。ところが、この時期以降、奄美諸島から八重山諸島にかけて中国唐代の錢貨「開元通寶」が遺跡から出土します。そして、同じ時期に（同じ遺跡からではありませんが）大型卷貝のヤコウガイが出土する遺跡があります。

この二つの現象を結びつけて、ある考古学者は中国唐朝の螺鈿工芸の材料として、琉球諸島のヤコウガイが交易によって中国へもたらされたのではないかと主張しています。琉球と中国の間に貝交易が存在していたのではないかというわけです。

そして9世紀には日本でも螺鈿細工が発達し、日本とのヤコウガイ交易がおこなわれるようになつたのではないかという作業仮説を立てています。さらに11~12世紀頃、琉球諸島全体を通して、九州産の石鍋、奄美徳之島産の須恵器（カメヤキ）、中国産磁器などが回るようになります。この現象についても前述の学者は、沖縄のヤコウガイを求めて来た交易集団が、その対価として運び込んだ交

易品であったと理解しています。

このような理解をもとにその学者は、おそらく九州福岡の博多港を拠点とした交易ネットワークが、琉球圏にまで延びてきたのであろう、そしてヤコウガイ交易の展開のなかで、稻作が琉球に導入され、農耕社会・階級社会へと向かうようになった、こうして、中国や日本との貝交易が、沖縄の経済と社会の変化を促す重要な契機となったのではないかと推定しています。

しかし、この仮説には肝心なことが抜け落ちています。そもそもヤコウガイが集中的に出土しているのは奄美諸島のいくつかの遺跡にすぎず、沖縄諸島ではほとんど発見されていません。したがって、7世紀頃から12世紀頃にかけて、沖縄諸島人がヤコウガイ交易をしていたかどうかはまだ明確ではありません。ただし、9世紀以降の日本社会に、ヤコウガイが螺鈿工芸の材料としてもたらされているのは事実のようです。

2番目に貝交易は沖縄の農耕開始と階級社会形成に関与したかどうかについて話します。

九州の貝交易集団と沖縄先史人が交渉関係をもつなかで、すでに農耕社会に入っていた九州の稻作が沖縄に伝えられ、それが普及して、やがて沖縄の経済・社会の変化を促したとするのは、大局的、長期的には正しいと考えます。

しかし、九州と沖縄の関係は貝交易だけではありません。沖縄諸島と九州との間には、情報圏、交渉圏が繩文時代以来強弱の差はありながらも、存在し続けていました。そのようなゆるやかな関係のなかで、沖縄側が真に必要としたときに稻作を導入したのだろうと思います。

米はあらゆる条件のもとでも、すぐれた食料だとするのは妥当ではありません。なぜなら、あれだけ盛んにいもがい、ゴホウラ貝交易を展開した弥生時代並行期に、沖縄先史人たちは稻作を導入した形跡がまったくないからです。反対に、その時期は沖縄先史時代のなかで、最も自然物採取が豊かな時期であったことがわかっています。

したがって、米は貝交易の対価ではありませんでした。選択の問題として稻作農耕の情報を提供されながらも、これを受け入れなかった時期があったわけです。貝交易を主体に九州・日本と沖縄の交渉・影響関係が展開したかのように考えるのは、当時の状況を一面的に捉えてしまう恐れがあると考えます。

3番目に、韓国と沖縄の貝文化との関係について少しだけ話します。

すでに5世紀には、韓国南部で沖縄産と見られるゴホウラ貝製釦（腕輪）が伝わっているようです。また、5～7世紀頃の遺跡で、いもがいを嵌め込んだ馬具が7箇所で発見されているそうです。この調査研究をした学者によれば、おそらく九州からもたらされたいもがいが、韓国において馬具の金具の中に嵌めこむという新しいデザインとして使われるようになったもので、そのいもがいは沖縄産だろうということです。そして、その後韓国の馬具文化が日本に伝わり、元々いもがいの装飾になじんでいた日本でも、馬具に嵌め込むことが流行したようです。

4番目に、中国と沖縄との間に貝交易が存在したかどうかについて話します。

この課題はあまりに壮大でよくわかりませんが、中国の文物は古くは明刀銭、五銖銭が、7世紀以降には唐代銭貨「開元通寶」が出土しています。12世紀以降は磁器が出土します。これらの文物は中国との直接交易によってもたらされたものなのでしょうか？ そして、そのどれかは貝交易の対価だったのでしょうか？ 中国との貝交易の存在そのものが不明ですので、これは今後の大きな課題といえます。

それでは最後にまとめの話をします。

沖縄はサンゴ礁に囲まれた小さな島々です。島を取り巻く浅い海には多種多様な魚や貝が棲み、先

史時代の人々にとって重要な食料資源となっていました。そして、貝殻はその美しい形と光沢、加工を容易に受け入れる手ごろな材質をもつことで、暮らしのなかの用具・用品や身を飾るもの、あるいは邪気をはらう呪具として、積極的に利用されてきました。

やがてその一部は交易の対象となり、九州との貝の道が通じることとなりました。また、ヤコウガイの交易が存在していたことも解明されようとしています。

一方、南琉球ではしゃこがい製の貝斧文化が先史時代後期に流行しましたが、それは文化的伝統としてもたらされたものであり、その集団の故郷を探る手がかりになります。また、スイジガイ製利器は琉球諸島地域にだけ見られるもので、独自の貝文化を展開しています。

貝は沖縄先史時代人にとって貴重な食料であり、暮らしを支え、便利にし、彩る重宝な素材であり、時には外部との交渉関係を取り持つ交易品にもなりました。そして、これらの貝文化は、沖縄先史時代人の生活と文化、対外関係、さらには集団および文化の系譜を知る手がかりともなるものです。

以上で、私の沖縄先史時代の貝文化についての話を終わります。

ありがとうございました。

(あさと しじゅん 前沖縄県立埋蔵文化財センター所長)

マレーシア・シンガポール海洋関係博物館見学会の記録

A record of visit to Malaysian Singaporean marine museum society concerned

片桐千亜紀・宮城弘樹

Katagiri Chiaki・Miyagi Hiroki

ABSTRACT: This report is the record that visited Malaysian Singaporean museums for four days until from June 27, 2005 to June 30. The institution which I observed is the Singaporean Department of Public Safety / container terminal (PSA) / civilization museum / Coat caning remains in national history Museum / national museum (Kuala Lumpur), Malacca ocean museum / Malacca history Museum / Saint Paul church (Malacca), Singapore in Malaysia. Underwater archaeology was prosperous, and Malaysia was able to watch a submergence ship-related document at many museums. There were Okinawa and the thing which resembled it, and the ceramics in a to 15 century were able to find a commonality of the history in the 14th century when I watched it in a holed shell of a spoon and a product made in batik Batty of a product made in turbo which I excavated with a burial human bone from a to 10 century and remains thought about in the ninth century when I looked elsewhere in a national museum, Singaporean Coat caning remains. The Sea of Japan thing public information association which took the furtherance of a Japanese foundation planned this visit society and participated.

1. はじめに

去る2005年6月26日（日）～7月1日（金）にかけて、日本科学財団の助成金を得た日本海事広報協会が企画した「マレーシア・シンガポール海洋関係博物館等見学会」に参加した。マレー半島南端のマラッカ海峡では琉球王国が海外貿易で繁栄していた時代、活発に貿易を行った記録がある。また、水中考古学も盛んで多数の沈船調査を実施しており、専門の研究員もいるという。筆者らは主にこれら「琉球関連について」と「沈船調査の事例」の2つの視点から、情報を収集し勉強することを目的とした。沖縄本島からマレー半島までの道のりは遠かったが、初めて訪れる多民族国家の地は刺激に満ちており、充実したものであった。その記録について概要をここに記す。

2. 旅の日程

1日目：6月26日（日） 沖縄→成田

沖縄から千葉県成田に移動。

2日目：6月27日（月） 成田→クアラルンプール

成田空港発（12:35）→ クアラルンプール着（18:35）。宿泊The Regent。

3日目：6月28日（火） クアラルンプール→マラッカ

A. マレーシア国立歴史博物館、B. マレーシア国立博物館。夕方マラッカ着。

セント・ポール教会跡。宿泊Hotel Equatorial。

4日目：6月29日（水） マラッカ→シンガポール

C. マラッカ海洋博物館、D. マラッカ歴史博物館。夕方シンガポール着。

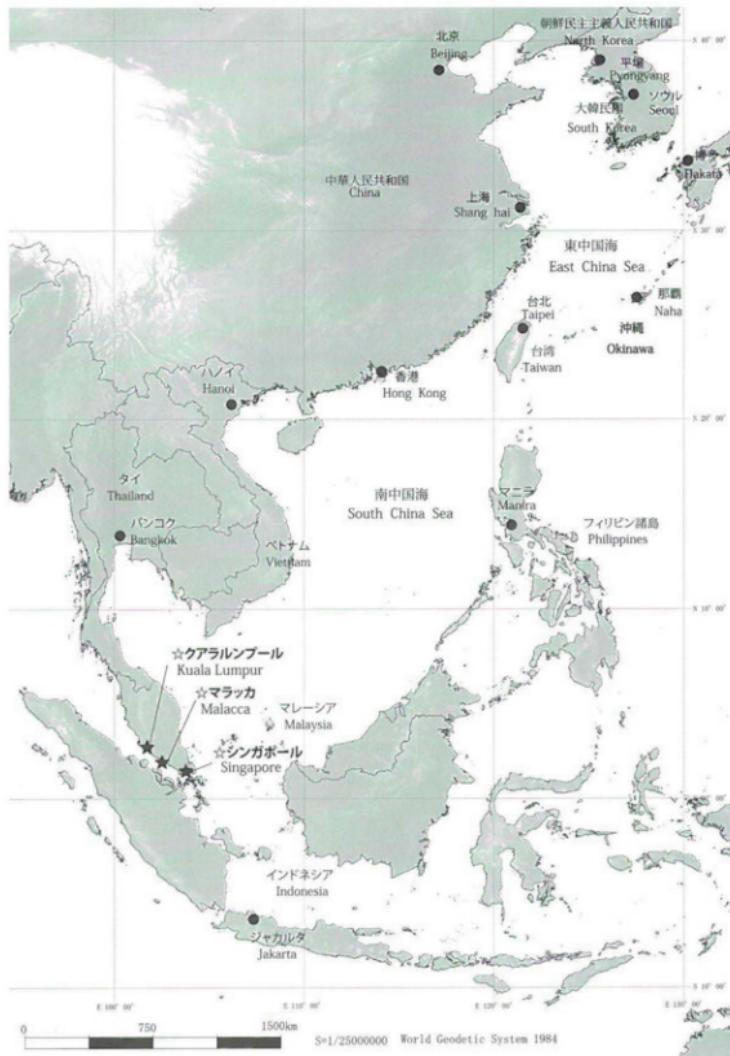
宿泊MERITUS MANDARIN。

5日目：6月30日（木） シンガポール→成田

E. PSAコンテナターミナル、F. アジア文明博物館、G. コートカニング遺跡。夕方シンガポール発。

6日目：7月1日（金） 成田→沖縄

→成田着（6:40）。成田空港から沖縄へ移動。全日程終了。



第1図 クアラルンプール・マラッカ・シンガポールの位置

3. 参加メンバー

石川慶二（日本海事広報協会）、石原義剛（団長、海の博物館）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、瀬戸久夫（財団法人千葉県文化財センター）、山本哲（東京都港区立港郷土資料館）、飯沼一雄（船の科学館）、上出純宏（みくに龍翔館）、斎藤義郎（吳市海事歴史科学館）、前田秀人（平戸市役所）、岡山芳治（松浦史料博物館）、木村幾多郎（大分市歴史資料館）、宮城弘樹（今帰仁村教育委員会）、片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）、市岡卓（日本海難防止協会シンガポール連絡事務所） 以上14名

4. 研修と旅の記録

1) 成田そして旅立ち

成田への移動。片桐は朝早くの飛行機で羽田に移動し、成田のホテルへと先にチェックインをすませた。宮城が携帯電話という文明の利機を有しないため、何時に合流するのかわからず、ひたすらホテルにて到着を待つことになった。その夜、毎週見ている大河ドラマ『義経』に熱中している頃、ようやく宮城が到着した。『義経』を見終わり、二人は夜の居酒屋へと移動した。これから始まる未知の世界への希望について、焼酎を飲みながら熱く議論（？）を交わした。居酒屋では、つまみの注文をする宮城のなまつた日本語（発音）が店員に聞き取れないという事件がおきた。翌日は成田空港に10:30集合であったが、案の定遅刻していき多くの人に迷惑をかけた（すみませんでした）。12:25、飛行機に搭乗して宮城は早くもスチュワーデスにビールを注文。

2) クアラルンプール

18:35（現地時間）、ようやくマレーシアの首都、クアラルンプールに到着した。バスにてリージェントホテルに移動したが、車窓から眺めた夜のクアラルンプールはその広大さと異国情緒溢れる町並みの美しさと見とれた程である。そういうばマレーシアはネイティブに加え、中国系、インド系等が混在する多民族国家であり、人口密度も日本と比較しても薄い。ホテルではチェックインをしたのち、酒を求めて繁華街に繰り出した。しかし、イスラム教徒の多いこの地域は酒を豊富に揃えている店を探すことができず、街をウロウロと彷徨うことになってしまった。ビールを買って部屋に戻り酒盛りを始めた。窓から眺めた夜景を肴にビールはすすみ、名所であるツインタワーの美しさに心地よく酔い、明日への期待を膨らせた。



写真1 ツインタワー（部屋の窓から）

A. マレーシア国立歴史博物

9:00にホテルを出発しバスにて国立歴史博物館に向かう。建物自体が歴史的なものであり、当初はインドの銀行として1888年に建設され、第2次世界大戦では日本軍の通信基地として利用された。1991年に博物館としてオープンした。敷地は21,000m²、現在は無料で見学することができるが、年内には

見学科を取る予定とのこと。メディアに積極的に広報活動をしており、小中学生を対象に体験学習等を実施している。国立大学との共同調査も実施しているという。館内は先史時代から近現代まで総合的な遺物を展示している。

特に目を引いたのは、埋葬遺構のレプリカである。AD 9世紀～10世紀頃の遺跡で、埋葬された人骨の副葬品としてヤコウガイの匙・サラサバティの貝輪が出土していることを確認することができた。



写真2 マレーシア国立歴史博物館



写真3 館長他との懇談会



写真4 埋葬遺構検出状況



写真5 貝輪出土状況

B. マレーシア国立博物館

本博物館は1963年にオープンした。伝統的なマレー建築によって建設されており、敷地も広大である。興味深かったのは、マレー地方には洗骨した人骨をビルマから輸入した甕に入れ、住居の下に埋葬する風習があることである。いよいよ片桐が最も興味を持っていったマリンギャラリーの見学をした。有名なダイアナ号を始めとした、マレー半島沿岸海域で発見され、調査された沈没船関係の遺物を多数展示している。特に船体が検出された状況をジオラマとして展示している様子は、雰囲気が伝わるすばらしいものであった。陶磁器群の一部は、沖縄の多良間島高田海岸で表採される陶磁器群（1860年に同海岸沖で沈没・座礁したファ



写真6 沈船検出状況 (ジオラマ)

ン・ボッセ号の積荷と考えられる）と酷似する。マレー半島沿岸海域では多数の沈没船及び関係遺物散布地が確認されており、館長の話ではこのように多数の沈没船が発見された経緯は、そのほとんどが漁師や民間からの情報であるという。

3) マラッカ

人口70万人を要する歴史深い街である。夕方、メンバーと中国人居留区（チャイナタウン）の骨董屋を物色しつつ、セント・ポール教会跡の見学をした。この教会はかの有名なフランシスコ・ザビエルが日本からの帰りに寄り、7年間を過ごし、死亡した場所である。彼の遺体は9ヶ月間この地に埋葬されたが、その後発掘され、インドのゴアで再度埋葬されたという。琉球王国時代の琉球人がこの遙か遠い地で活発な貿易活動を展開していたかと思うと、街並みひとつが感慨深かった。夜、再び酒を求めて夜の街を徘徊した。やはり酒が見つかず半ば諂ひかけた所で、ようやく『7つの海』というすばらしい名前のウイスキーが購入できた。部屋では木村幾多郎氏を交えて陶磁器の流通について議論をしつつ酒盛りをした。



写真7 マラッカ河口



写真8 マラッカの町並

C. マラッカ海洋博物館

本博物館はマラッカ川の脇にあり、マラッカの中でも一番人気のある博物館とされている。1512年にマラッカを攻撃して沈没したポルトガル船『フローラ・デ・ラ・マール号』を復元し、船内には実際に沈船から回収された遺物を展示している。ここにもダイアナ号の遺物が展示されている。ダイアナ号関係の遺物は、マレーシアの各博物館で分けてそれぞれ展示しているようだ。この他、中国・ヨーロッパを中心とした様々な地域の船舶模型が展示されている。



写真9 フローラ・デ・ラ・マール号



写真10 沈船から回収された遺物

D. マラッカ歴史博物館

本博物館は1641年にオランダの総督府として建設されたものである。マラッカは貿易の中継基地として次々と列強に占領された歴史を持つとともに、東と西を繋ぐ重要な港として繁栄をした。文献にはこの地でレキオ（琉球人）と交易をした記録が残っており、琉球王国の人々がみずからこの地まで訪れていたことがわかっている。1400年～1511年までは独立国マラッカ王国として中国や周辺諸国と貿易を展開する。ちょうど沖縄が繁栄を極めた時期と似ている。1511年～1641年までは大航海時代を迎えていたポルトガルによって占領され、城塞が建設された。1641年～1824年までは、当時、飛ぶ鳥を落とす勢いがあったオランダによって占領された。1824年～1957年まではイギリスによって占領されていた。イギリス占領時代の1942年～1945年までは第2次世界大戦によって日本軍が占領していた。この博物館のオフィスルームには、なんとデヴィ夫人の写真が飾ってあった。

マラッカを離れる際、車中から中国人が葬られている墓が集中する丘が見えた。いわゆる亀甲墓が丘陵の斜面に並んでいる。「もしかしたら、琉球の時代に船上で没した琉球人が葬られているのでは」そんな冗談を交わしながらマラッカを離れた。短期間では琉球人の足跡を訪ねることができなかったが、私達にとってはまた訪れたい街のひとつとして深く記憶された。



写真11 マラッカ歴史博物館

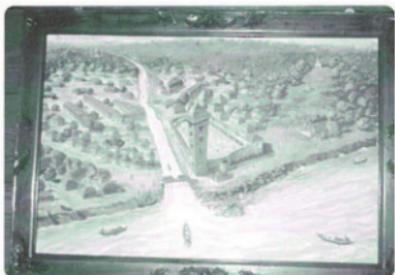


写真12 オランダ領時代のマラッカ



写真13 亀甲墓群の丘

4) シンガポール

シンガポールへ向かう途中、国境を越えるため入国手続きをした。シンガポールでは国外からのタバコの持ち込みには高額関税がかけられる。すでに入国審査直前までタバコを携帯していた研修メンバーの喫煙者は高額関税に恐れ慄いた。シンガポールへ到着。驚くほど綺麗な街である。小さな国のために、ゴミ等の処理にはことのほか気をつけている。シンガポールは交通渋滞等を緩和するため車は驚くほど高い、ざっと日本の5倍だと言う。その代わりバスやタクシー等の交通機関がとても安い。また、シンガポール人は肉体労働がきらいで、道路建設等の各種工事や清掃業等は外国人労働者を雇用して労働力としている。マレーシアより国境を越え日帰りで通うものが多いとう。ホテルへチェックイン後、タクシー（安かった!）で屋台街へ行き夕食を食べる。

E. PSAコンテナターミナル

世界第1位（当時）のコンテナターミナルである。ここは世界中から集まった船舶が荷物の積み替えを行い、再び各地へ散っていく場所である。最新のコンピューター技術を導入し、徹底した管理の下で無駄のないスピーディーな積み替えをする。巨大なクレーンが乱立し目まぐるしく動くさまは、圧巻であった。いかに無駄なく円滑に積み替えを行って、再び船を出航させるかがコンテナターミナルとして重要な要素であとという。昼食時に飲茶を食べたレストランは、ターミナルとシンガポール海峡が見渡せ、沖には多数の船が停泊し、さらにその向こうにはインドネシア領であるボルネオ島がうっすらと見えるという絶好のロケーションであった。この海域は東西海上航路の要衝地として国際的に重要な場所でありつづけている。



写真14 コンテナターミナル



写真15 海峡で待機する船舶

F. アジア文明博物館

博物館の前面にはかの有名なラッフルズ像が建っていた。この博物館でもっとも良かったことは、9世紀、唐時代の沈没船黒石号から引き揚げられた陶磁器群が展示してあったことである。唐代の陶磁器群などは普段なかなかお目にかかれれない代物であり、かなり興味をそられたが、じっくり観察することができず、写真に残すこともできなかつたのが残念至極であった。他の展示は文明博物館というだけて様々な時代と国の遺物が多数展示しており、見たえも充分、再び訪れたいと思わせるものであった。



写真16 アジア文明博物館

G. コートカニング遺跡

夕方、黒住耐二氏・宮城・片桐の3名はわがままを言って、コートカニング遺跡の見学をした。この遺跡は小高い丘に立地しており、マラッカ王国時代は聖域とされていたようだ。興味深かったのは中国産陶磁器が多量に出土していたことである。マラッカ王国時代の中国や周辺諸国との交易を物語るものと思われるが、中継貿易を展開していた琉球王国よりもたらされた遺物が含まれている可能性もあると想像すると、じっくりと比較検討をしてみたくなった。



写真17 コートカニング遺跡の遺構展示



写真18 出土遺物

5) 帰路

ついに日本へそして沖縄に帰る時がやってきた。バスにて空港へ向かう。空港で最後のお土産を購入した。宮城は残った金でビールを購入したがったが、ギリギリ足りなくて断念した。飛行機内でさっそくスチュワーデスにビールを要求していたことは言うまでもない。

4. おわりに

ハードなスケジュールであったが、訪ねる先々の場所が新鮮で刺激的な旅であった。原始・古代については南島文化との関係について、中世・近世においては琉球王国との交易・交流の痕跡について興味を持って参加した見学会であった。新しい知見を得るとともに、多くの方々と出会ったことは貴重な財産となり、参加してよかったですとつくづく思えた。空港では出発直前まで酒を求めて彷徨ったことが忘れない。思えば、宮城は常に酒を求め続けていた旅であった。沖縄からマレーシア・シンガポールへ旅立たれる方は、泡盛の持参をお勧めする。この見学会で得た興味深い情報についてまとめたい。

- 1) 古代においては埋葬人骨とそれにともなう貝輪や貝匙といった、沖縄で出土するものと似通った製品が副葬品として出土している。
- 2) マレーシアでは遺体を風葬した後、洗骨して甕に収め、住居の床下に埋葬する風習があった。その甕はビルマから輸入したものである。
- 3) 水中考古学が盛んであり多数の沈没船調査がされている。沈船調査は企業と実施することが多く、資金は企業から出資される。調査前に予め出土品の分配方法等について協議を行い、合意が整った後に実施する。企業は分配された出土遺物を売って資金回収する。
- 4) マラッカ王国時代は小高い丘陵を聖域としており、14~15世紀の遺跡からは沖縄と類似する組成の陶磁器が出土する。

最後に、このようなすばらしい見学会の機会をあたえて下さった日本科学財団及び日本海事広報協会の方々、そして、共に参加し、快適な旅にしてくださったメンバーのみなさんに感謝いたします。いずれまたお会いして、このような旅ができるることを願っています。

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会)

紀要

沖縄埋文研究 4

発行年 2006年(平成18)3月30日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

印 刷 (株)東洋企画印刷
〒900-0024 沖縄県那覇市古波蔵4-1-1
TEL 098-831-7404 FAX 098-931-9958

BULLETIN
OF
THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA
No.4

Summary of Excavation

1. Ikeda-Uehara Tomb

..... Nishihara-cho Board of Education /
Okinawa Prefectural Center of Buried Cultural Property (1)

Papers

2. Typological Comparison of Southern-island Nail-marked Pottery
-In Reference to Kyushu Nail-marked Pottery- Ito Kei (41)
3. Cut Marks on Animal Bones Found in the Lower Layer
of the Shinjo-Shimobaru Site, Location 2, Zone II Kugai Mitsugu (55)
4. Assemblage of Coin Types Found in the Shuri Castle Site Nagahama Tatsuki (73)
5. A Discussion of the Funauki Fort Site on Iriomote Island Iha Naoki, Masa'aki Yamamoto (81)

Reports

6. An Archaeological Tour of Cheju Island, Republic of Korea Kishimoto Yoshihiko (105)
7. Shell Culture in Prehistoric Okinawa Asato Shijun (111)
8. A record of visit to Malaysian Singaporean marine museum society concerned Katagiri Chiaki, Miyagi Hiroki (127)

2006

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER